

佛の聲

安溪雅亮師作

名號六字で助けんと
誓ふた願ひあらはれて
鬼の口からお念佛
稱ふる聲はおれの聲
お前の穢い口を借り
そのまま任せと呼びたつる
切ないおれの胸のうち
きいてくれぬかきこえぬか

は し が き

『佛の聲』は、私達の慈愛なる恩師、安溪雅亮先生の作歌約三千を蒐めたものであります。

内、大部分は和歌であり、あとは俚謡調、七五調、發句の態のもの等であります。

和歌の態でなされた先生の作歌の總數は、今日では約十萬に達するであらうと思ひます。先生の和歌の特徴は、多くの場合その一首一首は個々に獨立しては作られず、幾首か連作せられて行て、始めて其處に一聯の歌意の完成を見る所にあります。かうした連作歌の中には數首又は數十首を以て成つた短篇もあり、數千首、數萬首から成つた長大篇もあります。先生の觀經疏、論註、涅槃經、四十八願等の諸講録の中に、各章毎に其章の尾りに「重頌」といつた態を以て作られたものは、その長篇の部に屬すべきものであります。今『佛の

『佛の聲』はかうした系統的な長太作と異り、先生が折にふれてその偶感を詠まれた比較的短篇なものを集めたものであります。

『佛の聲』は全篇を分つて五部としました。第一部の「佛の聲」は作られた年月は最も早く、先生が入信後、半生の多忙な旅の生活を閉ぢて郷里に歸られます。その頃から次第に先生を周つて真摯な求道者が現はれ出しました。これが現在のわが教團の起りであります。大正五、六年頃に、これらの人々のために其頃迄の作歌を纏められ、小冊子が印行せられ「佛の聲」と名けられました。全篇悉く假名を用ひ何人の愛誦にも適するやうに工夫せられました。これは今日に到る迄、教團の一人一人の何よりの寶となり、お念佛と一緒に人々の日夜の最も懐かしい生活の友となつて居ります。今この第一部「佛の聲」は夫を其後先生が一部分改作補正せられたものであります。各篇共毎行上段から下段へと誦せらるべく、横に續くのではありません。

第二部の「雜詠集」、第三部の「譯詠集」中の諸篇の歌は、大體に於て先生の大正十一年春の大患の頃から始つて今日に到る迄に作られた最も断片的な多くの小品を蒐めたものであります。「病床雜詠」と「病床雜感」の二篇がかうした多くの短篇が生れる先駆をなした感があります。「雜詠集」、「譯詠集」の名稱は編輯の便宜のため持へました。直接經釋に關するものを「譯詠集」に收め、さうでないものを一括して「雜詠集」に入れました。發表又は製作の時と所の明らかなものは之を各篇の始めに掲げました。

「蓮如上人御一代記聞書俚詠」は、「譯詠集」に入れらるべきでありましたが作稍々大篇故之を獨立せしめて別に第四部としました。同じく大正十一年春頃の作であります。その下部に記入した數字は原文の條數を示すものであります。第五部「無題涙笑」は最も近い作であります。今年の春以來書きためられたのを、五月十三日福岡町島田氏方の御座に於て「涙が沁み出したやうに出た歌故、整頓の上發表のつもりであつたが、昨今の勝れぬ氣分ではわが健康當にな

らぬ故、今は整はぬ儘で」にて發表せられ始めました。此日發表せられた目次では全篇二十一章二百四十五首といふのでありますたが、其後次第に追作があり、六月十七日その完結を見た時には全篇三十七章六百十首の數に上るに到りました。

本書の編輯に當り限りなくお世話になつたわが師友に心から感謝します。

昭和三年七月

安吉教園内
編 者

序に代へて

此書は始め先生に題名を乞ふた時『涙笑俚詠』と名づけられました。

その時題名に附して與へられた歌八首、其の餘りに尊きに、題名後
變りて『佛の聲』となりましたが、捨て難くてこゝに掲げ序に代へ
ます。

感せまり涙はらはら落しつゝ腹をかゝへて笑ひ喜ぶ
法をさゝ涙はらはら落せども泣きすゝり無き喜び涙
かゝるもの此儘救ひ下さるゝ御慈悲おもへば泣かずにをれぬ
さりながら凡てゆるされ不足なくおもしろければ喜び笑ふ
うんとなきうんと笑ふて大膽によみし歌ゆゑ涙笑俚詠
聞く人もうんと笑ふてうんと泣く身となる歌ゆゑ涙笑俚詠

里人、田舎の人の卑俗なる言葉で詠みし歌の名俚詠人と調いやしけれども詠みし歌心から泣き笑ひうる歌

13

次

佛

10

卷之三

• 8

100

102

100

40

4

- 10 -

10

五四

二六

1

九

雜

五
劫
思
惟
詠
集

集

一	詠	しやう	〔附〕	法	じやうは	〔附〕	信	じん
二	集	しゆ	〔附〕	淨	じやう	〔附〕	の	れい
三	本	ほん	〔附〕	坡	ぱい	〔附〕	火	ひ
四	序	じう	〔附〕	璃	り	〔附〕	靈	れい
五	文	ぶん	〔附〕	鏡	きやう	〔附〕	靈	れい
一	大	だい	〔附〕	平	ひやう	〔附〕	火	ひ
二	經	けい	〔附〕	等	とう	〔附〕	靈	れい
三	要	よう	〔附〕	の	の	〔附〕	靈	れい
四	文	ぶん	〔附〕	救	きう	〔附〕	靈	れい
五	傳	てん	〔附〕	濟	さい	〔附〕	靈	れい
一	古	こ	〔附〕	西	せい	〔附〕	靈	れい
二	德	とく	〔附〕	岸	がん	〔附〕	靈	れい
三	傳	てん	〔附〕	上	じょう	〔附〕	靈	れい
四	統	とう	〔附〕	有	う	〔附〕	靈	れい
五	四	よん	〔附〕	レ	れ	〔附〕	靈	れい
一	卷	けん	〔附〕	人	じん	〔附〕	靈	れい
二	五	ご	〔附〕	喚	かん	〔附〕	靈	れい
三	段	だん	〔附〕	言	ごん	〔附〕	靈	れい
四	四	よん	〔附〕	「汝」	「汝」	〔附〕	靈	れい
五	五	ご	〔附〕	答	だつ	〔附〕	靈	れい
一	學	がく	〔附〕	半	はん	〔附〕	靈	れい
二	者	しゃ	〔附〕	問	もん	〔附〕	靈	れい
三	と	と	〔附〕	答	だつ	〔附〕	靈	れい
四	覺	かく	〔附〕	「汝」	「汝」	〔附〕	靈	れい
五	者	しゃ	〔附〕	信	しん	〔附〕	靈	れい
一	確	かく	〔附〕	信	しん	〔附〕	靈	れい
二	確	かく	〔附〕	信	しん	〔附〕	靈	れい
三	確	かく	〔附〕	信	しん	〔附〕	靈	れい
四	確	かく	〔附〕	信	しん	〔附〕	靈	れい
五	確	かく	〔附〕	信	しん	〔附〕	靈	れい

信心佛性

道元德母

信三寶

招喚勅命

三信卽一

行信の佛

回向の如來

六字の法とけ

行信の四門

所聞の能信

安住無上道

光明徳

是方莊嚴

其便讚

大十佛

是名

法 南 归

真 實 大 悲 の 弥 陀 如 來
さ て も た ふ と き み 親 か な
お 前 の し ら ぬ 昔 か ら

(正信偈依經段俚譯)

下六字は各行共頭一字を掲げ

佛

佛

の

聲

心

の

聲

安溪雅亮師作

在 お前ひとりにかゝりはて

相手にしてのない奴を

それも知らずにをる奴を

其儘なりで引受け

心配いらぬお慈悲ぞよ

きかせる力も親の慈悲

あかるいお慈悲をよくきけよ

お慈悲を邪魔するものはない

觀國建超五重普無

清

鬼のそのまゝよろこばす
慾のしたから喜べよ
腹がたつたら喜べよ
痴のしたから喜べよ

不超一

何でもかんでもおれに問へ
おれは何時でも此處に居る
泣くなら一しょに泣くまい
お前ひとりの親じやぞよ

至本

樂な念佛してくれよ
計ひ要らぬが彌陀の慈悲

成必如唯五應凡不能常貪已攝譬雲獲卽
 一聞親のいふことよくきけば
 苦のない道中せまいかや
 高歌うたうて二人連れ
 何のさわりがあるかいな
 曇つた日でも道行くに
 うたうて二人連れ
 お前はおれの一人子ぞ
 お前はおれの一人子ぞ
 釋迦を誰じやと思ふかい
 懿い奴じやとしられたか
 親の實意がきこえたか
 おれが迎ひに來たのぢやぞ
 聞えたまんまでよいのぢやぞ
 貰うたお味はかわらぬぞ
 貰うたお味はかわらぬぞ
 うけとる親は附きどほし
 よしやお前は忘れても
 喜ばれいでも苦にするな
 忘れぬ親は此處に居る
 うけとる親は附きどほし
 よしやお前は忘れても
 喜ばれいでも苦にするな
 忘れぬ親は此處に居る
 うけとる親は附きどほし
 よしやお前は忘れても
 喜ばれいでも苦にするな
 忘れぬ親は此處に居る

佛是人が讀めるぞ美むぞ

おれも喜ぶそなたまで
おれがどれだけおもうても
そなたが邪見できかぬなら
つける薬もないわいな
親の涙も水の泡

彌邪信難
お前のかみふる其六字を
活きてはたらくお六字を
若存若亡しながらも
無理にはげしく稱ふれば
勿體なくも親様は

聞かぬ昔のお念佛
稱へて居れど胸のうち

これが凡夫とおさへつけ
死神とりつく思ひなり

死人あつかひせしわしに
嫌ふてくれなと組りつき

二 佛の聲

聲

口癖人真似半自力
疑ひ計ひ眞の暗

お前の稱ふる其六字

逃げるお前を逃がさじと

いのちをこめて呼びたつる

おれの聲とはわからぬか

名號六字で助けんと

鬼の口からお念佛

誓ふた願ひあらはれて

稱ふる聲はおれの聲

お前の穢い口を借り

切ないおれの胸のうち

そのまゝ任せと呼びたつる

きいてくれぬかきこえぬか

ああら尊や勿體ない

私一人にかうもまあ

こんな愛想のつきはてた

ようこそようこそ阿彌陀様

朝な夕なにへだてなく

心配するな案するな

居るぞ居るぞと側近く

呼びかけ給ふみ聲とは

三千世界に又とはい
聲も言も絶え果て、

仕合せ者はこのわたし
先立つものは唯涙

さても尊や南無阿彌陀
あらうれしやな南無阿彌陀

あゝありがたや南無阿彌陀
あら不思議やな南無阿彌陀

三 丸 裸

死んで未來の親様と
暮し居りたる私も

段々聞き度うなつてきて

きこえさうにもあらばこそ

ほつてみようかと思うても

途方にくれてどうしようと

ほるにほられず止められず
案じわづらうそのうちに

未來どころか今現に

苦みなやむそなたをば

黙つて見て居る親じやない

そのまゝ任せそのまんま

任すに苦勞はいらぬぞや
任せといふたらそのまんま

任すに思案はいらぬぞや
どうもならないそのまんま

胸をながめて案するな
機様ながめて疑ふな

足下ながめて危むな
佗人と比べて計ふな

ならぬことも知つてをる

穢い胸も知つてをる

なつてもあかぬも知つてをる
鬼の心も知つてをる

知つて見抜いた此親が

ばかり思ひてうかうかと
どういふ不思議なお仕掛け

きいてはみたが中々に

とても駄目かと匙を投げ

聲をからしてこのやうに

色よい返事をきいてから
間違通しのそのまんま

呼ばせ通しにしておいて
お前の返事がきき度うて

小言いはずにそのまんま
裸といふても丸裸

どうじやわかるかきこえるか

任せてくれやたのむどよ
ほんとにそのままそのまんま

いやでもおうでも此度は

跳ねても狂れても逃がしやせぬ

逃げらばにけれにけてみい

にげるお前が鼠なら

あと追ふおれは猫の役
早く任せや今此處で

どうせあかぬとわかつたら

南無阿彌陀佛南無阿彌陀
永い久しい其あひだ

こんなこと、も知らないで
親様泣かせて居つたとは

世話も造作も要らぬのに

何を思ふてをつたやら
こんな奴めを眞にまあ

どうしたお慈悲な親様か

ほんに思へば思ふほど

呼んでをるのがきこえぬか
しつかりしてから任す氣か

まだも返事をきく氣かや
待ちにこがれた親じやぞや

まだも返事をきく氣かや
待ちにこがれた親じやぞや

聲も言葉も絶えはてて

先立つものは唯なみだ

寝るもおさるも光明の

聞くも尊や辱じけな

懷住居の身の上と

あら耻かしやありがたや

かなはぬ事共多けれど

業のありだけさらせども

六字の寶が胸にある

さらいたまゝがたゞお慈悲

あはれるしたから南無阿彌陀

かなはぬしたから南無阿彌陀

口説くしたから南無阿彌陀

辛いしたから南無阿彌陀

善いにつけても南無阿彌陀

何につけても南無阿彌陀

悪いにつけても南無阿彌陀

南無阿彌陀佛南無阿彌陀

四六字寶

寶

南 なにより大事な寶とは
無 無理いふかわりにお六字を

燒けず腐らぬ御名號
稱へて暮すび目出度けれ

阿 惡業そのまゝ善業に
彌 身に充ち満てる萬徳を

かわす力も南無阿彌陀
取出し喜ぶ目出度さよ

陀 たのむばかりに此世から
佛 佛力ゆへと知られたら

彌陀の大恩報すべし

三心の寫眞

(大經悲化段意譯俚讀)

いかなる人もよく聞けよ
信の力で智慧も出來

きいて信じた人はみな
勝れた功德も身に満つる

なんで念佛申さぬか

なんで聞かぬか信ぜぬか

これにすぎたる善はない
計ひいらぬ慈悲ぞよ

お慈悲の世界の有様は
思ふてみてもわからぬぞ

こんなものでもあらうかと
信じてみるより外はない

上下貴賤のへだてなく

かわらぬ味をいたどけよ
南無阿彌陀佛を稱ふべし

つきせぬ仕合せ身に受けて

命がけにてよくきけよ

きけばきこえる直ぐ取れる
心も安く身もやすし

これはこれはの別天地

きこえた信の一念に
五十一段一飛びよ

地獄の釜もうち破れて

こんな妙法なぜきかぬ

お慈悲の世界に無理はない
我計ひをうちすてゝ

ないも苦だよ御計ひ

唯はからはれ日をおくれ

かわる世界に氣をかけず
つきぬ命と樂を

かわらぬ慈悲にうちもたれ
急がにやならぬ大事をば
浮き世の事にかかりはて
得よや頂け今直ぐに

世の人すべてとりちがひ
あとにまわして果てもない

今日も苦み明日もまた
おれでなければならぬと

足らぬすまぬといそがしく
力み氣をもみ日をおくる

尊卑貴賤の差別なく
惜しや欲しやと金ゆへに

小兒も大人も男女みな
思ひをくだき身をやつす

田地家藏錢寶

衣類諸道具惜し欲しよ

心の駒につかはれて

夜もろくろくねむられぬ

下女や下男や出入人

使ふ算りで使はれて
持つた算りでしばられる

家藏田地財寶も

惜しや無念や殘念や
不時な災難おこつたり

水で田地を流すとか

火事で家藏焼けるとか
毒でも呑んだ心地なり

借りたぼされた其時は
いふにもいへぬ胸の内

かわる世界に氣をかけず
つきぬ命と樂を

かわらぬ慈悲にうちもたれ
急がにやならぬ大事をば
浮き世の事にかかりはて
得よや頂け今直ぐに

懲でかためた此心
どうでもよいわがあらばこそ

ほんの僅のことまで
死ぬが死ぬまで懲してぬ

心の毒のなかなかに
そして大事の命をば

結んでとけぬうおつらお
捨てしゆくときや丸裸

一文惜みの百知らず

阿呆の親方このわしと
此世から早や血の涙

持つて苦む有財餓鬼

無うて苦む無財餓鬼
有無同然とおなじこと

何れも餓鬼の仲間のへ

氣のつく時はもうおそし

田地が欲しい金ほしい

家藏道具もみなほしい

ほしいほしいとあせれども

あせつたばかりで益もない

くたびれもうけのあせりぞん

あせり貧乏のなわけなさ
鈍と貧とで身をおはる

貧すりや鍤するならひにて

一善積んだおぼえなく

一行修したためしなし

因果の道理で苦より苦へ

まひこむさきの恐ろしや

親子兄弟つまおつと

家内親族むつまじく

ともに敬ひなつかしみ

にこにこ顔で日をおくれ

もしも心の水の上
憎み嫉みの波立たば

怒り腹立てしきどほり
恨み怨みて果てしなし

死んでもくれいと思ふほど
いとし可愛とおもふ人

にくい奴にはなられず
ころりころりと死んでゆく

骨肉わけた親子でも
連れてもゆけず連れられず

一世とちぎつた夫婦でも
出かける未來はたゞひとり

代りにたてるものならと
五道六道あとやさき

思ふてみても詮もない
遠くへだてゝ無量劫

何よりかより一大事
慕す世の人夢るめよ

それともしらでうかうかと
急いできけよ大法を

世事をうちすてとりいそぎ
聞いて信じてよろこんで

無事で達者なそのうちに
樂み極まる身となれよ

なんで聞かぬか信ぜぬか
眞のたよりも樂みも

法を聞かずに世の中に

あつてたまるかあるものか

それに世の人みなともに
自分ひとりできめこんで

わけもわからぬ其癖に
正しき教うけつけず

自分も迷ひ人までも
親も迷へば子も惑ふ

死んで未來はどうなるか
聞く氣なき故誰あつて

きびしい意見や御催促
それをそれともつゆ知らず

佗人の無常に驚けど
どうするつもりか氣がしれぬ

あかるいお慈悲を聞かぬ故
おもひ氣儘にふるまひて

愛におぼれて目がくらみ
ふと氣にくはぬ事あらば

色と慾とにかくては
佛のいたみ給ふのも

そのさまやめよの御意でない
やまぬそのまゝよくきけば

迷はす罪の恐ろしや
わかりもせぬと聞く氣なし

娑婆の世渡り人の道
言ふて聞かする者もない

少しは氣のつく筈なれど
娑婆のならひと平氣なり

我身にせまる一大事
いふてきかせど聞き入れず

心も暗く氣もあらく

あとさきかまわぬ無分別

耻も人目もあらばこそ
直ぐにふくれるあはれだす

飢えたる大にことならず
このさま故のお慈悲ぞよ

そのさまゆへによくきけば
これはこれはと恩しれる

柱とたのむ親おつと
おもひがけない別れには

かあいとしの妻や子の
おのれを忘れ泣きくづれ

人日も耻もあらばこそ
何で死んだいどうしようと

あら可愛やな懷しや
泣けどさけべど證もない

野邊のおくりをすましても
なんで死んだいもう一度

未練はとけず夢うつ
顔が見たいやあゝ可愛

かへらぬ愚痴に何時までも

心とられて泣うより
いへどなかなか聞き入れず

それをたよりに喜べと

愚痴に心も塞りて
後生大事ときゝながら

自分の足下うちわすれ
急いで法をきく氣なし

今日もうかうか明日もまた

世間の事にかゝりはて
せまる臨終どうするか

うかうかして居るそのうちに

案内なしの断末魔
向ふが暗い聞きたいと

せまつてきてから驚いて
あせつてみてもらあかぬ

兎角世の人らちもない
わかつたようで其實は

事にそわそわさわぎたて
皆明盲の仲間なり

朝から晩までいそがしく
何をたよりにあせるやら

尊卑上下も走り出す

急いで何處へゆくのやら

急ぐだけならまだよいが
なに小瀆なといらだちて

意地と我慢でやり通し

あたり近所へよりつけぬ

もしも邪魔するものあらば
直ぐにあばれるおこりだす

何の理も非もあらばこそ
神も佛も寄せつけぬ

生れついたる悪性に
因果の道理で此世から

我儘氣儘の其果ては

惡友惡縁とりもちて

ろくな死に様出來はせぬ

因心苦しき日を送り

佗人に悪くまれ嫌はれて
そして永劫苦に沈む

苦に苦をかさね浮ぶ瀬の
暮すお前の身の上を

なしともしらでうかうかと
うちみる親は血の涙

兎角世人の世の中を

渡る算りで沈みこみ
浮ぶ仕掛けを聞く氣なし

これではならぬと氣をもめど
何を目當にいそぐやら

貧富貴賤もかけはしる

脇の見る目もあはれなり

よつく信じて喜んで
貰ふた六字の寶をば

笑耀榮華も五十年
樂は一年苦は九年

聞くべき時は來りけり
げにや千歳一遇の

色香もしばし夢の間よ
眞の樂み何處にある

はげみいさみて早くきけ
好機は今ぞよくきけよ

聞いて信すりや誰もみな
善根功德も身に満る

佛の智慧を貰ひ受け
六字の主となれる身ぞ

思氣儘に身をもちて
あんな奴がと人様に

佛のおほせにしたがはず
うしろ指をばさされるな

そばにもよれない底なし池に六字の月様まんまと
月影すゞしい其池中にこわや大蛇が住むといな

懷住居の身となりて
取り出し樂む身となれよ

六 信を取れ

(一)

淨土真宗は信心一つ

どうすりや信心いたゞかるか

世にもいふぞえ茅屋の雨と

聞けといふても耳ではないぞ

節や嘶や譬えや道理

遊び半分道樂詣り

後生大事じや大事をかけて

聞く氣さへありや誰でも聞ける

聞く氣にならずに聞かして見いぢや

命がけて其儘來いの

その儘任せと仰つしやるけれど

どうのこうのはからひやめて

とても駄目ぢやで任せの聲ぢや

(二)

任せ任せと仰つしやるけれど

どうのこうのはからひやめて

それぢや聞いたも聞かぬもおなじ

そうは不可ぬぞごつこい其處ぢや

聞けといふのは胸眺めずに

法のおしかけよくよく聞けば

そもそも聞えりやいふことないが

これを知らねばみな他宗
聞くよりほかに道がない
法のいはれは出て聞きやれ
心の底へよく聞くの
聞くでないぞえ御心を
千座萬座も聞やせぬ
命がけてよく聞きやれ
聞かさにやおかぬが彌陀の慈悲
祖師も知識もどもならぬ

仰せ一つを聞かしやんせ

こんなざまではとても駄目

駄目のその儘任しやんせ

どうして任せりやよいのやら

どうもせぬのが任したの

聞えぬまんまで行けるのか

其處が聞きどこよく聞きやれ

法のおしかけよく聞くの

世話はいらない此まんま

どうもならぬで困ります

ならうならうのさら猶やめて
ならう心はどうすりややむか
そんなになりたきやなつても見るか
なれるものならなつても見たい
なれといふてもなられもせぬが
なつてもあかぬたどうした譯か
出來もしやうが自力の信ぢや
なれといはれちやこりや又困る

ならぬまんまの仰言きけ
やめよと思へば尙やまぬ
なつたら承知がなるだろか
なれば承知もなりませう
なつてもあかぬがどうするか
なつたら安心出來ませう
なるかなぬかなつて見い
なるになられずやめられず

(三)

どうでもなるよに思ふた心
少しや判るか自分の值打

自分の思ひが何になる
仕末のならない暴れ馬
あたり近所へ寄り付けぬ
たつた一佛阿彌陀佛

そんな奴ぢやでまるまる任せ
ほんに思へば私の心
それ故お慈悲な佛も誰も
寄つても付けない此の私に
三千世界の餘され者を
なつてもあかねばなられぬ奴を
世話も雑作もいらないことを
こんなに易いお慈悲を何で

見込んだ親様そのまんま
なんで聞かずに居つたやら
信ぜなんだか氣が知れぬ

(四)

言へと言はれちや言はれはせねど
馬鹿ぢや阿呆ぢやと謗らば謗れ

言ふに言はれぬ味がある
踊る春駒私の胸

泣かにや聞かれぬお慈悲ぢやないが 聞けば泣かずに居らりやせぬ

こんなお慈悲が若し無いならば 仰言一つが聞えて見れば

智慧や學問お金があろうが

知識の教でよく聞き得れば 真に六字は打手の小槌

足らで事足る不思議な仕掛け

萬德圓備の南無阿彌陀佛

酒は酒屋に牡丹餅や棚に

昨日地獄で今日正定聚

私や今頃首吊ろに 今夜死んでも憾やない

こんな樂しみ何處にある

心浮き立つ目も醒める

信じ稱へりや不足無し

小言いはれぬ御本願

これに上越す寶ない

慶喜歡喜は信の徳

明日は淨土の花嫁よ

(五)

暗い心へ明いお慈悲

慶び過ぎると人様仰しやる

よけりや嫉むし悪けりや誇る

他人の悪口よく言う癖に

腹が立つ時鏡に向うて

爲によい事言う者いやで

油斷しやんすな實貞相な

味方の親方みたよに見せて

ほんに嬉しい恥かしい
一皮むいたら大騒動
色にみせねど恐ろしや
他人が言ふたらそれこそだ
見やれ生きたる鬼は我
毒を當がう者が好き
私が心は大泥棒
實は仇の親玉よ

(六)

いやな心に相違はないが
まゝにならない其まゝなりで

これがなければ慈悲もない
まゝになるのが法の徳

泣くに泣かれぬ苦しい胸を

火宅無常に煩惱具足

變りどほしの此の世の中に

當にならない心の中へ

することなすこと皆嘘なれど

嘘の塊や私の心

生地の白地の此の機のなりで

鬼の私故お慈悲な佛

煩惱の狼暴れて出たら

光明攝取の懷住居

妙好人とはいはれぬまでも

俺に任せと彌陀の聲

そらごとたわごとまるで嘘

當にせよとのお呼び聲

變らぬ物たら唯一つ

稱ふる六字は嘘でない

まことの塊やこの六字を

稱へまいかやお六字を

どうかなるなら親いらぬ

直に駆け込め六字城

逃げる所もないわいな

お慈悲の邪魔なとしますまい

七地獄で佛

可愛一人の子があつて

旨く欺して連れて行き

旨いお菓子も御馳走も

三年五年の駄賃には

これは結構な事かなと

一生懸命働いて

何だか胡散な心地して

これはどうした事だらう

家内の者共悉く

昨日も一人の友達が

親の無いのにつけ込んで
綺麗な着物も着せてやる

澤山あつて其の上に

何千圓の金もやる

それを目當に朝夕は

喜び樂むそのうちに

彼ちら此ちらを聞いて見りや

主人は泥棒の親方で
攫徒や盜人や人殺

女郎に賣られた一昨日も

生膽取るため又一人

絞め殺されたといふ話

どうか逃げたいものかなと

死ぬに死なれぬ憂さ辛さ

一人で泣いて居りし時

泣いてる胸も知つておる

今の今迄一時も

何ぼ親爺が泥棒でも

俺がこうしてゐるからは

辛いであろうが今暫し

今に立派にしてやる

これは夢かや現かや

あら嬉しやな樂しやな

何の辛から耐えましょう

ほんに私のことかいな

眞に地獄で佛とは

生きた心地もあらばこそ
思ふて見ても詮もない

或日の事にくしくいと

隣の旦那がやつて来て

お前一人が可愛さに

目を離したる事はない

何ぼ女房が惡魔でも

指一本もさゝせない

耐えてくれやこりやむすめ

あら有難や忝けな

何の辛から耐えましょう

八心の泥棒

人々御所持の心といふ奴は

目鼻も手足も御座らぬけれども

二十五有界今日が今日迄

それで足らいで今のがき

虐め欺してそして未來は

謀み目論み企て乍ら

もされぬちざれぬ仲ぢやと見せて

危い所を見込んだ佛

鬼も惡魔も煩惱賊も

任せといふたら其儘任せ

仕合せ極まる身分となるぞ

僭も不思議やあら有難や

これぞ即ち頑力不思議

御恩尊や南無阿彌陀佛

これぞと申してしつかと致した
はてさて困つた和郎女で御座る
五道六道ひきづり廻して

朝から晩まで苦しめ通しに

三悪火坑の火炙りさしようと

而も表面は親切實貞

俺の命を取らうの所有

心の泥棒に迷ふな衆生

俺に手向ふものとてないぞ

任す許りで二世安穩の

九 い ろ は 歌

石は流るゝ木の葉は沈む
論語よまずの論語よみは
花は折りたし梢は高し
似ても似合はぬ親子の契
ほんに私は大蛇か鬼か
糸爪の皮にもならないことに
問へば耻かし問はねば聞けぬ
塵も積れば山となるよ
利巧に見えてる阿呆といふは
盜人捕へて見りや我子なり

沈む私が救はるゝ
信を取りたる人の事
私や折らねど花の主
恐多いが仕方ない
今の今のき親泣かせ
俺が俺がは耻かしや
聞けば聞える貴はれる
聞いた上にもよく聞けよ
知つた顔する私がこと
私が心は大泥棒

留守にするなよ心の内を
居るぞ居るぞと心の主の
笑ふ門には福神來る
痒い所へ手のよく届く
よくも喋れる其の口もつて
たのめの一言心にかゝる
禮儀立てこそ可笑う御座る
袖の觸れ合ひ他生の縁ぢや
辛い辛棒憂き艱難も
寝ても醒めても立つても居ても
泣いた涙の其の下からも
樂がしたくばお慈悲を聞きやれ

護る主はお念佛
聲が聞えりや大丈夫
来る元手は御信心
様なお慈悲は此六字
何でせぬかやお話を
かゝる心が信の種
伊達のないのが眞の禮
御慈悲聞く身は深い縁
稱へましようぞ御六字を
二人連ぢやでそうもない
お慈悲思へば又涙
快樂安穩無上なり

向ひ三軒隣や近所
嬉し尊とや願力不思議

大も歩けば棒もに當る

呑んだ酒なら醉はねばならぬ

思ふ念力岩でも通す

苦から苦に入り闇から闇へ

數をつづいて蛇とは私の

時かぬ種なら生へぬが定り

懼貪邪險で暮してをれど

舟に乗つたら船頭任せ

こうも尊いお慈悲を何で

遠慮會釋も何いるものか

慈悲と六字で暮したい
耳で聞えぬ聲も聞く

手足運んでよく聞きやれ

醉が出来るぞよ六字酒

願力不思議で石が泣く
這入る私のための親

蛇蝎奸詐の胸の中

信が無くては參れない

親の意見が身に沁みる

聞いた上には親任せ

聞かずにおつたか氣が知れぬ

お前一人の親ぢやぞよ

手振八貫何にも持たぬ

悪に強けりや善にも強い

細工上手は貧乏の種ぢや

着のみ着の儘裸のなりで

油斷大敵足下大事

目には見えねど目で見たよりも

身にも溢るゝ心に餘る

死出の山路も三途の川も

縁に引かれて心が移る

他人の噂をする暇あらば

餅は餅屋に蛇の道や蛇ぢや

善は急げよ王法仁義

持たぬ其方が一の客
鬼の其儘正定聚

小細工入れなよお六字に

光明攝取とお引受け

他人の事より我が心

未だも危けないお慈悲

お慈悲こぼれて南無阿彌陀

信の一念一飛よ

移る心に氣を付けよ

親の噂をせまいかや

聞いた御方によく問へよ

家内和合でお念佛

雀百まで忘れぬ踊り

踊るまいかや死ぬるまで

雜詠集

一五劫思惟

大正九年十一月十一日

(大安の歩き始めし日)

木津太郎平氏方にて

法然にまねるわけではなけれども此四字聞けば我も泣きたい
御苦勞を思ふて泣くは元祖様我は疑ひそしりしに泣く

信するは彌陀成佛の一代記

上巻は彌陀成佛の一代記

下巻には衆生往生の一代記

信するは極樂世界の縮寫圖

(寫眞機のレンズに似たる我心廣き世界を寫しつくして)

經卷はみな一心の華文なり

聖教は信の一字の説明書

不可説の事を言葉で説きたるが經卷なりと知りて讀め人
信といふ此不可思議の事實をば説かんためとて經卷も出來
信ぜよと勧める外に何もないされど聞かぬで事が面倒
一筋の帶の出所子に聞けば簞笥吳服屋西陣といふ

よく聞けば父の財布と又きけば母の慈悲から出たと答ふる
あの月はなんであかるい此花はなんで咲いたと子供尋ねる
父親は夜がくらいで月が出て坊のためとて花さくと言ふ
佛力か又は私の考へかそちらの程も實は分らぬ
分らない事に頭をつかふより南無阿彌陀佛といふが一の手
分つてもあかぬ私をこのまんま分らぬなりで來いとよぶ聲

南無阿彌陀唱ふる人の胸の内釋迦も説けぬとさじをなげたり

説けねども説いても見たり言はれぬと言ふて見たいは妙なものなり
説けぬなり説けば説かるゝ言へぬなり言へば言はるゝ妙なものなり
此妙の味一つさへ頂けば何はなくとも天下泰平

妙不思議奇妙不可思議たゞ不思議やはりしまいが南無阿彌陀佛
南無阿彌陀稱ふる内に何もある花もこそあれ月もこそあれ

稱ふれば花も園子も月雲も義理も情も何もかもあり

上巻は大悲の彌陀の招喚の巻

下巻には大慈の釋迦の發遣の巻

觀經は韋提希夫人の信の巻

小經は舍利弗ビツクリ仰天の巻

舍利弗のビツクリ極善最上が知れ

韋提希の入信極惡の最下知れ
信心の花あざやかな法の春

二 病床雜詠

大正十一年二月七日

ありがたや三界無安猶如火宅そのまゝ大悲光明の中
身は病ひ心煩惱の入れ物よそれにつけてもお慈悲たゞとき
ありがたや旅の空にて病みし我お慈悲の駕籠に搖られて歸る
あゝ「やまひ」お慈悲の世界にさも似たり萬事拋棄し任すばかりぞ
贊へかへるやうにせはしき世の中に病の國のひとり長閑けき
萬事休す病の床に臥しぬれば如何にもがくも無益なりけり
鳥渡病みて今更ながらほんに我お慈悲の中の一人兒としる
人は皆病を無下にさらへどもかみしめて見よ味もあるもの
世の中に病てふものないならば休む事なく狂ひ果てなん
人の身の健康は晝病夜休みなしこは勤けぬもの

静養を命ぜられたる今、我唯安らかに慈悲に眠らん
 人にもし病てふものないならば、轡外してはね狂ふ馬
 病てふ轡をかけてさあこいと導き給ふしかけたふとき
 病人になれよみな人何事も任せ大悲の懷ろに寝ん
 病人になりて任せよし知れるぞよお慈悲の中に寝起する身と
 どうならふかなどと心配うちやめて任せてやすめ親の懷
 病む兒をば見捨てる親はなきものよ護念證誠、これはこれはだ
 何事も實地あはねば知れぬもの旅にわづらひ感慨無量

三 病床雜感

大正十一年二月八日

病みて知る世界で一の御馳走は三度食ふ飯ヨーコ(香の物)味噌汁
 目を醒せ世界で一の御馳走をいたゞきながら不足いふ人
 この目醒め實にたふとき此目醒め自覺信心大悟徹底
 贅澤や不足はみんな此事が一つ分らずきこゑぬがもと
 此事が一つ分ればみな知れる此儘大悲光明の中
 何一つ加へてからの慈悲でない丸の裸のこの儘が慈悲
 お慈悲とてこれより外に何もないこれが信心これが念佛
 分るかや分つたならばそのまんま理窟いはずに念佛申せ
 分らぬか分らぬならばそのまんまグズグズいはずめしにしたがへ
 彌陀は來い釋迦は行けよとそのまんま呼びかけたまよめしにしたがへ

きこゑぬかきこゑぬならばよくきけよきけばきこゑるきかす人ある
聞けよきけたゞきくでない本をきけお慈悲の中の我を見出せ

その儘が御慈悲の中と知れたならすべてをまかせみ名をとなへよ
分つてはるますが實地中々にさうはいかぬときいて見ぬかや
實際となると分つたやうなれど鑑三文のねうちだもなし

三文のねうちだもなきこのわしのりきもありさまそれはどうだい
眞宗は理窟ならべる宗でない信の上よりみ名稱ふ宗
かゝる機をたすくる親ときくからは理窟申さず念佛申せ
稱ふれば間違ひ通しのこのわしを間違はさぬが六字(み親)ぞと知る
稱ふべし唯稱ふべし稱ふべしそのまゝこいのおぼせたふとや

四 妄 念

大正十一年三月七日

妄念はみだりな思ひいらぬ事ためにもならぬ事思ふなり

いらぬことあまり思はぬつもりなり家のためやら村のためやら
そのためはおためごかしといふためかまたはひいきの引だほしなり
どんな事思ふてをるか今こゝでちよいとしらべてごらんにいれやう
清水も蛇が呑んだら皆毒よ何思つてもみんな三毒

欲も毒はらだちも毒愚痴も毒何思ふのものもこの毒ばかり

思ふても何にもならんことばかり思ひてなをも思ひわづらふ
あゝ寒いこう寒くてほどならぬくどき立てたら寒さがゆくか
にくいやつもう死んでくれ顔見るもいやと思へばなをく死なぬ
わしはなぜこんなにきりようわるいだらう親までうらむ心も起り

びんぼうな家に生れたなきなさとなりに倉は三つもあるに
もうすこし學問あればこんなにも馬鹿にされまいやしい事よ
今となりでてもゆかれずそれかとてこんなふうでは一生地獄
子はかわし女房今は鼻につきつきもだされず措くに措かれず
特別な偏窓親翁鬼の婆々夫道樂立瀬もあらず

つまらないあゝつまらない世の中に何か樂い事なからうか
親先祖ためたる金の御蔭にて仕事もせずに妄念ばかり
冬炬燵夏は團扇を友として春秋なまけ寝たり起たり
御蔭にて高等遊民無職業おこりちらしてりきむがしごと
何一つまとめて思ふ事もなし今日も昨日もたゞもやぐと
砂道を踏みかへすとはもやぐとばかり思ひてくらす我事
べらくとしやべる其舌毒をはく蛇にも似たりおそろしい事

赤い舌べろく出して毒をはく蛇恩はするおしゃべりの人
なす事も言ふも思ふも何一つためになりそなことがあるかや
これほどに思ふてさへもいかんのに思はなんだら立ち行かぬ
おれしなば若い者どもどうしよう食へもすまいと御苦勞様な
かまわすば出來る事まで世話やいたつもりで邪魔を申してござる
死んだ子のとしを數ふるそれよりもなほぐち多き我が心かな
こんな事もう思ふまい言ふまいと思ふしたから又もグズく
ねむらふと思ふ心が邪魔になりなほねむられぬ事でよくしれ
どうしてもやまぬ妄念やめるよりやまぬそのまゝ念佛申せ
念佛を申しておれば妄念も助縁となりてまたも念佛

妄念の下から申す念佛もにごりにしまぬ蓮花かな
妄念は火事場のこゝろお念佛我を呼ぶ聲あらありがたや

妄念の火事場の我に唯一つふさはしきもの念佛ばかり
 よき心よし起りても水に繪をかくが如しと古徳もいへり
 かく世話も入らぬ流れる恐れない月をば宿せ水の面に
 よしあしのおこるこゝろに氣をかけず六字の月を宿せそのまゝ
 よき心またありがたきその心これ信心とゆめ思ふなよ
 信心は縊蓋無難の一心よ御たすけ一つ疑はぬのよ
 妄念の水をすましてそれからと思ふ心が疑ひの蓋
 澄み濁り淺し深しはいとはねど蓋ある水に月は宿らず
 よしあしの心の様はいとはねどこれではの蓋一つ邪魔物
 信心はその邪魔物の蓋とれて妄念のまゝ寫りし月よ
 信心はうつりし月を手にとりて握る事でももとよりないぞ
 手にとらずつかみもせずにそのまゝの命せの月をながむるばかり

古歌にいふ

蓋もせずつかみもせずに妄念の波にゆられる影ぞたふとし
 そのまゝのお慈悲の月は念佛よ妄念の波月を流さす

よもすがら石にくだけてちる月もまるめて返る冲の白浪
 月かけを宿せば露も光ありよしあしの葉におけるまゝにて
 澄まさうと底のもくずを拂ふこそなかゝ月のさはりなりけり
 澄まさうと胸の妄念拂ふこそなかゝ廟院のまはりなりけり

五 大正二河警

大正十一年二月二十四日朝五時

一月のあとふりかへりながむれば夢か芝居か八釜しい事
葬式はつしきを「ウツチャラ」かして行つたそな後生願ひちやそんなものかや
放生津はつじゆへ二人行くなり宗助の母死はいしぬ我病われやむ芝居しばゐこれから
骨上こつあひもせずに走つて行つたそな親おやまですてゝ聞けの教きょう
死しに目めにもあはず診斷書しんとんしょもない不孝者奴ふこうしゃとさわぐ親戚しんせき
銀行ぎんこうの預金帳よきんちようまでほりだして七日ななひたのむと飛とで行つたと
人様ひとさまのさうおつしやるも御尤ごとうも婆婆うぶにない事始ことはじまりしゆゑ
なある程ほどの今謗難ひそなのくちびるをめぐらす時分ときぶんと御文ごぶんにある
信しんのみで謗ほぶするものがいならば信しんしかねると蓮師れんしのたまふ
信者しんじやあり謗ほぶるものある其中そのなかに我信しんぜずに居ゐられるものか

あの坊主ぼうすあいつら仲間異安心土藏法門なかまいあんじんどざう法門ほもんぢや學者がくしゃ安心あんじん
彼奴かれいつらは仕事しごとも親おやも何なんもかも捨すてゝきよきよの天理教てんりきょうぢやと
秋五月あきさつせわしき中に參さんるもの國賊くわくなりと妙めうな論法ろんぽう
ひまかけて聞きけよの教きょうへどうするかあいたひまにて參さんる連中れんちう
ひまあけて參さんる人ひとさへなきに我われかくも導みちきたまふおしかけ
火ひの中なかをわけて聞きけよのみ教きょうへもすこしは知しれる斯かうなつてきて
おしかけは聞いてわかつて思おもふても實地じつちあわせて貰もらはねばだめ
修羅道しゆらぢか火事場かわじば見たよなその中に二河白道がはくどうのたふとき話はなし
腹立はらだらときたない心こころ其かれの外ほかにわれの力ちからはどこにあるかや
こんなもの持もつてりきんで居ゐるわしの所存しよそんいかにと聞いても見みたい
なに所存しよそんそんな生意氣生意氣いふ故ゆゑに食くへぬとおこる矢張貪どら瞋ぢん
二河かわの譬たと喻たと今現在いまざいのこの儘まことにの生うきた寫眞しゃしんと見みすに居ゐられぬ

金ためて家内和合し死んでからころりと参る眞俗二諦

ちと聞けばまこと理窟なやうなれど一皮むけば化の皮出る
拜金と色と食いけの外道殿死んだほとけをかついでりきむ

道進む人の鏡と誰れも知る二河白道のこれはどうだい

東向き郡賊惡獸大泥棒無人空廻の澤の眞中

東向く又廣くきく人よきけ四重破人ちや誰の事だろ

やつと西向いてちがく歩む兒をたきつけるは鬼でないかや
西へ行く道さまたげて東向く人のいひぐさ仁義王法

廣い野に惡友ばかり多くして眞の知識はなしときかずや
廣く法聞けよといひて惡友に親しむ人は何と聞くかや
廣くきく人よいはりしたしむといふ郡賊はたれの事だよ
其人の信のないのにつけこんでうまくだました泥棒の聲

外からは殺すとおどし内からは廣くきけよとだます泥棒
二河の譬喻生きた二河譬は今こゝに棚田安吉私が胸にも
氣をつけよ生きた二河譬に足ついて東京までも飛んでゆくぞよ
心せよ東京でない火事近い油斷するなと六字早鐘

火が出来るぞあれば出すぐよおそろしや一分間も油斷はならぬ
ぞべぞべや聽聞育ち東向きよつてたかつて一味安心

泥棒に命をやるか親様にまかせてつきぬ命貴ふか
鼻糞のかけにも足らぬ慾のため此の大もうけ知らぬ愚さ
本當に何がぼろいといふたとて此の大得は天下一なり
胸を見すぐるりの聲に耳かさず唯一心に進め白道

内外のおどしだましに目もくれずとびこんで見よみ聞きこえる

とびこんで見れば泥棒どう呼ぶも迷はぬのみか唯もやはれる

呼聲が一つきこえりや泥棒も鬼も惡魔も裸足で逃げる

此六字天地に響く御呼聲何を恐れてグズ／＼しとる

大膽に脇目をふらず進み行けそこに我行く道の開くる

色や酒金に命を捧ぐるに法を聞くのが何で悪いか

此命せ一つになれば廣い世に惑ひの影もとゞまらぬぞや

勅命に全托したる善友の道行く聲の樂しき事よ

此六字天にも地にも我獨り仕合せものと喜ぶ聲よ

今こゝにかうして進む我道の正しいと呼ぶこの二河の警喻

以下大正十一年二月二十六日朝五時

大正の生きた二河警の此の歌を善導様の前に供げん

これを見て善導様もほゝゑみてさうぢや／＼とのたまふならん

釋迦阿彌陀七高祖も祖師もみな印可し給ふ事と信する

此の守護を得たる我等に力あり不惜身命佛の加被力

外邪の人如何に騒ぐも何かせん却て我をはげますものよ

そしる人われの知識よこれなくば心弛みてなまけんものを

信順を因とし疑謗を縁として救ふ大悲のしかけたふとき

ありがたやあゝありがたやこのまんま我を導く生きたおしかけ

前後右左からこのわしを一人助けんためお引立

謗るなら眞劍にやれ遠吠の卑怯な大の眞似をするなよ

おしかけよ唯願力よ何一つおれといふもの何處にあるかよ

願力の船に乗じて光明の海に出た人高歌うたへ

世の中の荒波餘處に眺めつゝ高歌うたひ西に行くとは
高歌で元氣を出すはよけれども東をむいて争ふなゆめ
誇るとも誇り返すな皆共に親の大事が一人兒ぢやそな
誇る人悪人なりと思ふなよ思ふ私はまだも悪人

一番に悪い者から救ふ慈悲救はれし我一番鎗よ

誇らるゝわしよりまだも向ふ様善人故に誇つて御座る
誇るのも信ずる縁のおてまはし誇らるゝものなほ願力よ
人誇りあざける程の廣大な法でなければ我助からぬ
此法は世間難信の捷徑と祖師の言ふいはれあるかな
常識の低い頭で分るなら極難信と釋迦はいはぬぞ
諸佛みな萬行諸善きらひつゝ此難信の法をすゝめる
善も宇宙眞理もみなこめて呼ぶ一つにて救ふ難信

我々のくさり頭で百年も考へたとて分るものかや

此六字五劫思惟のかたまりぞはからひやめてたのめ皆人
はからひをやめて信ずりや何人も分らぬなりで分る不思議さ
此不思議此不思議力佛力ぞ本願力で我は助かる

此不思議命を取るといはれても信ぜぬ譯にいかぬから妙
精出して聞けよ皆人分るぞよ分らぬなりで分る迄聞け
此不思議此より外に何一ついるものないといふまで聞けよ
時よ時全人類の一齊に目を醒してふ時は来れり

こんな善い時とも知らず火の上に眠る人々醒めよ今すぐ
此時に生れ會はした吾人は先づ第一の仕合せなるぞ
彼地此地に目醒める人の聲きて寝そぼれ騒ぐ人は氣の毒
御助けをかゝへて落る人も又騒いで狂ふ人も氣の毒

寝そぼれて便所の中でりきんだり座敷に二便するな目醒めよい時に生れたとても聞かずんば何の所詮もないぞよくきけ聞いたとて聞えぬならば詮もない信の上より御名を稱へよ此六字萬善萬行の體といふ事ほんに今ぞしらるゝ

六字さへ稱へて居ればよいかなどいふ人様にやとても分らぬ唯不思議南無阿彌陀佛の此六字たつた一つで救ふ妙法

高きには智者も學者もあきはれて法の易きに愚者もあきれるあら不思議昨日驚き今日あきれ日々に新に日々又新たら意外聞いて驚き見てあきれあら不思議やの聲が念佛斯くまで悪い奴ともつゆしらずりきんで居つた昔耻かし斯くまでに高い法ともつゆしらず限をつけた事の耻かし

信心をちよいと頂き世の中を渡るもよいと聞いたが始め今となりおくにおかれずやめられずあらだまされたみ親の聲にだましたる親もよろこびだまされた我も喜ぶ聲が念佛論註の信方便の易行とは御名に引かれて行く今的事釋迦と彌陀種々に善巧方便し我をこゝまで導かんとて願力に唯導かれ行く我に何の心配はからひがいる思ふ事信心でない思はずに居られぬやうに引く力體思ふてもあかず思はぬなほあかず引かるゝまゝにまかすが他力引かれつゝ邪魔するゆゑに聞えない命がけて飛込め分る飛込んで見れば此儘願力の眞中なりとあきれるばかり

あされはてこゑもことばもたえはてゝこれはくと稱ふ念佛大聲は僅耳に入らずといふぞげに此呼聲は極難之法

五濁世に極難之法釋迦如來よくも說いたと諸佛はほめる

萬行の少善捨てよといふところ偽善の人のおどろくもとよ

虚假の善雜毒の行ふりすて頂く六字清淨の善

南無阿彌陀清淨の善身に獲たり稱ふるまゝが十方廻向

善捨て、惡を取るとは思ふなよ僥善を捨て、眞善を取る

此六字利他圓滿の大行と信じて稱へ少しは知れる

御開山眞實信をうることは末法濁世にまれとのたまふ

信を得し人は希有人まれな人最勝人と勝れた人よ

業さらしおたづねもの、希有人が勝れた事の希有人となる

六 妄念と念佛

大正十一年二月二十六日

妄念は凡夫の地體それゆゑにまかせと呼ばぶ彌陀にすがれよ

妄念といへばやさしいやうなれど泥棒もや／＼何もかもあり

今日からは泥棒何といはふとも取上るなよ聞きつけるなよ

泥棒が姿をかへて出たならば六字の棒でたゞきつけらう

たゞいても又出たならばとりいそぎお慈悲の御座へほり出せさらせ

さらいてもまだも性根がつかぬならそんなやつにはかまはずにおけ

かまはずにだまつてじつとほつておけ親と相談念佛申せ

どこまでも機嫌をとればつけ上るからへば又なほあればだす

それゆゑに何といはうと聞きつけずさみしがらせよそれが一の手

さみしがり親のあとからそろ／＼とついてくるならしめたものだよ

何時にも泥棒様がおいでたら唯念佛であしらひ申せ
 念佛があるじとなりて泥棒がお客となればそれでよいのぢや
 心せよ主客顛倒せぬやうに留守にするなよ念佛の主
 念佛で歓迎すれば泥棒もこれには困りかしこまはるぞ
 気を病ひと書いたが病氣病より氣をもむ人の多きものなり
 病人が病ひをつよく氣にすれば火に火を添てつのるばかりぞ
 胸ながめ氣を病み出せばきりもない仰いでたのめおのれわすれて
 其心そのまゝおいて佛智をば加へ給ふが他力本願

七三 聽

大正十一年三月八日

釋氏要覽下、法苑云有三品、以三神聽爲上以二心聽爲中以二耳聽爲下

聽くのにも耳きでさくのと又心不思議力にてさくの別あり
 力にて聞くは上なり心中耳じゆうじにてさくは三中の下

説くのにも又三通りあり不思議力心と口と上中と下

口で聞き耳きにてさくは大低だいのはなし説教さては演説

浪花節落語淨瑠璃祭文や節の説教みな此の部類

口ざわり中々よいと大もてのこの説教せつぎょうを聞く耳みの同行

説教は一聲二節三衣體欲と色氣を安心とせよ
 口さばき又耳みざわりよき僧のかたる禪訣は聞くもたふとし

坊主も坊主不淨説法金もうけ小僧こそうも小僧なり道樂參り

極樂に數の子藏ときくらげの藏があるとは是の事だよ
數の子は坊主の舌よきくらげは同行の耳妙な往生

耳と口往生させて身と心おしげもなくでまつさかさまに
口と耳相談させてゐる人は無力ぞべくお芽出たい人

口に節身には金紋五條かけ極彩色の御堂うつくし

大法事まはり行やらびどんの音樂の聲さては極樂

極樂の出店のやうな御堂にて節の説教きけばじわく

目で見るは芝居手踊り見せ物よ法事の參り見物人よ

目につくは稚兒と七條と寄進札さては手踊りさては獅子舞

極樂の芝居見たよな御法事や節の説教みんなよろこぶ

説教を聞く人あれど親心聞く氣の人は實に少し

御寺へは參る人々多けれど淨土まるりの人は少し

心にて説くを心で聞くものは精神講話普通説教

學問や又は道徳元として説くものはみな心と心

比較的眞面目な人が心から法の道理を説くはこれなり
中々によい説法ぢやこまやかに説いてくれるとよろこぶはこれ

道徳の頗廢さては宗教のだらくを知れる人はよくきく
世の中の學者や徳者位置のある人のはなしはたいていはこれ

近頃の思想善導講演や教育談もみんなこれなり

道徳の頗廢さては宗教のだらくを知れる人はよくきく
心から説く人もまれ心からきく人さへもまれなものなり

心にてきくにはちがひなけれども我的力できくは自力ぞ
きながら我できくとは思はれずきかずにをれぬ心御他力

お他力と口ではいへど其實はやはり不思議の御力なり

第三に不思議力にて説いてきくさても妙なりさても不可思議
 真實の法は説くにも又聞くも不思議の力得ではかなはぬ
 本願を疑ふ人は無眼人無耳人なりと經にも説けり
 耳なしといふは真實の法を聞く不思議の耳を持たぬなりけり
 不思議力法を聞く耳説く力佛の加被力信心の事
 信なくて信をとられよとられよとすゝめたりとてたれがきくべき
 まづ我身信決定し法説けば人も信とる佛恩になる
 信あればなにもしらねど御佛の加被力ゆゑに人信をとる
 開く耳も如來御廻向説く口も不思議の力佛の加被力
 信心はお慈悲聞く耳説く口も拜む眼も參る手足も
 信心の耳いたゞければきこえるぞ親の御心我を呼ぶ聲

八 春

大正十一年三月九日

化物の退治者二人夜明けまで諍ひたりと經に説きたり(百喻經)
 夜が明けて見れば仲よき友達が暗の迷ひに諍ひしなり
 食ふためにはたらくものは犬仲間はたらくために食ふは人なり
 はたらくといふに妄動活動の別があるぞよいきてはたらけ
 いたづらに習慣的や人の眞似意義たゞとさのなきは妄動
 食ふて寝ね起きて又食ひ同じ事何もうけたか白髪か皴か
 吞み食ふも着るも住ふも唯お慈悲あらたふとやの歌の日暮し
 暗の夜に酉も東もわきまへず狂ひ廻りし我でありしか
 何のため何を目當にそはくと心せわしくくらしをりしか
 世にもいふくたびれもうけのあせり損阿呆の親玉私でありしよ

水車グル／＼まはるその如く如何にまわるもはてしなきなり
方角もたてずに千里の道行くも何の甲斐あるくたびれもうけ
一足も歩めば歩むだけ西へ勇みて進ひ身とはたふとし
遅くとも徐かに歩め一足も無駄なき旅の心地よき哉
力ある歩みの音に驚きて目醒むる人も中々多し
知らぬ旅知つた顔して迷ふたが連れられて行く心丈夫さ
道迷ふ憂ひもなくて野や山の景色をながめ歌の道中
霧霞雲たなびける春の野に彼地此地ながめ手を引かれつゝ
貪瞋の霞の中に信心の花さき香ふ春の日暮し
花の山霞にかくれ見へぬどもよろこびの歌高々聞こゆ
春五月この忙しいに何の氣と町られながらまたもうかれる
かせぐにも遊ぶにもよい此春日うんと遊んでうんとはたらけ
苦虫を食ひつぶしたる様な顔此春知らぬ人は氣の毒
唯じつと沈香もたかず屁もこかず生きたる死人様は芽出度し
伊蘭林穢い臭い我胸に六字栴檀香ひかんばし
我ながら鼻持ならぬ胸に又六字の香ひ牛頭の栴檀
冬空に室咲き梅の四疊半天下の春は分るものかや
花住む井にも似たる四疊半出で天下の春を眺めよ
山も春野も春草も木も人も走る大猫飛ぶ鳥も春
春來れば花咲くのみか野も山も見渡す限り唯生き生きと
信心の領解の花が開くればお慈悲の春よ心浮き立つ
春來れば唯何となく浮き立ちて何時の間にかは花の下行く
花春か浮立つ心そも春か詮索やめよ何もかも春

以下三月九日午後

今朝二寸雪ふつたれど時節なりみな消え果てゝ斯くも春めく
おぞろしいあはれかたではありたれどしみもとけたか念佛きこの

たつたいまあはれちぎつてをつたれど六字のおかけ胸も春めく
其口で毛虫食ふかやほととぎす

毛虫食ふ口とおもへぬほととぎす

其口は勅使門ぞよ泥棒は横のくぐりへそつとまはせよ
其口はみ親に寄進したる品使ふときには案内をせよ

狂が勅使門からあはれ出し主人の顔に泥を塗りつく

あはれだすこの狂が此の家の一人息子ぢや主人氣の毒

九十一光

大正十一年三月十一日午後四時

苦から苦へ暗から暗へ行く我を十劫已來彌陀はよびづめ

眞實の夜明の出來るおしかけは光明の智非彌陀のお心

光明に觸るれば暗き行先の苦しみもとれ囚れも出る

萬物が雨露の恵みに育つごと知らず覺えず導く御慈悲

不思議なり此み佛にまうあへば業ありだけが御慈悲とぞなる

千歳の暗にも似たる我心此み光に照されひらく

み光りにあへば心の垢もおちさとりの道を進み行くなり

ありがたや慈悲の光につゝまれて長閑けき春の心地こそすれ

西東方角立たぬ身ながらに聲をたよりに勇みて西へ

忘れても忘れぬ親に導かれ寝るも起るも光明の中

あら不思議鬼もよろこび歌ひだす此み光りに遇ふと直様
南無阿彌陀何ともかともいひかねて法の不思議に諸佛あきれる
つまひにもまさる此慈悲我心くまなくてらしはぐくみたまふ

此六字無明長夜の燈炬なり智眼くらしとかなしむなれ
御本願生死大海の船筏なり罪障重しとなげくな子等よ

二 人

大正十一年三月十三日午前十時

人間に生れし甲斐は何なるか金か色氣かまた學問か

金もよし色氣もよいが夫れだけで満足出来るものと思ふか
世の中は足るにまかせて事足らず何があつても満足はせぬ
満足といふてもこれは消極のあきらめ主義の満足でない
眞實に満足出来るものはなにそれが知りたいそれがきゝたい
眞實に満足出来るもの一つ自覺信心大悟徹底

何あるも満足出来ぬ其の心何與へたら満足しようか
底しつれぬ海を埋めるよりもまだかたきは我の心なりけり
果てしなき海を埋める事やめて弘誓の船に乗り込み休め

大學に物に本末事終始先後を知れば道に近しと

物事の本末始終先後をば知るは道なり知らざるは愚
本末を知るは聖人知らざるは凡夫小人世間皆是れ
世にもいふ生命あつての物种と人間は本萬物は末
生命さへけづつてまでも金ためる心は迷ひ本末顛倒
金錢のたふときのゑは生命をたすくるにありけづるではない
飯食ふは何のためかや生きるため飯食ひ過ぎて命けづるな
たゞの酒おあしの出さぬ御馳走を慾食ひするは馬鹿の絶頂
一圓か二圓の慾に目がくれて命をけづる人は馬鹿者
飯は本おかずは末よ山海の珍味ありとも飯なくばだめ
腹あれば腹もよくれる身も肥える一汁二菜おかずなくとも
飯食はずおかずばかりをいどり食ふ咽のかわくも御尤もなり
其かわきとめる妙藥唯一つお慈悲の水に六字一滴

金錢や智慧學問も生命を助くる力飾り裝飾
金錢や智慧學問も家藏も持手によつて藥又毒
腹下る人の食する御馳走はためせぬのみか腹を痛める
世の人はチップス患者の病上り無理に食ひ度し食ふ程痛む
食ひ度いは病の所爲じや無理もないしばしこらへて早く直せよ
其病直しもせずにそゝ無理に食ふて居つては鬼でもあぶない
其病早く治してはたらいて食へば何でもみしょとなるよ
食ふ事にはかりあせらずゆるくと病なほしてそれからにせよ
此病治す藥は唯一つ本願醍醐妙藥はこれ
梨西瓜欲しいとあせり食はすれば一口たべてこれもいやだと
病人の食ひいどりにも似たるもの我等の欲よ何食ふもだめ
妙藥で病直せば何食ふも甘いばかりか身しょにもなる

身じゝにもなるばかりかは食ふたびに御恩もしられ涙こぼる、

薬先き食は後なり病ぬけすれば食事もおのづとすゝむ

何事も本末先後わきまへよ迷悟苦樂もみんなこれから

酒なうて何のそれが櫻哉よくも詠へり上戸の心

酒のみが酒なくしては花美人何ありとても満足はせぬ

そのかはり酒さへあれば何なくも心春めく顔に花咲く

酒春めばいつか心も春めきて借金取りも驚の聲

酒春めば醉ふて心が浮き立つて花も笑へば美人も踊る

酒春めばのめば春むほど醉まはる醉へば心も天下皆春

春むは本醉ふは末なり醉ふてから春むではないぞそこをよくしれ

聞くは本喜びは末信すれば喜ばずにはをられぬだけよ

酒六字春むはきくなり醉歡喜知識酌人歌は念佛

六字酒春めば醉ふぞよ歌出るぞお慈悲の春ぢやのめよさわげよ
花の下酒春む人を春まぬ人見れば變だといふも尤も

酒はこれ狂水ぢや人をして踊り騒がせうかれたりせる

うかかるも踊りも酒の力なりもしつみあるも亦このちから

大經に世人薄俗みなどに不急の事を諍ふと説く

我々が青筋たてゝ諍ふはそもそもどんな事どんな事件ぞ

耻かしく御座へも出せぬ事ばかりよくも大きな聲が出るもの

急がねばならぬ大事を先きにして居るかどうかをよつと考へ

人多き人の中にも人ぞなき人となれ人人となせ人

人間に生れながらも人間のたふとさしらぬ人は畜生

金錢のために出来たる人でない人あるために出来たる金ぞ

金錢の奴隸となりて一生をおくる人々大にもたらぬ

世の中は金さへあれば極樂と其心の爲世の中地獄

本末を顛倒するな金も田も人が持つもの持たれるでない

田や金を持つた顔してをる人もやつと持たれてゐる人ばかり

田や金のおかげでやつと旦那様田地の番人金の小使

猿まはし猿をまはすと思へども猿にまはされやつと食ふてゐる

思ひみよ持つたつもりで持たれとる猿まはしにも似たる我か

彼の博樂馬を使ふと思へども實は丸きり使はれてゐる

ばくらうや猿まはし共集りて義務や權利や矢釜しいこと

何故に世界はかくも矢釜しく暗黒なるか皆心から

一念の迷妄ゆゑに世もくらし一念の信破暗満願

心もと物は末なり物あつめ機嫌をとれど心はきかぬ

何やるもきいてもくれぬ此心何かきかする法がないかよ

此心一つ承知をしてくれりや天下泰平國家安穩

一寸の虫にも五分のたましひよ中々きかぬ此裸虫

此虫のたましひ一つ大泥棒大戦争もみんなこれから

此虫のうんと承知のするときを信の一念夜あけともいふ

たましひの目覺めと近時八釜しく持てはやすのもみんなこのこと

佛とは死んでの未來極樂にピカ／＼光る化物でない

金と色唯それだけで満足が出来る人なら大猫仲間

金はなし思ふ人には見捨てられ泣くに泣かれぬ人は地獄よ

たんはきのやうにたまればたまるほどきたない人は餓鬼の大將

世の中は義理と情と助け合ひ人の色顔見るは人間

親先祖ためたる金のお影にて樂々くらす人は天上

今日もさゝあしたもさゝて聞くだけで生きてをる人それは聲聞

智慧ありては、なるほどとうなづきて自覺々々と叫ぶは緣覺

眞實の人に呼ばれて目をさまし佛の道を行く人菩薩

暗は晴れ迷は離れ苦は脱れ自利利他そろふ大覺者佛

佛とは眞理をさとり世を救ふ圓滿清淨眞實の人

犬猫の仲間を出で、一念に佛仲間が入正定聚

犬猫の仲間外れをするゆゑに犬猫共の八釜ましいこと

そのかはり佛仲間に入るゆゑに佛様方亦八釜しい

八釜しい地獄の中を飛び出して一筋道を行くどたふとき

一筋の道行く我を十方の諸佛菩薩は護念證誠

吠ゆる犬うるさしとてもたゞくなよ盜人の番よ我護るのよ

恐るゝな虎狼は吠ゆるとも行けよ來れと釋迦彌陀の聲

迷ひつゝ迷を知らぬ世の人の迷を救ふ法が佛教

迷ふたる人と人とがより合ふてうまく合せて一味安心

迷ふたる人の御機嫌とるならば救ふのでない迷はすのなり

表札に法義引立と賄り出して中々うまく引倒して

迷ふたる人と人とで世は渾る救世の教はこれゆゑにたつ

御和讃に世の眞實を照らすとは人の迷を救ふ事なり

迷とは知らぬ夜道を行く如く行きつもどりつもどりつ行きつ

澤山の道があるのに暗いのと恐ろしいのでいよ／＼迷ふ

金名譽仁義王法路だらけ心の迷ひいよ／＼くらし

右せんか左せんかと思ふうち腹もへり出す勞れもおこる

迷倒の凡夫と經に説きおけり我等の思ひ丸でさかさま

餘處にゆき方角違へ東をば西と思ひて進むが如し

進むほどいよ／＼我の目的に遠ざかり行くそこが迷ひよ

間違はぬ算りで進む其人に道教ゆるが知識なりけり

金ためて家藏立て、樂むとそれあぶなしと教ふる知識

教へずにそれよ／＼と共に行く導くでない引落すなり

迷倒と何さかさまか何迷ひ本末迷ひ前後さかさま

嫁取に嫁は本なり簞笥末着物目當は本末顛倒

人は本品物は末人に品つけずに品に人をつけてる

かわざんちかと 金田地人についたる品物よ品できめるな人の價值を

ヘボ將棋王より飛車を可愛がる世の人皆ヘボ仲間なり

飛車如何にはたらきあるも王なくて將棋はさせぬぞそれでよくしれ

王あれば歩三兵でもさせるもの將棋は一手真剣勝負

駒許り澤山取りて直ぐ負けるこんな仲間は中々多い

金許りためてたふときたましひに目をつけぬならヘボの親方

たましひの王だにあれば赤貧の歩三兵でもさせるものぞよ

たふとさをたふとしとせずたふとくみなきをたふとじ價值の顛倒

生命は無限の寶財産は包むふくさよ顛倒をする

石鹼を買ふた小兒が箱とりて内實を捨てし事も顛倒

世の人の顔や姿を飾りたて内實のからも又も顛倒

蝙蝠が天井裏にぶら下り人さかさまにとるといふたと

お前等は天理教ぞよ目を醒せ蝙蝠様の説教はこれ

中々に深き迷の夢見れば無明大夜とこれをいふなり

無明とは眞暗黒よ大夜とは夜があけぬのよ早く目醒めよ

光明は大夜を照らし名號は迷の夢をよび醒すなり

光曉の曉は夜明けよ曉めるのよ唯此慈悲に目醒めるばかり

無始已來無明の酒に醉まはり三毒のゑに頭あがらぬ

二 いたゞく仕事

今朝三時ふと目のさめて寝あまれば勿體なしとうかびしまゝを
弱しとて樂過ぎる程樂をして寝あまる程に寝させいたゞく
樂々とするともなしにする仕事それさへ我の力にあらず
何一つせねばならぬといふでなくお慈悲の中でねたりおきたり
樂々とさせていたゞくその仕事我と思へずたゞとく覺ゆ
仕事とて我には別の仕事なし寝てもおきてもいたゞくばかり
何するも誰のためともいふでなくさせていたゞくばかりなりけり
人のため世のため家のためなれば恩着せ心中々苦し
恩着せるどころか人の邪魔ばかりするこのわしを親なればこそ
我儘な我慢偏屈取えなき身も存在をゆるさるゝとは

存在をゆるし下さる丈にても感謝せずには居られぬものを
其の上に手厚き與へ物までもいたゞきそしてはぐくみたまふ
恩きせるどころか御恩ばかりなり御恩の中で御恩をしらず
恩しらず小言ばかりで日をくらす恩をあだとは我の事なり
佛かねておんしろしめし仰せらる御恩知らずを我すくはんと
ありがたやこのおんことばなかりせば我いかにせんくるはんものを
朝夕に稱ふる六字たゞとくも御恩知らずを呼びたまふ聲
勿體なや呼びかけられて許されてお頂きして報謝までとは
唯六字氣をつけさせていたゞくも喜ばせるも御導きも
南無阿彌陀稱ふる中にみなこもるたゞとき六字不思議な六字

三 歌をかく身

九八

歌をかく身になし給ふ今のがいに佛力加へたまふか
ありがたや此の御恩をはどうしようとみ親にいへば念佛申せ
お禮まで親様よりのあたへもの丸で御他力いたゞくばかり
それ故に佛恩師恩わするなよ身をも惜まず命さゝげん
雪ふるに参る氣もないわたくしが参る身となるしかけたふとき
御開山淨土真宗にきすれども眞實の信ありがたしとぞ
ほんにわれ御慈悲きく身があさましやうそといつはりいかりはらだち
おそろしいこゝろ持ちたるわたくしをまかせすくふと彌陀の呼び聲
ありがたや此の呼び聲がなかりせばくるひくるふてくるひはてなん
親様のためすくふの呼び聲によびおこされて稱よ念佛

三 世を渡る祕訣

大正十一年三月十五日

世を渡る祕訣は御慈悲此の六字うそかまことか渡つて御覽
世渡りは火渡りよりも六つかしとそれは祕訣を知らぬゑなり
火の中を渡るしかけの此の六字焼けても焼けぬ焦げてもこげぬ
火の中を分けて聞けよといふよりも聞けば不思議や火渡り出来る
火の中を高歌うたふてやすくと渡るしかけの六字聞かずや
世の中に溺れし人の言ひ草は渡るくといふにぞありける
世の中を渡る算りで沈み込みあせり狂ひて息もたえだえ
水泳きいかに上手な人にも百里千里の海はこされぬ
はてしなき生死の苦海渡るには弘誓の船にしくものはなし
大願の船に乗じて光明の海に浮べば波静かなり

打寄する大波小波立ち割て進む大船姿雄々しき

貪瞋のしげき波風ものとせず六字の船は静かに西へ

一四 道心と衣食

大正十一年三月十七日

仁人安宅、義人之正路也、曠安宅而弗居、舍正路而不由莫識

念佛は御慈悲の家よ本願は人の行くべき眞實の道

煩惱の狼あはれて出たならば此の念佛の家に馳け込め

安らけき此念佛の家出でゝ暗き曠野に迷ふ世の人

道心のうちに衣食はそなはれど衣食のうちに道心はなし

眞實に聞く氣もなくて聞かせよといひたりとてもそれはかなはぬ

説教は致る處にはやれどもお慈悲のはやるところすくなし

参る人聞きに行く人多けれど信ぜんとする人は少し

形式や威勢で法はひろまらず眞實の人法をひろめる

信を得て聞いて又きゝよろこびてみ名稱へつゝ日を送らばや

同心の友さい／＼に打寄りて法義談合樂しからずや

世の人の此味知らで色々といふをば聞くさへたふとからずや
さい／＼に溝をさらへて法の水流せといふも聽聞の事

眞實の人の教をよくきて信する人は眞の佛弟子
眞實を教へる人は善知識よくきく人は眞の同行

物あげる者は門徒で物を取るものは手次ともつたいもない

一五 御名號

我身の事も他人の事も
一目で分る御名號

十萬億土の淨土の事も

あゝ重寶な御名號

貪瞋邪見や憍慢懈怠
氣をつけさする御名號

悪いこゝろが起つて來たと
あゝ親切な御名號

人の行ひよく／＼見れば
鏡のやうな御名號

おのが心の影法師
あゝ明らかな御名號

二 痴詠 千 一 首

一〇四

長女の死の弔狀に對へて吉田孫四郎氏へおくられしもの

弔さよならひのお詞ことばうれしお慈悲じひある人のことばはいつ聞くもよし

弔さよならひてくれる人々多けれど眞に弔さよならひくれる人なし

可愛かわいからうおとましからう葬式さうしきはいつ勤めると聞ふ人ばかり

子に死なれ可愛かわいうないではなけれどもどちらかいへば左程さほにもなし

縦横じゆうようのそれとはちがひ我われは待つ泣なみだかせてくれる人もなきかと

達人の哀愁あいしゅうなどは我われになし唯ただあるものは無情冷酷じぢやうれい

冷酷じぢやうはまだも恕じやくすべし我心わがこころお慈悲じひの所爲しよと上あせるつもり

恐ろしや長ながわづらひもせで早く死しんでくれたを喜ぶこゝろ

どこまでも我われさへよくば子こも妻つまもどうでもよしの我心見わがこころみ

子こが可愛い妻つまなつかしい恥はずかしや眞に可愛かわいは我わればかりなり

金中に子こをさしあげてしまひにはしたにしきたる石川いしかわは我われ

眞に我われ小慈こじ小悲こひもなき身みなり願船がんせんなくば我われいかにせん

蛆うちのわく死骸しがいにいかに經讀きよよむも何なんの甲斐かいあるさつさと燃せ

我死われなば墓はかを建たてるな經讀きよよむな信しんの上うへよりみ名なを稱となへよ

予ちが持論實行さんじゆこうするの時來ときぬと葬式さうしき七日しちすべて全廢ぜんひ

あしたには紅顏こうぎんありて夕ゆふべには白骨しらことなる活いききたるお文

朝八時はつまだ死しにさうになかりしに晩ばんの六時じに白骨しらことなる

我われ彼かれを失うしなひたりと思おもへども彼かれは多くを我われに遣おとせり

世よと我われの眞實しんじやう相あわせをそれ觀みよと我われを教おとへて彼かれは去いりけり

もしお慈悲じひなかりせば我われいかにせん佛ぶつの恩おんを深ふかく思おもへと

泣なみだかうより外ほかに手てのなきこの我われをニヨニヨ／＼顔おもてでうけとるみ親おやぢ

一七 世尊成道

大正十二年十二月一日

門田喜作氏方にて

菩提樹の下に釋尊豁然と眞知見なる意識は開け

其時代行はれたる信仰のみな誤れることを悟りぬ

世の苦惱流出源泉其滅除法をば世尊洞察せりき

世の苦因利已執著にあること、離脱の道は波羅密と知る

人類は皆快樂を渴望し無知のまゝにて漂浪ふばかり

本性を洞察し得る能力を具有しながら迷ひさまよう

誤れる思想に纏縛せられみな本性みんとする人もなし

かゝる世に果して佛の心境を聞きうる人のあるやいかにや

佛さとる業の法則因果法理解するものあるや如何にや

俗言によく打克ちて人間の本性掴むこと出来ようか

形式な儀式僧侶を待たずして自ら救濟求め得ようか

信心は平和の極地涅槃にぞ到る道とは知るを得ようか

斯く愚劣迷妄深き人類に正法宣傳能きるかどうか

正法を宣傳せんとすることは遂に徒勞に終らざるにや

失敗の果は懊惱又苦悶唯害ありて益なからぬか

これ佛の廓然大悟の胸中に起れる疑惑問題なりき

我慾捨て全人類のために立つ佛は猛然宣傳決意

人類を救ふの道は完全の幸福得しむる法説くが一

正道を彼等に示す其他によりよき救の道のあるかは

人類に對する務何よりも苦み惱む人救ふ事

恐るべき苦海に呑吐せられ居る全人類を救ひ目醒ます

濟ひより大なる務人生にまたあるべきか最大事業
法施こそ世の一切の施しの中の最大なるものなるぞ
金錢や命施すことよりも徳の施し最第一ぞ
我世尊全人類がいかばかり苦惱せるかを見抜きたまへば
非常なる慈愛を以て人類に宣傳せんと決心せりき
人民の中に進みて我行きて不滅に至る門戸開かん
聞く耳をもてる有縁の人々に救の道を勇みて説かん

六 信の靈火

ヒマラヤの麓カピラの悉達多太子の胸に靈火點さる
其靈火忽ちにして摩揭陀國王舍城にと燃え移りけり
更にまた舍衛城吠舍離臘波の諸都市を初め津々浦々へ
其靈火西に東に擴りて文化史上の一大偉觀
地球上至る所に精神の文化王國建設せりき

偉大なる其はたらきの源泉はそもそも何なるか如何なる力
其靈火本質はそもそも何なるか佛教の本絶對の信
釋尊の遊行の旅に入々は渴者の水を求むるやうに
宿所なる林の中に流れ込み月下の説法人みな醉ひぬ
静寂な比丘の僧伽の眞中に座せる佛陀の説法ゆかし

一語一語吸ひ込まるが如くにて人の心に沁み込みわたる
 今我等三千年の古の世尊をかくもちかくあふぐは
 ガンヂスの河畔遊行し給へりし世尊のすがた目に見る如し
 時と場所遠く隔てし釋尊をなつかしますにをれぬたふとさ
 我世尊いふべからざるなつかしさ覺ゆるはそも何故なるか
 釋尊を凡ての事を知り抜きし物知りなりとせしは後世に
 我はこれ凡てを知るの知者ならずと世尊は自身否定したまふ
 釋尊の所有せられしものはこれ根本智ともいふべき睿智
 事物をばありのまゝにて其儘に唯はからはず見るの如實智
 釋尊のその説法は平淺なものにてきけば誰にもわかる
 平淺なその教理こそ深遠の佛の體験よりあらはるゝ
 深遠なたゞの空論思想をば釋尊深く排斥せらる

平淺なその教へこそ聞く人の心を捕へ放さぬ所以
 煩鑽なる哲理はいつも人心に喰ひ込む力もたぬが常よ
 佛教が三千年を隔てるも猶人心を引くは平淺
 深遠な道理を説くも聞かぬのに佛は平淺唯人を説く
 釋尊は説くが如くに行ひて行ふ如く説く人なりき
 真實に向つて勇猛にすゝみてぞ憲と信とを人に教へり
 人類に信ずることのたゞとさを釋尊ふかく教へられたり
 宗教の眞生命は信仰であるをば釋尊高潮せらる
 信するといふことはこれ人類の有する最高認識機能
 有限のものが無限に觸るゝ法唯この信の一實の道
 信はこれ宇宙人世の矛盾をば統一整齊せしむる力
 彼と我墻壁破り融け合ひて主觀客觀亦泯じす

有限と無限の間に掘られる溝をば超ゆる飛躍の力
婆娑論に愛に二種あり染汚貪及び不染汚信なりといふ
有愛にて有貪のものは食にして有愛非貪は即ち信と

一九 信仰の原始的意義

信仰の原始的意義三寶に對して不壞の信仰生ず
最早他の師匠に移る様な事なき狀態に達せしをいふ
先づ佛に對する不壞の信仰は如來の菩提信するといふ
二に法に對する不壞の信仰は如來所說の法を信する
三僧伽に對する不壞の信仰は聖者團體僧伽と信する
要するに世尊に對し一念の信生ぜしが原始信仰

吉田孫四郎氏へおくられしもの

長阿含遊行經には法鏡といふこと説けり今俚譯せん
佛諸所を遊行しある日ナーデカといふ村落に到着され
此村に惡疫流行澤山の死人を出し騒ぎをるころ

侍者阿難村の噂を悉細き世傳にかくも申し尋ねき
法の友ザールハ比丘はなくなりき今は何こへ生れをるにや
又比丘尼 NANDAも死し在家弟子スダツタ及びスガタ夫人も
佛いはくザールハ比丘は一切の煩惱斷じ阿羅漢得たり
 NANDAも煩惱斷じ生天し世界に還るやうなことなし
スダツタは姪慾痴薄今一度還來穢國苦本盡滅

スガータは三毒斷じ菩提心得しゆゑ早晩羅漢果開く

カクダ等八人始め五十人又九十人五百人等

これらみな菩提心をば起すゆゑ惡趣に沈む憂ひなきなり
阿難陀よ生あるものの死することこれは世の常不思議でもない
生れたといふことは早死ぬといふ事を豫想す一體兩面
死の一事我等にとりて餘りにも悲痛な事は元より事實

さりながら如何にうろたへさわぐとも死の問題は一步動かず
真剣に死の實相をあやまらず正しく見ぬく事が第一
人間は必ず死ぬる此外に説明はさむ餘地一つなし

人々の死ぬる度毎々に何處へ行つたと聞くはうるさし
これほどに解りきつたる死の事を聞くは厄介生をとへかし

死ぬる事死後の問題益もなし何の興味も我れに與へず
餘りにも唯明な死の事實前にひかへて何地行くべき
やがて死ぬたふとき生を如何にして歩むべきかは唯一問題
故に我眞理の路を歩むべきたふときおしへ汝に示す
不思議なる法の鏡を今説かんこれに照して後生見るべし
法鏡を所持すればみな左の如く自身の豫言すること出来る
地獄餓鬼畜生道の惡世界墮ちんとするも我れは能はず
暗黒の邪惡世界に往く我も今導かれ光明界裡
絶望の地獄も今は解放し希望の光り輝きみちて
動物としての卑賤の恐ろしき果を引く業のみなつきたれば
怨めしと化けて出さうな種もなし思ひの殘る事もなければ
此豫言はき得るやうな確信の原動力は眞理の光り

阿難陀よ法鏡はこれ聖弟子の不壞の信をば得るを謂ふなり
法鏡は佛陀に對し不壞の信抱けりといふ自覺をばいふ
佛はこれ世界人類の誰れからも尊ばるゝの御方なりと
完全に萬象認識されし方賢明公正幸福な方
人類と世界に對し正當の智識を有し給ふ御方と
人間の心調和し人類の導師師匠と仰がるる方
人格の價値を見抜かれ給ふ方祝福すべき覺者であると
佛陀へのこの確信は幻の如き世界の一大偉力
やがて死ぬこの人生に唯一の強きこころの力あたふる
次に又信者は眞理そのものの法に對する信を持つべし
この眞理佛陀自ら體験し主張せられし微妙の法と
この法は世界に於ける唯一の動かし難き價値あることを

この法は時と處と物の上適用せられることはなし
何人も排斥せずに受入れる全人類の一般福音

各自みな價値の生活賦與せられ救濟域に達するを得

世の識者たらんものみなことぐく知らねばならぬ最高眞理
やがて死ぬこの不たしかな人生に一つのまことたしかな眞理

このダルマ客觀的に實相で主觀的には人格正義
このダルマ常に人間生活を精神的に指導開發

人生の上に光明あらしめて意義あらしむる原動力ぞ
次に又信者は僧伽の集まりに對して深き信を持つべし

僧團は佛陀世尊を中心とする平和なる信者團體
恩恵と名譽尊敬にふさはしき價値を有する精神教會

この低き人間世界の土地の上價値のたぬまく最高農夫
汚されず傷けられず破れざる德を有する法力團體
偉大なる人格上の德はよく人類をして自由ならしむ
善良な賢き人に敬はれ稱讃せられ又愛せらる
後の世に唯幸福を得んとする不純の心もつものはなし
外的の行爲をかさで計算し報ひを望む拙き人なし
唯高き聖き清き懺念の思想生活德者團體
崇高な德を有うする人々の平和集團信仰團體
僧團に信仰を持つことはこれ怠慢心に鞭撻與ふ
僧伽の信宗教生活の實際に感激となり刺戟ともなる
又惰眠食る人や無信者の奮起の資料目覺し時計
自ら精神生活する人の築く一つの精神王國

自己照らすこの法鏡に引きかへて淨玻璃鏡人のみうつす
 彼の地獄閻魔大王其前に淨玻璃といふ鏡を立つと
 大王のこの鏡面に人々の起居動靜がすべて映する
 大王は一々之を帳面に記載しあきて裁くなりけり
 人死ぬと大王前に引出され帳簿點検前惡裁判
 この國は死人ばかりを裁く國生きたる人を裁くことなし
 おゝ此奴中中悪い一筋の繩にはとてもからぬ奴ぢや
 臣下たる赤鬼青鬼呼び出してうんといぢめてやれと命ずる
 この國の役人様を鬼といふそして人民總て罪人
 この國の住民はみな罪人で罪人ならぬ人一人なし

治者の鬼裁く事のみにかゝりはて國民裁かれ責められ通し
 叱る聲責め立る聲泣く聲と苦しと叫ぶ聲のみ聞ゆ
 人の罪裁いてばかりる王の目と口だけは大きなものよ
 前に立つ淨玻璃鏡遠い影ばかりうつして近所映せず
 昔から大王自身や鬼達の姿すこしも映らぬ様子
 これゆゑに自分を裁いたこともなく鬼を裁いた事またきかず
 いたずらに他人のことをのみみつめ自分の事はかへりみもせず
 それ故に反省又は内省といふ言葉さへこの國になし
 善惡のない國の人もしこれをみればまことに笑止千萬
 よく見れば果して善か又惡か分らぬ事をすぐきめるとは
 自己を見ず人の善惡きめる程盲目的な大膽はなし
 人の事どころか自己の道求め暇なき人もあるに御苦勞

人の事ばかり裁いて自己の道唯一足も行かうともせず
未來際この地獄から浮び出ることの出来ない閻魔王様

三 平等の救濟

大正十五年五月九日

島田七郎右衛門氏方にて

平等の救ひといはんよりはなほ平等即ち救ひといはん
なぜなれば世の苦しみは多くこれ平等ならざる故起るなり
賢と愚と貧富貴賤と幸不幸男女善惡美醜あるゆゑ

愚貧等割惡きの名苦しむぞ平等ならば何の苦がある

平等の世界がもしもあるならば何等苦しみある筈はない

そんなもの欲しもなけれど其心憎しといふは常に聞事

口にては欲しくもないといへど實欲しきにくれぬ故に苦しむ

本當に欲しくもないが其心憎い場合もなきにはあらず

腹ふくれ食はれもせねど人にくれ我れにくれない心を憎し

くれぬこと實は仕合せにても唯意地と我慢でさうは思へず

傾城にふられて歸る果報者それにちがひはなけれどそれが
ふられては仕合せものと中々に思へぬそれが凡夫のすがた
兎にかくに平等ならぬそのことが苦惱煩悶止まない基る

富貴か貧が不幸か分らぬに富のみ望む故に苦しむ
智者幸か愚者が不幸か判らぬに智者のみ望む故に苦しむ

美が幸か醜が不幸か判らぬに美のみを望む故に苦しむ
強幸か弱者が不幸か判らぬに強のみ望む故に苦しむ
愛幸か憎が不幸か判らぬに愛のみ望む故に苦しむ
分らぬを分つたやうにきめる故なき苦しみを自分で造る
眞實の仕合せは唯この儘が仕合せなりと思ふ人のみ
仕合せと思ふ人のみ仕合せぞ思へぬ人は皆不仕合せ

どうしたら我は仕合せものなりと知ることできるそれをばきかん

此六字一つ頂く人はみな仕合せ者と知ることできる
此六字天にも地にも我一人仕合せ者とよろこぶ聲よ
此六字頂く人は何故に仕合せなるか大利得故
大利とはいふにもいへぬ大儲けかず限りなき大善功德
此儘が凡て如來のお恵みと頂かずにはをられぬゆゑに

智慧や金加へ初めて仕合せと思ふに非ず此儘回向

此儘が我々に最上最善を與へたまふと知るが故なり

本願が我れに相應するといふことは抑も此事なるぞ

本願に相應するといふはこれこの儘なりと任すをばいふ

任すれば取りてよきもの取りたまひ捨ててよきもの又捨てたまふ

足らぬなら足して下さるあまるなら取りて下さる唯親任せ

任せたら唯はからはず惠まるる儘に頂き念佛すべし

算用が違はぬかとは思ふてもやはり其儘まかせおくべし

違ふやら違はぬのやらそんな事唯はからはず任すべきなり

何一つ加へてからの慈悲でない今の此身の此儘が慈悲

お慈悲ぞと唯知るのみぞ此儘がおん計らひの本願相應

我身には相應せりといふことが最第一の仕合せなるぞ

夏衣ひとへに彌陀をたのむかな相應すれば單衣が錦

錦でも夏の綿入何かせん相應せねば錦もつゞれ

此儘が我に相應これ錦應報妙服錦かざりて

丁度よい程よい加減出ずいらす今の此儘安樂淨土

湯に入りて程よい加減思ふとき念佛淨ぶ道理なるかな

極樂は唯無茶苦茶に樂むに非ず過ぎたる樂は苦しみ

過ぎぬれば樂も苦しみ足らざるも又苦ぞ丁度よきは極樂

私は今丁度よきやうはからはれをる身と思はぬ譯にはいかぬ

此儘が丁度よきやうはからはれ居る身と知らば不足いはれぬ

今日以後はいかに導きたまふともおん計ひに小言いふまい

ひたすらに導きたまふ儘に行く我には何の計らひがいる

善惡や邪正を問ふの要はなし一の世界に是非はなきなり

一筋の道行く我れに感ひなし今行く儘が一筋の道

あら樂し本願一實の大道を高歌うたひ二人行くとは
一人行く此儘二人南無阿彌陀稱へて行くが二人行くなり

稱へば助けぬといふ佛ならず其儘救ふの聲が念佛
其儘と仰しやる程の廣大な自由自在の仰せあるかや

其儘と呼んで下さる其事が我を救ふの絶對勅命

此儘で満足できる此仕かけ抑もどんな不思議な法か
不思議法智愚貧富も平等に救ひたまふの不思議妙法
貧富智愚救ふ平等法はこれ貧者と愚者は特に割善し
平等といへど其實惡きもの程割のよい慈悲の大法
さうすれば最惡最愚最貧の我れの救ひは最上無上
最惡の最下の我が最善の六字頂き最上幸福

死ぬるまで我が仕合せを喜びて歌ひ踊りて感謝申さん
法を説く此儘がこれ歌ふなり喜び踊り感謝するなり
聞くまゝが感謝するなり踊るなり喜び歌ふ聲が念佛
喜ぶとよし思はぬも此儘が踊躍歡喜と佛受けたまふ
親様にすがる此儘感謝なりすがる外には御禮もなし
法を聞く事が其儘親様の大御心に叶ふのゑなり
稱ふべし聽聞すべし求むべし此儘凡て彌陀に任せて
平等の慈悲とは實は我一人救ふ教へをさしていふなり
平等を人と比べて平均に救ひたまふと解してならぬ
あの人のやうにならねば平等でないと思へばそれは間違ひ
葉揃ひでないぞ根揃ひよく聞けよ此儘救ふそれが根揃ひ
人様と比べ平等思ふとき何時も苦しみそこに起るぞ

眞實の教は何時も吾一人其儘救ふ呼聲なるぞ

廣い世もみ親と我れと二人きり世態萬狀みなお手廻し
此事を一つ知る人何人も皆平等に救はるゝなり

親一人子一人さらに水入らず皆平等に如來の一子

平等に救ふといふは何人も如來と親子名乗りすること

人様と比ぶることの要のない身にさせ頂く事が平等

愚者は愚者智者は智者にて平等ぞ貧富貴賤も美貌そのまゝ

本當に其事一つもらはるる身となりし事それが平等

其儘と呼びかけたまゝ呼聲を受込み稱ふるこれが平等

此六字貧富賢愚も平等ぞ如來の廻向一味平等

貧富皆二十四文ぞ御廻向の六字千兩無限大寶

有限の我れに無限が加はれば有限の儘無限絶對

はかりなき智慧と功德を得たる人此を念佛行者と名く

三 西岸上有人大喚言「汝」

大正十五年十月三日朝作

汝とは西岸上の阿彌陀様此我れ一人喚びたまふ聲
汝とは必定菩薩信の人喚ばるゝだけで眞の佛弟子
汝とは勿體なくも親様は我に來れと喚びたまふ聲

汝とは逃げる私に親様は是非に來れと喚びたまふ聲
汝とは西岸上の御喚聲聞きたる鬼は必定菩薩

汝とは此鬼目がけ親様が命がけにて喚びたまふ聲

汝とは親の喚び聲此の我に直ぐに來れよ待つて居るぞと
汝とは誰のことぞと餘處を見る此の我一人喚びたまふ聲
汝とは行者をばさすよばれつゝこれはこれはと御名を稱へて
汝とは親様泣かせの此の我を一人子來れと喚びたまふ聲

汝とは誰ひとりとて心から喚ぶものもなき我を喚ぶ聲
汝とはお前一人を待つてをるはやく來いよと喚びたまふ聲
汝とは阿彌陀様から此の我を直々喚んで下さるゝ聲

汝とは本師法皇阿彌陀佛辱なくも我喚びたまふ

汝とは十萬億土の淨土から心の底へ近く喚ぶ聲

汝とはお前一人といふことぞ何時でも親と我は小向ひ

汝とは誰のことぞと思ふたら私のことゝ今聞えたり

汝とは妙人妙好上々人親に喚ばるゝしあはせな人

汝とは最勝希有人彌陀佛に先手をかけて喚ばるゝ人よ

汝とは眞の佛弟子直ぐ來いのおぼせ一つを聞くばかりにて
汝とは芬陀利華人五種の嘉譽頂く人よよばるゝだけで
汝とは彌陀の方から先手かけ此我一人喚びたまふ聲

汝とは朝から夕まで苦から苦へ走る私を喚びたまふ聲
汝とは御座へも出せぬ此我的心の中へまゝやく聲よ
汝とは思ひがけなく親様はちよいと來いよと喚びたまふ聲
汝とは寝ても覺めても親様をちよつとも思はぬ我よびたまふ
汝とは待つて居るとの親の聲どうして行かずにをられるものか
汝とは抑もどなたが誰を喚ぶ聲と思ふか彌陀佛我を
汝とは勿體なくも親様が此の鬼目がけ喚びたまふ聲
汝とは誰にも彼にも見捨てられそれへ知らぬ我を喚ぶ聲
汝とは墮ることをも知らずしておちぬ振する我を喚ぶ聲
汝とはお慈悲を笠に我儘な日暮しをする我を喚ぶ聲
汝とは忘れ通しの此の我に忘れたまゝと我を喚ぶ聲
汝とは善いも悪いも打捨て、我に來れと喚びたまふ聲
汝とは足下見るな胸見るな其まゝ來いの彌陀の招喚
汝とは人と比べてはからうなお前一人の親とのみ聲
汝とはなやむわたしに何惱む我に聞かせと親の喚び聲
汝とは火事場の胸へ其儘と早鐘をつくやうに喚ぶ聲
汝とは六字の如來我を呼び我の返事を待ちたまふ聲
汝とはみ名稱へつゝ沈み込む我が後よりそつと喚ぶ聲
汝とは涙くにも泣けぬ我が胸へ泣くな嘆くな案じなの聲
汝とは妄念妄想絶間なき我を知りぬと喚びたまふ聲
汝とは今此の我を喚ぶの聲今之宗教我の宗教
汝とは五劫の思案も御修行もお前一人のためとの御聲
汝とは今度は是非に來てくれとみ親の厚きたつての願ひ
汝とは三悪火坑におどり込む我にしばらくの聲

汝とは恥も善根も打忘れをる此の我においと呼ぶ聲
汝とは四十八願成就してたのめ救ふと我と喚ぶ聲

已上四十八首

三夜半問答

大正十五年十月五日

高岡市商業會議所にて

眞夜中にふと目をさまし妻は問ふたゞあつかりとおもふてをるかと
我答ふそんなにもたゞあつかりといふでもないがしかしあつさり
心配をしようとおもふも心配もなければあつさりしたものなれど
それかとて何もおもはぬわけでないおもへど小兒のそれの如くに
お慈悲ある小兒とおもへばそれでよしおもふただけよあとかたもなし
屋根がもり寝られぬといふこともなし食へぬ着られぬ心配もなし
何一つお慈悲の事を考へてせねばならぬといふこともなし
唯浮ぶまゝに書付けまた話しする身に世話も煩ひもなし
世智辛き此世の中に我は唯あつかり暮すことのたふとき
唯一つからだの弱きことだけが心配さうなやうにもあれど

これとても心配すべきことでなきばかりかへつて感謝の種よ

豚のやう肥え太りてもこのお慈悲なくば本當に豚であるのに

瘠せ枯れて骨と皮とにやつれても心の餌食肥えてもろく

すこやかにあればかへつて犬のやうわけなくそら吠えかけまはり

しかもいふ大活動と恥かしや犬の活動猫の活動

犬猫の心はあれど飛びまはりほゝける力なきがしあはせ

虚弱とはいへど三界を飛びまはり淨土へ往き來すれどつかれず

してみればたつた一つの心配な虚弱も實は感謝の種よ

虚弱をば勧むる譯でなけれども健康の人目ざめたまへよ

健康といへど聞かねば何になるまめな犬猫ほゝけるばかり

流し汁道端の糞くふ犬の活動振りも考へものよ

それよりはよし弱くともお慈悲きゝ犬猫救ふ活動如何

大活動させて頂きつゝあるの我虚弱とてなげかれようか

唯一つ苦の種虚弱すら然り其他萬般唯感謝のみ

鬼の我に今存在を許さるゝだけにて眞の無上幸福

達者とは元氣なことよ其の元氣抑々何處へ持つて行くかや

其元氣持つて行きどこしらべたらお座へもだせぬあら恥かしや

恥かしい元氣許りの人物を達者な人と世にはいふなり

其元氣勇猛精進と求道にもし向けるなら結構なれど

中々にそんなよいとこ向きよらぬ元氣かへつて厄介物よ

元氣なら畜生道の性慾や金をもうける餓鬼道廻り

弱ければ悲觀絶望自暴自棄この世の無間地獄生活

強と弱何れにしても浮ばれぬ三惡道のお客様なり

此お客様がけて早く來れよとよびかけたまふ人ひとりあり

其方は元氣な大やほゝけ猫喚びかけたまひ人としたまふ
 大猫の元氣の奥に何あると照したまひて見せしめたまふ
 恥かしき其心をもとがめずに元氣ものよとほめたまふなり
 絶望の地獄の罪人救ひ上げまたなきしあはせ者としたまふ
 大猫は恥うちわすれ喜べば地獄の鬼も高歌うたふ
 大猫の踊りと鬼の高歌を歡喜踊躍と佛ほめたまふ
 稱ふるは常行大悲求むるは願作佛心度衆生の心
 大猫のまゝで如來のおてつだひ鬼の歌また讚嘆供養
 強ければ元氣で墮落弱ければ自暴自棄しておつる我身を
 彌陀ひとり猫も杓子も救ひ取り元のまゝにて浮ばせたまふ
 名匠は木を捨てずして用ふとは此事なるか我はしあはせ
 かくもまあがりくねりてしやうなきわれを今かくこのまゝにして

すべてをば生かしたまへる不思議力南無阿彌陀佛とあきれるばかり
 阿彌陀佛四十八願成就して我れを斯く今たのませたまふ

四 學者と覺者 昭和二年一月十三日 常久寺にて

學

覺

目覺めりと叫ぶ人等に惜しむべきもの、一つは獨斷である
 獨斷とひとりよがりの多いのに聞くもの見るもの危くされる
 まだ思想熟して居ないもうすこしうちつき獨斷超えねばならぬ
 斯ふなくちやならないなど、いふやうな思想の論理を超たるそこに
 真實に動いて行ける必然を歩むものには思想はいらぬ
 吾々の考へなどを高尚と思ふてをることそれは獨斷
 與論とか常識とかに欺されてをるこそ思想の去勢ならずや
 寂るその與論常識に欺されぬ超越獨斷こそ活力素
 真實の救ひに型はないなど、叫ぶものこそ型作らずや
 英の子をころがさぬ型參る型念佛振りから歩きぶりまで

覺

本願にどうもせいでよいのぢやといふならそんな狂ぢみた
 真剣な求道振りもいらぬこと矛盾蘊著そこにあらずや
 何一つ求むることのない境地などといひつゝ何求めとる
 憎みあひ嫉みあひつゝそしていふ御慈悲の世界どこが御慈悲か
 本當に型なき救ひなれど唯型にはまれるもの救ふには
 囚れの型を壊すに非んば型なき救ひ得られぬ故に
 止むを得ずそこに自然と新しき型のできるは免れぬこと
 本當にどうもせいでもよいのぢやといふこと一つ聞えしゆゑに
 其事が唯ありがたくおもしろくじつと内には居られぬまでよ
 こんなこと今まで聞かせて呉る人どうしてなかつたものかしらんと
 又こんなこともしらずに今日迄はどうかならねばならぬとばかり
 苦むでをつた私が本當にこのまゝなりでよいと氣づきて

今迄の重荷すつかりうちおろしあらありがたや南無阿彌陀佛

うれしさに己れ忘れて歌うたふ念佛の名に節もつくのぢや

眞劍な求道振りとおつしやるが實は私の道樂三昧

親様の廣いお胸の其中で遊び戯れをるすがたなり

何一つ求むることのない境地其境地をば求めをるなり

求めつゝ何も求めず求めねど求めぬまゝが求めをるなり

求むるの願作佛心求めぬの度衆生心の親心なり

求むるの願作佛心求めぬの度衆生心は二つで一つ

二而不二は矛盾の調和絶體の境ゆゑ此處は學者もしらぬ

體驗の人のみ味はふ境地なり信じなされや聞えにやしれぬ

惡みあひ嫉みあひつゝ其儘が本に御慈悲と知れるから妙

此儘が無碍光佛のおこゝろの中とするゆゑあきれたふとむ

覺が

學者にはわからぬ境地と仰しやれどそんなに仰しやりや俺にも判る

本當にあなたの仰る其通り學者は思想の囚れ人ぢや

こうなくちやならぬときめた其事が所謂自分で自分で自分をしばる

今はあまりに遠慮ばかりして自分を生かすことを忘れた

これからは自由自在におれの道たれにかまはずどしくゆかう

珍らしい堀出しどのぢやありがたゝようこそそこに氣がつきました
道徳や所謂宗教などといふ囚れの型皆脱ぎて、

眞實の自己の生命そのものゝ欣求に生きる世界に生れ

今日迄の利巧な學者が馬鹿になり婆々と一緒に南無阿彌陀佛

大賢は大愚に近し念佛は大賢大愚の落ち會ふところ

三 確 信

昭和三年八月四日

先生病床にて

元氣なる生徒も暑中は皆休む超日月校に夏休みなし

よほ／＼のふけば立つよな私に休ませぬとは無理な話ぢや人間は親切さうに見ゆれども實際親切は露ほどもなし人様を怨むにあらず自己自身休養静養さらにおもはず無理ばかり續けて遂に此様よお前は無理ぢや一寸休めよ

ありがたう本に絶命令ぢや不足いふもの誰一人なし

當分は仰せによりて無理せずに静養します休養します

休ませて頂きませうありがたう快樂安穩凡てまかせて

南無阿彌陀味はふのにはもつて來いあつらへ向きぢやあらありがたや九度五分の熱はあれども左程にもくるしくもなしあらおだやかな

蟬はなく鐵槧つけ蜻蛉前にとぶ鶴の聲遠く聞ゆる

聖教の中にひたるも寧いが病の中に休むも嬉し

暑けれどそよ風吹いて葉も動く夏の田舎はさながら淨土

はからずもみ親によばれお任せしお慈悲の世界までも御回向何もかもいりだけのもの與へられいらぬものみな奪ひたまふかどう不足いふて見ようと思ふても不足の大將も何ともいへぬ嬉しいと言ふもあたらず尊いと言ふても盡きず何ともいへぬ

あら不思議何が不思議といふてでもこんな不思議はどこにあるかや婆中の人人が聞いても聞きさうな柄でないわれお慈悲聞くとは

まだそれで足らいで一生かゝつても遇はれさうにもない人に遇ひその人は虎か狼か知らねども光りの中に日なたぼこする

猛獸が猛獸忘れ喜々として親の懷に休むが信か

あの獣がごろり出して眠るやうそのごろりが唱ふる六字

されど父猛獸ほえる其聲も南無阿彌陀佛聞くも勇まし

ごろりも吠ゆる大聲も聞く親は子にも優りて嬉しかるらん

教團は猛獸駆ける牧場でこのまゝ菩薩の住める淨土か

とにかくにわたしに取りてはこの儘が安養世界淨土の出店

淨土にて得べき徳をばおこゝろを信ずるものに興へたまふか

そんなこと思ふてならぬと言はれても思はれるものどうなるものか

金子氏の淨土の觀念といふやうな理屈や概念の淨土に非ず

信心を學問的に論すれば七面倒なものであれども

馬鹿になり理屈言はずに浮ぶまゝ味はふ時は面倒はなし

さばく人あれば勝手にどうさばきなさるもそれはお勝手次第

どこまでも私の安心は違はぬと決めやうとしてこそ六ヶしけれど

決める世話いらず頑張る事いらず違ふとあればはあさうですか
違ふたら直して下さいどなた様仰つしやる事でも拜聽します

さうしたら聞くか聞かぬかそれだけは私自身もとんとわからず
乞食でも私の虫の承知するやうに諭せば聞くかも知れぬ
そのかはりどんな權利のある人が殺すといふても聞かぬも知れぬ

聞くかぬそんな天地を飛越えた身にさせられた事がうれしい
さうすれば無碍の世界ぢや本當に侵害する人なき地に入れり

そんなこと説けば邪魔ぢやと言はるれば時には遠慮するかも知れぬ
そんな事思ふてならぬと言はれてもそれは出來ない何故なれば
若し人に水が冷い火が熱いさういふならば命を取ると

さういへば言はぬも知れぬ然れども思ふてならぬと命ぜば如何に
水あつい火がつめたいと思はねば殺すといふても聞くであらうか

八つ裂きにするもそんなに無理なこと思はれようか信ぜられようか
若し汝救はれたりと言ふならば殺すといへば言はぬも知れぬ
然れども救はれたりと思ふなら殺すといふもそれは聞かれぬ
わたくしの信は理屈を抜きにした主觀の事實自明の眞理

火があつい事よりもまだ明らかに餘地のなき事實信
常にいふ主觀客觀とび超えた主觀の上の事實なるなり
生意氣な田舎の愚夫の集まりをお慈悲の世界などいふなら
金子氏も多田氏もはだしで逃げるからさうは言ふなと懇願すれば
言はぬかも知れぬがさうは思ふなとよし言はれてもそれは聞かれぬ
其故は慈悲の世界といふたのは私がいふたに違ひなけれど
然しさう思ふた事は私でないからであるそれ故にまた
思ふまいと思ふて見ても私でどうすることも出来ぬからなり

譯　　詠　　集

一　　本典總序文俚謠解

大正七年九月彼岸中

難思弘誓度難度海大船
無碍光明破無明闇慧日

世の荒波を漕ぎ分けて
涅槃の岸まで安々くと
渡す御船は此六字

胸のくらやみ打破り
罪も障りも其儘に

夜あけさするは此お慈悲

一五二

然則淨邦緣熟調達閻世興逆害

淨業機彰釋迦韋提選安養

斯乃權化仁齊救濟苦惱群萌

世雄悲正欲惠逆謗闡提

家内不和合で苦しむ人は早く聞き取れ此の教へ
提婆阿闍世のあの逆害もわたし一人へおみせしめ

爾者圓融至德嘉號轉惡成德正智

難信金剛信樂除疑獲證眞理也

病者の名六字の藥聞い胸ぢやで御光明

藥のきめで心もひろく體もゆたかな行と信

爾者凡小易修眞教

稱へ易うて忘れもせねば落ちる世話ない此六字

愚鈍易往捷徑

親と二人の道中なれば南無阿彌陀佛の高歌よ

大聖一代教無如是之德海

極惡最下の此私に極善最上の法廻向

捨穢忻淨迷行惑信心昏識寡惡重難多特仰如來

厭な婆娑ぢやが仕方がないと口説く人なら聞いて見
稱へて居つても氣が落ちつかず聞いて居れどもはれられず
はれぬまんまが凡夫の自性などといふ人特にきけ
悪い奴ぢやとすこしは知れりや早く出て聞け御呼聲

噫弘誓強緣多生回值

真實淨信億劫回獲

あはうと思ふてもあはれぬ御慈悲どんな不思議であふたやら
獲やうと思へば中々得れぬ得れぬ私の名與へもの

遇獲行信遠慶宿縁

聞く身になつたも皆親様の幾世々々の御手まはし
此迴覆蔽疑網更復逕歴曠劫

聞えぬからとて疑ふてくれな今にきこえる直とれる

誠哉攝取不捨真言

ほんとにこのまゝふどころずまゐにげるところもないわいな

超世希有正法

こんな不思議な御慈悲がまたもあつてたまるかあるものか

聞思莫遅慮

聞くといふのは耳みみではないぞ心こころの底そこへよく聞くのき

一五六

爰愚禿釋親鸞慶哉

西蕃月支聖典東夏日域師釋

二尊七祖祖師善知識私一人にきかすため

難遇今得遇 難聞已得聞

遇ふた聞いたところはなにやおかぬ法のおしあげこゝにある

敬信眞宗教行證

法のほかよくきかば言ひ一つに譬へてもる

御慈悲聞えりや稱名が續く續く稱名で恩知れる

斯以慶所聞嘆所獲矣

いふもかたるもおもふもみんなこれは／のほかはない

(一) 第十八願文

設我得佛
十方衆生
至心信樂
欲生我國
乃至十念
若不生者
不取正覺
唯除五逆
諸有衆生
聞其名號
信心歡喜
乃至一念
至心廻向
願生彼國
即得往生
住不退轉
我得佛
迷ひの衆生
いのちをこめて
念佛稱ふる
もしもこの事
彌陀とはいは
鬼にもまさる
身となさん
出来ぬなら
ぬ親ぢやない
惡人は

誹謗正法 一番がけにすくはなん

(信卷本、銘文、願々鈔參照)

(二) 本願成就文

諸有衆生
聞其名號
信心歡喜
乃至一念
至心廻向
願生彼國
即得往生
住不退轉
いかなる人もことごとく
六字のいはれをよくきけよ
きけばきこえるすぐとれる
これはくの別天地
ありがたやあら不思議
一つでおのづから
行く未來の苦もぬけて
どころずまゐの身となるぞ

唯除五逆 鬼のそのまゝうけとるの
誹謗正法 親の實意をうたがふな

(信卷末、一多證文、改邪鈔、執持鈔、願々鈔、最要鈔等參照)

(三) 一念大利文

其有得聞 聞いて信じていたいて
彼佛名號 六字の主となれる人
歡喜踊躍 こゝろうきたち身もおどり
乃至一念 よろこびたのしむ一念に
當知此人 しらずおぼえずおのずから
爲得大利 佛のたねを身にうけて
則是具足 正定不退の身となりて

無上功德 功徳利益も身にみつる

(行卷、一多證文參照)

三 銘 文 俚 詠

信珠在心照迷境

信心のたまをこゝろにえたる人生死のやみにまどはざるなり

稱佛六字即嘆佛

此六字不可思議なみ親不思議法不思議力だと讚嘆の聲

即 懾 悔

稱ふるは慈悲の鏡に照されてあらはづかしとあやまるこゝろ

即發願回向

稱ふるは法の力に導かれ勇みて西へ行くすがたなり

一切善根莊嚴淨土

稱六字あらゆる善と功德とをおさめて我にあたへたまへり
稱ふれば淨土をかざる莊嚴と聞くもたふとき事にあらずや

拾遺古德傳繪詞四卷五段

凡夫人出離要道念佛の唯一行にしくものぞなし
 機をいへば十惡五逆破戒等その行いへば十聲一聲
 この信をいへば一念十念ぞいかなる愚者もおこしつべしと
 いづれの機いかなるやからすてられどもとより十方衆生とあれば
 有罪無罪凡夫聖人持戒破戒老少善惡若男若女
 名號をきゝえてんものちかひゆゑこれを攝取したすけます
 罪よかくさとりすくなきものはみないよいよ本願あふぐべきなり
 そのゆゑは彌陀の本誓聖人のためにはあらず凡夫のためぞ

五 御傳鈔俚詠

大正十一年三月十五日

隱遁のこゝろにひかれ吉水の禪坊をたづね參りたまひき
 難行の小路はまよひやすきゆゑ易行の道へゆかんためなり
 吉水の聖人ことに眞宗の淵源つくし理致を述べらる
 たちまちに他力攝生の旨を得て凡夫直入の真心決定
 師上人流刑に處せられ給はずば我又配所におもむかんやと
 もしもわれ配所におもむかんば又如何で邊鄙の群類化せり
 源空は勢至の化身太子又救世觀音の垂迹なりと
 二菩薩のおん導きに順ひてわれ本願をひろむるにあり
 憲禪建仁辛酉の脣難行すてゝ本願に歸す
 幽栖をしむといへども道俗のあとをたづねて教を仰ぐ

蓬戸をば閉づといへども貴賤みな衢にあふれ道きを乞ふ
佛法を弘通せんとの本懐もこゝに成就と喜び満つる

衆生をば利益せんとの宿念も今たちまちに満足せりと
辨圓が我聖人に謁せんと禪室へゆきたづね申さる
上人は左右なくいで、あひたまふ尊容おがみ害心滅す
ありのまゝ日來の事をかたれども又おどろける御事もなく
たちまちに弓箭をきり刀をすて頭巾をとりて佛法に歸す

六 敦異鈔俚詠

大正十一年三月十七日午前八時

門田喜作氏方にて

誓願を信じ念佛まふさんと思ひたつときおさめとらるゝ
本願は老少善惡をそらばれずたゞ信心を要とすとしれ
そのゆゑは罪惡深重の衆生をばたすけんための願なればなり
稱ふれば如何なる善もほしからず念佛にこす善なき故に
信すれば惡もおそれず本願を邪魔する程の惡なき故に

二
身命をかへりみずしてはるゝと法きかんとてたづね參らる
念佛のほかに法文しりたりとおぼしめすならそれはあやま
法文は學者にあひて問はるべし南都北嶺學者澤山

親鸞はこの念佛でたすかると仰せ蒙り信するばかり

念佛は淨土往生のたぬなるか地獄の業か我つむしらず

われたとひ法然上人にたまされて地獄へゆくも後悔はせず

その故は行をはげみて佛になる身が落ちてこそ後悔もあれ

親鸞は何れの行もおよばれず地獄一定すみかぞかしと

本願がまことなりせば釋迦の説教いかで虚言なるべき

佛説がまことなりせば善導の御釋も又虛言ならんや

菩導の釋まことなら法然の仰せいかでかそらごとならん

法然の仰せまことなら親鸞が申す旨又いつはりならんや

要するに予が信心はこのとほりともするも勝手たるべし

三

善き人もなほ往生をとぐるのにいかでいはんや悪人のわれ

四

世の人は悪人さへも往生す善人おやとそれはあやまつ

この條は道理のやうにおもへども本願他力の意趣にそむけり
そのゆゑは自力の人はお他力をたのまゆゑに本願でない

しかれども自力のこころひるがへし他力ためば往生とぐる
煩惱のわれら生死をはなれぬをあはれみたまひ願をばおこす
本願をおこしたまふの本意たゞ悪人のわれ成佛のため
お他力をたのむ悪人たれよりも正客様を往生の因

念佛はすゑとほりたる大悲心自力の慈悲はとてもかなはず

親鸞は父母孝養のためにとて一遍たにも念佛はせず

そのゆゑはわがちからにてはげむ善にてもあらねば頂くばかり

五

親鸞は弟子をもたずと候に弟子の諍ひあさましきこと
師にそむく人よろこぶも往生をせずといふことはならぬ
如來よりたまはる信をわがものにとりかへさんといふにはなきか
何事もはからひなりと知るならば佛恩も知り師の恩も知る

七

念佛者無碍の一一道そののゑは信の行者に邪魔なきのゑに
神々も歸伏し外道障碍せず罪もむくいも感ぜぬのゑに

八

念佛は行ではあれど行でない善ではあれど又善でない
われとわが行する行にあらず又われにてつくる善にあらねば

九

念佛は申してをれど轉びの心おろそかなるはいかにと
またいそぎ淨土へまゐる心なしいかにと申しいれて候
親鸞も亦此不審ありつるに唯圓坊も同じことかと

をどるほど喜ぶべきをよろこばぬ身のゑいよく往生一定
佛かねて煩惱具足の凡夫ぞとおほせのあればわれは正客
お淨土へいそぎてまゐるこゝろなくよろこばざるも煩惱の所爲
いさゝかの所勞のことももしあれば死なんずるやと心も淋し
住みなれし苦惱の舊里はすてがたく生れぬ淨土慕はぬはわれ
まことにも我はよくく煩惱の興盛なりと今ぞよく知る

よくくの此わしゆゑによくくのお慈悲おこると菅瀬師はいふ
娑婆の縁つきてかの土へまゐるなりなごりおしくはおもひながらも
まゐりたき心なき身をとりわけてあはれみたまふこれにつけても

呼びや急ぎまゐらん心あらば煩惱なしとあやしまんもの
彌陀佛の願をよくく案すればこれぞ親鸞一人がため

たれもみな如來の御恩沙汰なくてよしあしとのみまふしあひけり

聖人は善惡ふたつみなともに存知せざるとおほせられたり

よろづことそらごとたはごとまことなし念佛のみぞ唯まことなり

七 横川法語の歌

大正十一年十二月二十七日午後

よろこべよ三塗をはなれ人間に生れしことを先づ第一に
おとらんや身はいやしくも畜生にはだかでありし事もなければ
生さるべし家まづしくも餓鬼道に餓と凍をしらぬ身なれば
思ふ事かなはざれどもよろこべよ地獄の苦にはくらぶべからず
住うきはいとふたよりぞこれなくば何喜ばんかゝるお慈悲を
信心はあさしといへど本願がふかきがゆゑにそれでたすかる
念佛はものうけれども稱ふれば光明攝取功德莫大
このゆゑにこの本願にあふことを深くよろこびつねにとなへよ
妄念は凡夫の地體この外に別に心はなきとよくしれ
死ぬるまで一向妄念の凡夫ぞとおもひ念佛申せたすかる

死ぬるとき妄念さらりひるがへしそしてさとりの心とはなる妄念のうちより申しだしたる念佛こそは泥中の念佛はにごりにそまぬ蓮の花決定往生うたがひはなし

八 佛說阿彌陀經俚譯

大正十二年四月九日

阿彌陀經姚秦三藏鳩摩羅什みことのりをば奉じて譯す
如是我聞あるとき世尊舍衛國の祇園精舍にありて說法

千二百五十の比丘は會座の衆みな有名な大羅漢なり

その中のおもなる人は舍利弗と摩訶目犍連・摩訶迦旃延
摩訶俱絺羅・離波多・周利槃陀伽・難陀・阿難陀・羅喉羅・憍梵婆提
賓頭盧と頗羅墮・迦留陀夷・劫賓那・薄拘羅・阿毘樓駄などの大弟子
文殊師利・阿逸多菩薩・乾陀訶提・常精進等大菩薩衆

帝釋天などの無量の一切の諸天大衆亦俱なりき

そのときに世尊長老舍利弗に下の如くに告げたまひけり
西の方十萬億の佛土すぎ一世界あり極樂といふ

極樂に佛あり彌陀と號しける今現在に法説かせらる
 彼土なぞ極樂といふ其國の衆生衆苦なく樂うくるゆゑ
 七重の欄楯羅網行樹など四寶をもつて嚴飾せらる
 七寶池八功德水みちみちて底は黄金の沙しきつめり
 池の四邊階道あり四寶合成す上に樓閣七寶嚴飾
 池の蓮華車輪の如し青や黃赤にも白にも皆光あり
 其蓮の香は潔く微妙なり功德莊嚴皆成就せり
 天樂のしらべはたえず黄金の地晝夜六時に曼陀羅華雨る
 其の國の衆生毎朝華皿に妙華を盛りて諸佛を供養
 食前に淨土に還り食後また寶池寶樹のあひを經行る
 彼の國に白鵠孔雀鸕鷀舍利迦陵頻伽と共に命鳥など
 いろ／＼の奇妙な鳥が雅やかなやさしい音色いだしてぞなく
 その鳥の音色の中に五根力・七菩提分・八聖道分
 音を聞いて皆こと／＼く佛念じ法をば念じ僧を念する
 この鳥はこれ畜生の類ならずそれは彼土に惡趣なきゆゑ
 この衆鳥みな阿彌陀佛法音を宣流せんため變化の所作ぞ
 風ふいて行樹や羅網ゆるがせば百千種樂かなでるごとし
 この音を聞けば自然に佛念じ法をも念じ僧をも念す
 舍利弗よ汝意にどうおもふかの佛をなぞ阿彌陀といふぞ
 佛及び人民の壽も限りなしゆゑに阿彌陀と申すなりけり
 阿彌陀佛成佛已來十劫といふ年月を経らせられたり
 彼佛のみもとに無量聲聞衆みんな阿羅漢其數知れず
 諸菩薩衆またかぎりなし極樂は聖者によりて莊嚴せらる

極樂に生るればみな不退轉一生補處の菩薩も多し
 淨土法きく人まさに彼國に生れんとこそ願すべきなり
 そのゆゑはもろゝの上善人の一處に會すること得ればなり
 彼國に少善根や福德の因縁をもて生すべからず
 善男子善女人もし彌陀法を聞かば六字のみ名稱ふべし
 名號を執持すること一日かもしは七日一心不亂
 命終のとき阿彌陀佛聖衆とともに來りて前に現ぜむ
 死ぬるとき心みだれず彌陀佛の國にすなはぢ往くことを得る
 我れこの利見るがゆゑにぞかくは説くきくものまさに發願すべし
 彌陀佛の不思議功德を今こゝに讀ずるがごと諸佛も共に
 六方の諸佛は彌陀の不可思議な功德を我れと共に讀嘆
 東方に阿閦佛や須彌相佛・大須彌須彌光・妙音佛等
 南方に日月燈佛・名聞光・大焰・須彌燈・無量精進
 西方に無量壽佛や無量相・無量幢佛・大光佛等
 大明佛・寶相佛や淨光佛かくのごときの恒河沙諸佛
 北方に焰肩佛や最勝音・難沮・日生・網明佛等
 下方には師子佛・名聞・名光佛・達摩・法幢・持法佛等
 上方は梵音佛や宿王佛・香上・香光・大焰肩佛
 嚴身佛・娑羅樹王佛・寶華德・一切義佛・如須彌山佛
 恒河沙の諸佛廣長の舌を舒べ徧く三千世界を覆はる
 真實の言葉を以て勸めらる汝等衆生彌陀を信ぜと
 彌陀佛の不可思議功德説ける經よく信ぜよと諸佛はすゝむ
 一切の諸佛はともに護念するこの經法を衆生信ぜと
 何故に一切諸佛所護念の經と名くる舍利弗知るや

御名および此經きける人はみな諸佛に護念せらるゝ故に
護られてみな不退轉阿耨多羅三藐三菩提をうるなり

このゆゑに汝等まさに信すべし我が言および諸佛の所說
已今當彌陀佛國に生ぜんと願せんものは皆生すべし

このゆゑに信あるものは彼國に生ぜんとこそ願すべきなり
諸佛をば我れ今稱讚する如く諸佛亦我が說を稱讚

かくぞいふ釋迦牟尼佛はよくもまあ甚難希有の事をなせりと
五濁世に正しき普偏の智慧を得て世間難信の法をば説くと

時濁り(劫)邪見や(見)まどひ(煩惱)徳廢れ(衆生)命もぢぢひ(命)世智辛き世に
よくもわれかくも惡世にこの難事なしとげたりと我もおどろく
世のために此難信の法をとくこれは甚だむつかしきこと
この經を説き終るとき會座の衆みなよろこびにみちてかへりぬ

舍利弗や諸比丘天人阿修羅等歡喜信受し禮して去りき

九 口傳鈔上第七章の「凡夫往生の事」

につきて 大正十二年十二月七日 密政次郎氏方にて

凡夫人、眞實報土にいたること聖道諸宗のゆるさぬところ
我が淨土眞宗にては善導の御こゝろにより凡夫往生
淨土をば報土とさだめそこに入る機をばさかんに凡夫と談ず
聖道の教にふかく因はれし人は此義に疑ひいだく

疑ひのきさすところはあながちに超世の悲願いなむにあらず
我身分卑下しこれではいかにやとはからひ入れて他力うたがふ
疑ふは無明痴惑かかつはまた明師にあはざるゆゑにしかるか
眞宗は凡夫のためのおしへにて聖者のための教でなきゆゑ

「凡夫とはとりえなきもの」

欲ふかく瞋恚もたやすく愚痴おほしそれにつけても往生必定
あやまつて善心しきりにおこりなば往生不定のおもひあるべし
そのゆゑは凡夫のための本願と佛説分明虛妄なれば
凡夫げもなくばもしわれ本願にもれもやせんとおもはるれども
我すでに三毒ふかし泥凡夫これがためとて起されし願
さればたゞわろきにつけてこれゆゑに往生せずばあるべからずと
さればたゞ親鸞一人がためなりと五劫思惟も永劫修行も
聖人にかざるべからず我等みな末世の凡夫往生おなじ

二 御 渡 へ 章

大正十二年六月八日
林興藏氏方にて

此章は信心の渠さらへ章又は獲信御満悅章

七ヶ日報恩講のあひだには大略信を決定せりと

大略に二つありとは古來いふ人大略と法大略と

十人のものが七八九人までいたきたるが人の大略

信心のいはれ大方いたきしそとおもふのが法の大略

信心をえたまへるよしさこそたり芽出度本望これにはすぎず

本望は本來希望のぞみなり我本心の願ひをばいふ

本望をとげたと世にもいふごとく願ひかなひし事をいふなり

かたきうち本望とげた金ためて本望とげた世の人はこれ

人々の信とることをきこしめしよろこびたまふが蓮如上人

信とるをきへて本望とげたりとよろこびたまふとからずや
信心のさだまるときをまちえてぞ彌陀の心光攝護すといふ

信を得ば親も本望祖師知識これにすぎたる本望なしと

本願と本望志願よく似たり彌陀と知識と衆生のねがひ

本願は信ぜしめんの願ひなり我信すれば如來本望

信すれば教へし知識よろこびてこれに過ぎたる本望なしと

信すれば無明長夜の暗を破し衆生の志願みてたまふなり

志願とは我こゝろざし願ひなり願はぬ願ひ今かなひたり

我が願ひ名利愛慾金知識さては權力さては享樂

出來ぬことばかり願ひて能きぬとて苦みし我本望とげぬ

できぬなりそのまゝかせうけとの仰せ一つをもらひ満足
人生の目的はなにこれ疑問判らぬなりで今判りたり

何にてもいまだ満足出來ざりしものが満足できるが證據
 そのまゝの仰せ一つで何もなく満足できる不思議ならずや
 願はざる願ひがかなひて不足なしこの願まで如來御廻向
 信すれば願はぬ願の主となり行ぜぬ行のまた主となる
 願はねど求道心の湧き出でゝ聞かずにをれぬいはずにをれぬ
 信すれば願もおこれば行できる願行具足他力御廻向
 信すればきゝたくもあり功德みつ發願廻向南無阿彌陀佛
 南無歸命發願廻向阿彌陀佛卽是其行の活きた説明
 信心の溝をさらへて法水をながせといへる言葉めづらし
 信心の溝妙な溝なりどんな溝いつ出來し溝だれほりし溝
 智慧の渠穿ち甘露の水引くと六波羅密といふ經にとく
 智慧の溝信心のみぞ信は智慧佛智をうるを信心といふ

甘露水彌陀の法水天酒なり極樂の水醉ふことは妙
 信心の溝をさらへて法水をながすとは又どうすることか
 信心をえたるとほりをいくたびも人にたづねてよくとへの意ぞ
 いくたびも人にたづねてよくきけばきかずにをれぬ身となるの意ぞ
 一往の義をきゝ手前ぎめすれば安心もまたうとくしきと
 信心の溝はどうしてさらへるかなにでさらへる何をさらへる
 何故に溝をさらへるごみたまるはうきではない水にてさらへ
 信心の溝何たまるみるうちに橋慢懈怠さてはもやく
 橋慢や懈怠のごみをはからひのはうきではらふもなかくゆかず
 法の水二尊のおほせ教と行聽聞は教念佛は行
 教行の水をながせば橋慢や懈怠のごみはあとかたもなし
 教行の水をながせば信のみぞ月影うつし音さはやかに

女人の身諸佛にみすてられたるを彌陀なればこそたすけます
 すてられておもひのまことにとぶ鳥女人はからずしあはせものよ
 すてられし事がそのまゝおたすけにあづかるたねときくもたぶとし
 女人の身眞實心の上になほうたがひふかし厄介なもの
 其上に又ものなんどいまはしくおもふ心はうせがたきとは
 厄介なものにちがひはなけれどもかゝるものと佛智にかへれ
 厄介な心のおこる下からもみ親に問へよ何と仰しやる
 この彌陀のやくかい物になりくれよ遠慮をするなまかせくれよと
 在家の身子孫などにかゝりはてたゞ今生の事にふけりて
 ふけるとはおぼるゝをいふ愛欲に首まではまることをいふなり
 世の中におぼれし人の言ひ草は渡るゝといふにぞありける
 これだけはせずにをられぬあれだけはせねばならぬとつひに首まで
 渡るとはこれより向ひに渡るなり何處の向ひに渡るつもりか
 溺れつゝ渡るゝとおもへどもうかぶ瀬のない深瀬にむかふ
 たゞいまの三途八難どうするかいつでもきけるものとおもふか
 地獄餓鬼畜生道と北州と佛前佛後聾盲暗口
 長壽天世智辨聰の八つをば之を聞法八難と云ふ
 苦も樂も過ぎては聞けず聞かされずおしつんぼでも智慧がすぎても
 いたづらにあかしくらすは常の人誰か意義ある生をおくるか
 いたづらにあかしくらして火の坑へおちこむこの身うつてかはつて
 ありがたや本願一實の大道をよろこびいさみすくみゆく身と
 砂をかむやうな人生おくる身が金貨を拾ふやうな日暮し
 これにより一心一向一佛の悲願に歸してふかくたのめと

これにより承上起下のことばなり前をばうけて後をおこす語
 女人の身つみとがふかしこれにより慈悲の本願ふかくたのめと
 女人の身うたがひふかしこれにより唯一心にふかくたのめと
 在家の身世路にふけるこれにより雜行すてふかく信ぜと
 今しづむことをもしらずこれによりみなうちすて佛智に歸せと
 信心もうせおふらふぞこれによりみどをさらへて法水ながせ
 一心と一向一佛一ぞろひ一つのものに惑ひやうなし
 もの二つあるで心が迷ふなり一心一向迷ひやうなし
 愚者にても一筋道にまどひなし本願大道一筋道ぞ
 いつきくもそのまゝこいの呼び通しにげ上手でもにげやうはなし
 どうなれとあればなれぬとにげやうもあれどそのまゝ何とにげるか
 ありがたい時もそのまゝよろこべぬ時もそのまゝどこへにげるか

一佛の悲願に歸せよ一佛ぞ二佛でないぞ彌陀一佛ぞ
 願行もみんな親鸞一人がためなりけりと祖師はのたまふ
 御和讃に無上寶珠の名號と眞實信心ひとつとはいふ
 親一人子ひとりさらに水入らずいつもみ親と我と小向ひ
 親一人子ひとり更にみづいらす名號一つ信心ひとつ
 たのむとき佛心凡心一體になしたまふをば一心といふ
 信えたる體はすなはち六字なり念稱是一口も心も
 南無阿彌陀親の呼び聲我が返事親を呼ぶ聲親の御返事
 松の木は實も松なれば花も松枝も葉も松幹も根も松
 本願も六字行信みな六字み親も六字我れ亦六字
 彌陀如來南無阿彌陀佛信すれば念佛行者やつぱり六字
 一佛の悲願に歸せよ悲願とは慈悲の本願み親の心

誰一人相手にしてのなき我を一人子と呼ぶ慈悲なお心

心から我を呼ぶものどこにあるもしあるならばくさきものなり
看屋を呼べど看屋いらぬなり看が欲しき故に呼ぶなり

看屋よわれをよぶとは思ふなよ看もたずばよぶ人もなし

我を呼ぶものあるならば色か金われを呼ぶとはおぼしめすなよ
おちぶれて袖になみだのかゝるとき人の心のおくぞしらるゝ

なでさすり大事にするも埋み火のつめたうならぬうちでこそあれ
心せよ親切さうに見せかけて實は地獄へ呼ぶものばかり

歸するとは歸命するなりまさすなりあてにするなり信するをいふ

あてにする人ひとりなきこのわれにてにせよとはみ親の聲ぞ

あてになり力になつてくださるゝ人は世界にたつた一佛

ふかくとは心ふかめる事でないふかきお心信するをいふ

月うつる水淺けれどうつる影底なきまでにふかくみゆれば

信心のあさきはよかき道理ぞと法然上人のおほせられたり

法語にもわが信心はあさけれど彌陀の本願ふかきが故に

信じぶり信の相はあさけれどうつる六字の月影ふかし

わが淺き心にうつる親心ふかきがゆゑにあさきこのまゝ

たのむとはたのみにおもふたよるなりそのまゝこいのおほせたよりに
淺はかな胸ながめずにそのまんまこいよのおほせふかくたのむの
難行を修する心をすてよとは「ねばならぬ」をばすつるなりけり

(附) 追 徒 論

彌陀佛の悲願に歸して一向に諸神諸佛に追従すなど
追従はへつらふをいふお追従申し機嫌をとるをいふなり

追從は人のことばのあとを追ひ人の心に従ふをいふ
神佛に追從するは雑修なり人に追從おべんちやらなり

おべんちやら雑修のこゝろうちすて、唯一心におれにすがれと
此の六字萬行總體このみ親本師本佛追從いらす

追從や我慢輕薄わがこゝろおいはぎされて丸の裸に
神佛に追從申すこゝろとはいのりのこゝろ願のこゝろ

心だにまことの道にかなひなば祈らずとも神やまもらん
ひたたひも佛をたのむ心こそ誠の法にかなふみちなれ

念佛は誠にかなふ法の道何をねがはん誰にいのらん
願ふてもかなはぬ願ひ如來より先手をかけて聞けよの願ひ

願はれし身とはたふとし願ふても聞いてくれてもなきこの我に
無始已來彼さちあれと祈りづめ一人子としてはぐみたまふ

祈られて今こゝまでに導かれをる身なにをか祈りもとめん

本佛にいのられし身が神佛に祈り追從何要せんや

神佛はわれを本師の彌陀佛におくりとぞけんための御役目

われ彌陀に歸するをながめ神佛は横手をうつて喜びたまふ

御禮こそいふべきなれど追從や祈りや機嫌何か要せん

御禮とて別にどうする事でないやはり六字を稱ふるばかり

孔子いふ富でおごらず貧くてへつらはざるは君子なるかな
我れいはん一佛信じ一切に追從なきは信者なるかな

追從のこゝろわれをば苦めし怪物なりと今ぞしらるゝ

追從は御機嫌とりて世辭いふて御氣に入らんといふ卑怯心

擇のちりはらふて増俸いのるなり戦々競々免職おそる

ねが持てる心の機嫌とれぬ身が人の機嫌をとるは御苦勞

御機嫌みつけんをとるなら人のこゝろよりおのれの機嫌みつけん第一にとれ
他人より近いところに御機嫌のわるいお方かたがあるで面倒めんどう
その御方無始劫來の古狸ふるたぬき自他じじをくるしめほとけもなかす
この御方かたおひとりうんとおつしやれば天下てんか泰平たいへい國家こっか安穩あんのん
さうすれば何よりかよりこの御方御氣かたごきを直なほしてくださりませい
古狸ふるたぬきこたへてはくそれもよいそれではおれのいふ事こときくか
何なりとせきることならきくませういふてくだされおきくしませう
お、そうかそれぢやいふてもきかさうが吃驚びつもんするな静かにきけよ
金巨萬高數千石きんぐまんこうすうせんせき其上かみのうに美妃びきは三千酒池さんせんしゅちと肉林にくりん

おどろいたそんな大きな夢ゆめみたい事をいはずにどうかもすこし
お、さうかそれぢや大まけいたさうか村の一人じん一家團欒いっかん
はいなやうお安やすいやうにきこゆれどそれも中々話なまなましにならぬ

きりようよく命いのちも長く病病なく食くふにこまらぬだけの財産ざいさん

これなればきいてもくれよう話はなにもなるでもあらうきくかきかぬか
ごきりようといのちはとても人力の及およばぬところそれをばぬきに
あと二つそれではきくか安すぎる無病息災生の安定あんてん
できるだけ御馳走ごちそういたし滋養分じやうぶんとりて衛生注意えいせういたさん
はて生の安定の件ことそれだけでこらへて貰うふわけにゆかぬか
これしきの事ことで中々どうなるか生活程度せいかくていど高たかき今頃いまどき

御ごもつともなれどきりなき人心じんじんそれで満足まんぞく是非願せひねがひます
満足まんぞくせ何なんをぬかすか此この一語ひとごきくすてならぬ何なんもきかぬぞ
満足まんぞくしこれでよいわとななければあすから食くへも呑のまれもせぬぞ
そんなにもおこりなさるな言葉尻ことばじりとりていはずもよくきくなされ

さかずともよくもわかつた言葉尻とるではないよ主義のちがひぢや
 満足の主義は亡國墮落主義われは奮闘努力の主義よ
 一概にさうもいはずにきくなされ物はとりやう見やうにもよる
 奮闘はよいにちがひはなけれども中々つらき自力主義なり
 満足も消極主義はわるけれど積極主義の満足はよし
 他力主義本願力の自然主義満足進取妙法ときく
 南無阿彌陀自利利他圓満大行ときくもたふときことにあらずや
 それでよしなんにもいふなもうきかぬきくもいやらし談判破裂
 自然主義亡國主義ぢや個人主義危険思想ぢや過激思想ぢや
 そんな主義かぶれたならば大騒動國も亡びる家も亡びる
 談判はかくして不調におはりにき古狸様やつぱりえらい
 化土卷に垢障の凡夫無際より自力難心出離期なしと
 いたむべし本願力に歸しがなく大信海にいることかたし
 御和讃に一代諸教の信よりも弘願信樂かたしとのたまふ
 かくまでに信じがたきは此の御法わいかにして導かれしや
 わがために極難信の法をとき諸佛は證誠護念したまふ
 わがために久遠實成阿彌陀佛釋迦牟尼佛としめし法説く
 釋迦世尊凡愚底下的このわれを方便引入せしめたまへり
 孔子いふ君子憂へず懼れずと内に省やましからねば
 我はいふ信者憂へず懼れずとまかせの聲を千人力に
 一切をまかせの聲が南無阿彌陀何をか憂へ何をか懼れん
 われはたゞ仰せのまゝに動くなり御氣に障るも御免なされよ
 今は早や六字の御名に丸められ思ひのまゝにならぬたふとさ
 かうせよといはれてみてもわれながらどうすることもならぬ願力

世の中は妥協おりあひそれでもつ一筋道におりあひはなし

親ひとりひとりさらに異議もなし妥協もいらすおりあひもなし

廣い世もみ親と我と一人きり世態萬状お手まはしなり

なにきくも六字を通しきくならばわれに來れの聲のいろく

何事が起つて見ても稱ふればわれを導くおはからひなり

今迄は人に追従其上に諸神諸佛や本師彌陀まで

今ははや人に追従色顔を見るひまもなし親に見られて

朝夕にみ親は我の顔のぞき何氣にくはぬおれに話せと

うるさしとにかくあとから又のぞきお前のすきなとほりにせよと

それならばお願ひしますもうすこしよろこべるやうおちつくやうに

おさうかきしてもやらうそれなれどそんなよろこび何にするのか

なんしようとたゞくだされりいふことを何でもきくとおつしやつたのに

いふたにはちがひはないがよくきけよそれよりはまだやるものあるぞ
それは何よろこびよりもまだもよいやりたいものはなんであらうか
よろこびもよいがそれより「よろこべぬまゝをまかせ」の六字の聲を
その聲はぐつもきけれどもおちつけぬしつからせねば何といふても
しつかりとしたらまかさうおへおうかしつかりしたら何をまかすか
しつかりとしようともふ々しつかりとならぬ心をおれにまかせよ
まかせとはどうすることがまかされぬそのところをおきかせたまへ
たのむぞよたゞたのむぞよたのむぞよ親のねがひぢや理窟いはずに
まかすことむつかなければそなまんま邪魔せぬのみがまかすなりけり
まかればとて信心なくば參られぬ信はなくとも助けたまふか
さうまでに親をながすか此の親はお前きくまで泣いてたのまふ
かくまでに未來どころか今現に苦しむ胸をしろしめなすや

しるゆゑに親は泣くなりたのむなりこの泣き聲の六字きかずや
信せすに稱へし六字自力なりわれ念佛自力念佛

そんな智慧だれにもらふたいつきいた自力の力もどこから出たか
なある程自力の力のでどころはさてどこだらぶ胸か六字か
人様はよろこびいさむ六字力われはなやみの胸の自力か
また理屈理屈いはずに考へずみずのあきなひさせてくれぬか
なやむ胸それは他力でなけれどもよくおもひみよ不思議ならずや
そのなやみなやまんとしてなやみしかそもいかにしてなやみはじめし
金や色世間の事になやむ身が法を求めて今なやむとは

世の中になやみかずく多けれどこんなたふときなやみあるかや
なやむ胸などといふゆゑなやむなりきかずにをれぬ身となしたまふ
なやまずにきかずにをるとなやみつゝきかずにをれぬ身といづれぞや

なやまずにきかずにをれぬ身となればたのしからんと我おもふなり
はらへらずひもじくもなく御馳走をいつもたべればよいといふのか
腹へらず御馳走ばかり食ふなればそれこそやまび引出すもと
諺に飢最上の料理人ひもじいときにまづいものなし

ひもじさがあるで御馳走うまきなり腹へらずして何の御馳走
はたらけよ腹をへらせよひもじがれ御馳走うまし又はたらけよ
よろこびの御馳走ばかりいたゞいて遊びをらふがわれの本心
極樂へまるり百味の飲食を食ふて晝寐の婆々にも似たり
勞働は神聖なりと求道はそれよりもなほ神聖なるぞ

おのが身を修むる道は學ばなん賤がなりはひ暇なくとも(御製)
火の中をわけてもきけよ大法を聞けよ求めよ命をかけて
法をきく法を求むる其事が何よりかよりたふとき仕業

法を聞き呼ばる、だけがわがしごと與へ導くみ親のしごと

唯きけよきけばきこえる親心世話も造作もいらぬ本願

たゞのたゞ世話も造作もいらぬのに何を思ふてをつたか不思議

あら不思議ほんにやつぱりこのまんまどこに迷ふてをつたか不思議

唯不思議不思議願力唯不思議南無阿彌陀佛言の葉もなし

無始已來待ち詫びたまふ親心これはこれはといたゞばかり

こゝまでに導かんとのおはからひ唯はからはれまかすばかりぞ

二 久遠實成章

惡衆生惡人女人泥凡夫十惡五逆五障三從

十方の諸佛悲願にみなもれて捨て果てられし我等凡夫ぞ

(取りえなく捨てはてられて無量劫浮よ瀬のなき身ともしらずに)

彌陀如來久遠實成の古佛にて三世諸佛の本師本佛

彌陀如來いまのごときのすてられし末代凡夫我等のみ親

われひとりたすけんといふ大願をおこしてすでに正覺成就

平等に一切衆生をすくはんと誓ひたまひて彌陀とはなりぬ

阿彌陀佛超世無上の誓願をおこしたまひて我すくはんと

この如來もしなかりせば末代の我等凡夫は浮よ瀬なきに

一筋に彌陀たのまづば往生の道は二つも三つもなきなり

一筋に外に救ひの道はなし無二亦無三唯有 一乘

これにより我祖親鸞聖人は信心ひとつすゝめをします
信心といふことをよく存知する人はかならず往生すべし

よく知るは信することよ陽明の所謂知行合一の理

信心の道理きく分け信ぜぬはそれは合點よく知らぬなり
その信をとるとはなんとこゝろえてしかるべきにやくはしくきかん
聖人のおしへたまへる信心のおもむきを左にくはしくとかん
あさましき身ぞとおもひて彌陀佛をたゞ一心にふかくたのめよ
もろ／＼の雑行すてゝ專なれば光明中におさめとらるゝ
光明におさめとらるゝこれ我等往生決定するがたなり
このうへにこゝろふべきは信の上稱ふ念佛御恩報

信の上行住坐臥の稱名は大悲の御恩謝する念佛

往生をさだめたまひてやすらけき今のがみ身を謝する念佛

これをこれすなはち當流信心を決定したる人といふべし

此章を心佛衆生の三法により伺はん妙味津々

心と佛衆生の三を華嚴には心佛衆生是三無差別

巧なる畫師の如くに法として造らざるなし心佛衆生

傀儡師首にかけたる人形箱鬼を出さうか佛出さうか

信心の箱の中から何が出る佛も出れば又鬼も出る

月出でこそ光あり陰もあれ月出ですんば陰も光も

我なくば彌陀も正覺よも取らじ我こそ彌陀の知識なりけり

二 忠臣貞女章(萬善萬行總體章、佛凡一體章)

大正十二年十二月二日、三日 塚本理平氏方にて

萬善を雜行なりときらふこととくふためには邪魔になるゆゑ
彌陀佛のちかひは一心一向にたのむものをばわれたすけんと
たのみなばいとなるつみのふかき機もすくひたまはんといへる大願

一向は二佛をならべざるこゝろ一人の主人たのまぬ道理
善行をたのむは諸佛たのむなり二佛三佛ならぶるこゝろ

忠臣は二君につかへず又貞女二夫ならべずと外典にもいふ

阿彌陀佛三世諸佛の師匠彌陀をたのめば諸佛よろこぶ

師匠佛たのめばいからで弟子諸佛これをよろこびたまはざるべき

阿彌陀佛たのめば諸佛たのまねど諸佛に歸するいはれあるなり

六字には萬善萬行みなこもる何の不足で自力をたのむ

この六字萬善萬行の惣體ときけばいよ／＼たのもしきなり
あさましき極惡嚴重のものなれば地獄ならでは行方もなし

かゝる身をかたじけなくも彌陀ひとりたすけんと願おこしたまへり
本願をふかく信じてかゝる身をたすけたまふが彌陀佛としれ
宿善の開發に今催され一念歸命の信心おこす

佛智より信心あたへたまふの無佛心凡心一體になる

そのところさして信心獲得の行者なりとは申すべきなり

このうへにねてもおきてもへだてなく念佛となへ恩報すべし

はとなへ大悲弘誓の御恩をば謝すべきばかりならとこゝろえ

三 尊重佛法章講讚(五帖第十七通)

大正十五年十一月一日

林佐四郎氏方

此御文はたゞとくもなき文と申す人ありければ
今これをくはしく歌に綴りて見たり。

(一) 章名

此章を名づけて後生大事章又は尊重佛法章と
後生をば大事とおもひ佛法をたゞとくおもふ等とあるゆゑ

(二) 章科

此章の科節初めの二行これ受法の根機已下は安心

(三) 受法根機

安心中略説廣説略説はなんのやう已下一行半を
廣説中一心歸命はもろくの雜行已下の三行半を
廣説の二節の報謝稱名はかやうにおもひひとりての已下を

後生をば大事におもひ佛法をたゞとくおもふといふ句肝要
女人にて後生を大事におもひまた佛法たゞとむ心あるなら
これ受法根機を示す其人は聞く氣の人よ聞かすべきなり
智度論に渴して水を飲む如く一心に聞く人に説くべし
又いはく二種の人あり福を得る樂説法人樂聽法人
樂集に大集經を引きたまひ説者は醫王聽者は病者
このやうな説者聽者は佛法を紹隆するに堪えたりといふ

後生をば大事におもひ佛法をたふとくおもふ人はこれ受器

法あるも受くる機なくばいかにせん女人の非器も今はこれ受器
導體でなくば電氣はつたはらず受法の機には法はつたはる

古來より法を受けざる機をあげて機器漏器覆器の三に譬ふる
女人機器聞いて忘るしこれは漏器法をうけつけざるは覆器ぞ
機器や漏器覆器のまゝで今は受器聞かずにをれぬ身とはたふとし

(四) 後生佛法

後生をば大事におもひ佛法をたふとくおもふといふものはこれ

今生を大事におもひ世法をばたふとくおもふ人に對する

今生を大事におもふに對し今後生大事におもふとはいふ

今生を大事におもふとはいはく二帖一通お渡ひ章に

在家の身世路につけてまた子孫なんどのことにたゞよそほひて
今生にのみふけりてはこれほどにあだにはかなき世とは知りつゝ

いたづらにあかしくらすはこれつねの人のならひどあさまし等と
世のつねの人皆今生にのみふけり後生菩提をさらに求めず

今生にふけるとはこれ色と欲五欲生活を絆とするをば

五欲とは食欲財欲色欲と名譽欲また睡眠欲を

世の人は九分九厘まで皆五欲生活をこれ凡てとおもふ

五欲より外に一つの大切な事あることは夢にも知らず

金ためて家内和合し死んでから淨土に参る眞俗二諦

二諦とはいへど其實しらぶれば今生にのみふける五欲ぞ

極樂はたのしむときへねがふては助からずとぞ蓮師のたまふ

拜金と色と食ひ氣を俗諦と墮ちともないを眞諦といふ

ちと聞けばまこと理窟なやうなれど一度むけば五欲生活
人間のたふときことは食ふことや飲むこと着ることそれのみでなく
また智慧や富を重ねることでなく價值の生活開くるをいふ
機械的物質的の生活は價值なき世人の一般生活
外的のそれに對して內的の生活こそは價值の生活
外的な五欲生活にあきたらず價值の生活求むる人を
內的の生活求むる人をこれ後生をねがふ人といふなり
後生とは今後開くる價值のある精神生活さしていふなり
永遠の生命および眞實の光榮開くる生活をいふ

* * * * *

世法をばたふとくおもふに對し今佛法たふとくおもふとはいふ
世法をばたふとくおもふとはいはく渡世家業を本とするなり

世の中に溺れし人の言ひ草は世を渡るとぞいふにぞありける
世法とは政治道徳藝術や所謂宗教等といふなり
世法みな惡しといふにあらねどもこれをたふとむ人は外道ぞ
佛法をたふとみ其上世法をば時に順ひなすは信者ぞ
家治め村を治むる事にのみあせりて我を治めんとせず
實業や農業大事にたふとめど心耕す大事忘る
祭禮や法事葬式たふとめど其根本の意義を忘る
舊來の習慣風俗たふとみて宇宙眞理の如く信ずる
年中の行事年賀や盆歳暮等にとらはれ動きもとれず
そしていふ王法仁義俗諦と溺るゝことを渡るととはいふ
此様な人をばさして世法をばたふとむ人と申しなすなり
此世法たふとむ人に今對し佛法たふとくおもふとはいふ

九十五種みな世をけがす唯獨り佛道のみは世を清くなす
世法みな善に似たれど其實は涅槃に入らぬ凡夫道なり
出世間道こそ獨り迷ひ出で涅槃に入るの眞實の道

世間心本とし世間たゞとむは佛法たゞとくおもはぬのゑぞ
此様な世間にとらはれたる人も今佛法をたゞとくおもひ
ひたすらに聞く氣になれば何の世話造作も入らず法受けらるゝ

(五) 安心略說

安心の略說なにのやうもなく如來をふかくたのみまるらす
やうもなく世話も造作もいらぬなり此儘なりにかたはなきなり
此儘で仰せの儘に任すとは如來を深くたのむとはいふ
源信の法語に信心あされど本願よかきが故等といふ

これをうけ法然上人は仰せらる淺きは深き道理なり等
信卷に淳心の淳釋せられ朴といふものまた此の意なり
淳しとは淳朴素朴純朴とあらけづりなりかざりなきなり
深くとは心深める事ならず淺きこの儘まかすをばいふ
其儘のおほせをさらに疑はず深くたのみて此儘まかす

(六) 一心歸命

もろもろの雑行して一心にひしとたのまん女人たすかる
雑行をして必死とたのむとは徹底的に信じ切るなり
善い心起す要なく此儘のお救ひなりと信じ切るなり
此儘でたしかに救ふて下さるゝことをばしかと信じ切るなり
念佛は萬行總體なるゑに善いらぬなり雑行してよ

本願を妨ぐる惡なきゆゑに此儘なりとしかと信する

極樂に往生すべきことさらに疑ひはあるべからずの文
此まんま責むることなく許されて其上無上の功德御回向
苦は取られ樂あたへらる極樂といふも此外何があるかや
往生は生きることなり此まんま許され生きることをいふなり
疑はぬとはこれ信じ切るをいふ疑ふゆゑに往生できぬ
疑はぬことが往生往生が其ま極樂此の三は一
極樂と往生と無疑此の三は三にして一、一にして三

(七) 報謝稱名

報謝段かやうに思ひひとりて後ねてもさめても念佛すべし

このおもひとるとは信じ切るをいふ一枚起請文に出でたり
とりてのちとはこれ正信偈の文の慶喜一念相應後なり
相應後根機相應の本願と思ひ取りたる其後をいふ
やすく御たすけにあづかるべき事のありがたば又たふとさよとは
正信偈自然即時入必定唯能常稱如來號等

やすくとは自然即時ぞおたすけにあづかるはこれ入必定を
またねてもさめても等は唯能常稱如來號等のこゝろぞ
やすくとはまさすばかりで世話もなく如來よろこび救ひたまふを
お助けに預るはこれ歎異鈔第一章の初めの御文
誓願の不思議に助けまゐらせて往生遂げうるなりと信じて
念佛をせんとするとき攝取不捨利益に預けしめたまふなり
又これを眞要鈔に信心をうるとき攝取の益にあづかる

三毒の煩惱しばくおこれどもまことの信心さへられず又
 顛倒の妄念づねにたえねどもさらに未來の果報まねかず
 ありがたさ又たふとさの本願と深く信じてねてもさめても
 念佛を申せとあるは一帖の二通に之をくはしくとけり
 和讃には本願名號信受して寢寐にわすることなけれとは
 かゝる機をすくひます本願と信知し如來をたのむこゝるの
 ねてもまたさめても憶念わすれぬを本願たのむ人といふなり
 このうへに行往坐臥に稱ふるも御恩報謝とおもふべきなり
 當流の信心をよくこゝろえた念佛行者といふべきなりと
 信心を得たる信者といはずして念佛行者とあるはたふとし
 信心をよく得たる人信相にこゝろとぞめず呼ばるゝばかり
 ほのぐと心に浮ぶ稱名の外には深き信心もなし

信心といふも六字の外になし六字のこゝろ信ずるばかり
 信心の奥の手一つ忘れなよ其儘まかせ彌陀はうけとる
 南無の二字其儘まかせ阿彌陀佛うけとるといふこゝろなりけり

蓮如上人御一代記聞書俚詠

道徳はいくつになるぞみ名稱へ蓮師の御慶きくもたふとし
元日の蓮師の法話ありがたや自力他力の念佛の別
稱へたる功徳によりてまるらんと思ふ人なら自力念佛
お助けにあづかることのたふとしと稱ふる人は他力念佛
お助けを唯よろこびて念佛におのが力を加へざるなり
仰せには南無とは歸命歸命とは彌陀を一念たのむこゝろぞ
たのむ機にやがて大善大功徳あたへたまふが發願廻向
たのむときやがてたすかるすがたをば南無阿彌陀佛と申すなりけり
つくるつみいかほどあるも一念の信力によりけしたまふなり
無始已來つくりかさねし妄業も一念歸命ほろぼされぬる

罪はみな名願力にほろぼされはじめてきざす一念の信

御つとめのときあまりにもありがたく和讃あげばをわすれられたり
ありがたき和讃のすゝめよく信じ往生とげる人すくなしと

おもひうちにあればいろほかにあらはるゝ信をえねればおのづととなふ
信をえば口も心もみな六字乙れぞすなはち念聲是一

あさつとめいつゝの不思議より六首あげられ又も御法嘆あり

月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ(法然上人御歌)
此歌と光明遍照の文および和讃を引きて御法嘆あり

御法談なか／＼もつてありがたく御子様方も御落涙あり

彌陀たのむ歸命のこゝろやがてまた發願廻向を感するなりと
願行をたもちながらも執心にほだされこそ流轉しけると

きく分けて信ぜぬものはごちそうによばれながらも食はぬ人なり

親様のお胸のうちに常沒の衆生みちくたりとはいへり

佛心の蓮華は胸にこそひらけ腹にあるべき頂くばかり

功德みな心のそこにいりみつるたゞいただけよこれはくへだ

經よみて死んだる人や佛にもまるらせんとはゆめおもふなよ

他宗にはおつとめをして廻向する御一流にはいたゞくばかり

おつとめも他力信心よくしれと御ねんごろなるおすゝめなるぞ

正信偈和諧念佛あげるのはあらたふとやとよろこぶこゝろ

聖教をおぼえたりとて信心を決定なくば徒らごとぞ

彌陀たのむ心決定死ぬるまでとほりつゞきて往生とげる

木石の縁をばまちて火を生じ瓦礫の鈔玉なす如し

蓮如様開山聖人の再誕と空善夢みふかくたふとむ

功主まづ信決定し聖教をかたらば人も信をとるべし

御たすけのありがたさよとよろこびて念佛するは佛恩報謝

信心をよく決定しかたれよと近松殿に仰せられたり

歳末の御禮などは無益なり信心をとり御禮とせよ

信をとれ唯信をとれ信とりて禮にせよとは何たることよ

ときぐに懈怠するときこれではと疑ひなげくものもあるべし

なげくなよ一度たのむ人はみなお助け治定懈怠おぼくも

かゝるものたすけたまふと喜ぶは他力大行の催足なりと

御たすけありたることのありがたと念佛申すべく候や

御たすけあらうすることありがたと念佛申すべく候や

ありたるとよろこぶこゝろ正定聚あらうるのは滅度のさとら

此二ついづれも佛になることをよろこぶこゝろよしと申さる

信心のなき人々にあはねぞと富田殿にて運師申さる

老體に辛苦なれど信をとりよろこぶゑにまたものほると
安心をとりてものをばいはゞよし用なきことはいふまじきなり

一心のところをばよくきゝて又人にもいへと達師のたまふ
明應は五年四月の十二日堺殿へと御下向あり

あらさともあらおもしろやおもしろや南無阿彌陀佛と達師のたまふ
おもしろや南無阿彌陀佛おもしろや心浮立つ六字分るか

葬式の六字もよいがお祭や祝儀の六字めでたからずや
無碍光佛不可思議光佛九字十字六字讀嘆の德號としれ

世の中に尼のこゝろをすてよかし妻うしのつはさもあらばあれ
開山のめうしの歌の如くにてかたちはいらぬ一心が本

世にもいふかうべをそるもこゝろをばそらずばだめとあるぞ氣を付け
鳥部野をおもひやることあはれなれにかりの人のあとをおもへば

開山の御影空善に御免ありそのありがたさかぎりなきなり
聖人の御傳をよみていろくと御法嘆ありありがたかりき
聖人の御影正本御ひろげ皆におがませ喜ばれたり

親心こゝろにみちて身にあふれ口にあらはれ人信をとる
相續といふはつゝける事でない信力により續くなりけり

正信偈和讃は衆生信とりて御影前にて喜ぶこゝろ
此六字つかふは他宗つかはれていたゞくばかりそれが真宗

おたすけにあづかることのたふとやと口に出しては南無阿彌陀佛
一念のとき罪きゆどあるはこれさはりとなならず故になき分

娑婆にあるかぎりは罪はきえぬなりはやさとりえて罪はなきかや
罪の沙汰するより信心とりたるかそこのところをいくたびもきけ
罪けしてたすけあらんもけさずしてたすけあるとも彌陀のはからひ

二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四

彌陀たのむこゝろもたふとありがたと申す念佛もみなお與へよ

とやかくとはからひいれて稱ふるは自力念佛きらふなりとぞ

極樂の生はうまれて死なぬゑ無生の生と申すなりけり

廻向とはお助けの事もらふ事お助け一つもらふなりけり

罪の沙汰無益なりけりたのむもの助くるぞよの願なればなり

信心の人はみなこれ兄弟と祖師も蓮師も仰せられたり

不審なることもとへかし又信をよくとれかしとねがふばかりぞ

機あつかひするは難修ぞたれもたゞ信するほかに別のことなし

案内もせずにゆふさり人多くまゐりたるをば美濃殿しかる

東西をかけまはりてもいひたきにたづねてきしをなぜかへすのか

まかりいで候へといふ言葉にて一念のことなせきかせぬか

慶聞坊なみだを流しあやまりておはなしせしにみなも落涙

老體の苦もいとはれず休みなく上り下りて法弘めらる

信のない人にあふまじ信をうるものはめしやすくあひたくおもふ

いまのひとよくいにしへをたづねべしまたふるき人よくつたふべし

物語うするものなりしるしたるものはうせぬぞしるしてつたへ

道宗のたしなみをきく圓如様よく申したと仰せられたり

まかせとておのがこゝろにまかせなよ心を責めよ彌陀にまかせよ

佛法は心のつまるものなるかいな信心になぐさめらるゝ

九十まで聽聞れどあきたりもなきことなりと順誓はいふ

同じ事きいてゐながら面々にきくちがひするものぞよくきけ

ありがたき人多きときこのうちに信えたるものいくたりあると

一人かな二人もあるかとのたまへば各きもをつぶしたりとぞ

かどをきけお話のときうか／＼ときかで詮あるやうによくきけ

稱名はいさみて申す念佛をうれしくいさみ信の上より

呼ぶ聲に力を得たる此わしのいさみにて申す念佛

かくまでにかんでくゝんでのたまふにこゝろえぬなら無宿善なり

御ことばうけたまはれどたゞこゝろいふ事きかすと法慶申す

御ことばうけたまはれどたゞこゝろいふ事きかすと法慶申す

佛法は我心にはまかせずにたしなめとこそ仰せられたり

我心お慈悲を好む柄でないたしなむ心他力なりけり

さゝわけて喜ぶ人は多けれど聞き得る人はまれなりといふ

佛法の話のとき口重く世間話になるとべらく

ありがたや世間話が何時の間にお慈悲の方へうつりゆきしか

佛法をたしなむ人は大様になることあるもおどろきやすし

たれもみな我はわろきとおもふもの一人もないぞこれゆゑの慈悲

皆人のまことの信はさらになしものしりがほのふせりにてこそ

此歌のものしりがほはわれこそはこゝろえたりとおもふこゝろぞ

順誓は自分の領解そのまゝをいつも讚嘆する人なりき

かしよせてことばすくなに寛心のとほり申せと蓮師のたまふ

こゝろさし我物顔に持ちまるるはづかしきよし善宗申す

あげさせていたゞくばかりわがものゝやうにおもふはあさましきなり

ひげをそるたびごときらぬことはなし忘れて念佛申すゆゑなり

年よれば行歩かなはずぬむけさすたゞ若きとき佛法はきけ

しつらふといふは我等の此心そのまゝおきて佛智を加ふ

我心みなとりかへて別に又佛智ばかりにしたてるでない

我妻子誰より先に勸化せよ我身の勸化それよりもまき

信なくてまぎれまはると日々に地獄がちかくなるぞよくきけ

信不信うちみはみえずとりいそぎ今日ばかりぞとおもひてきけよ

一度の誓一期の誓なり又たしなむもそのとほりなり

六七

今日ばかりおもふころをわするなよさなきばいとどのぞみおほきに六八
本尊はかけやぶるべし聖教はよみやぶれよと蓮師のたまふ

六八

當流は木像よりは繪像様繪像よりなほ名號といふ

七〇

何事も十あるものを一にし皆分るやうわれはとくなり

七一

小名號申入れしに信心やあるおのくと仰せられたり

七二

信心の體は名號なるゆゑと兼縁今に思ひ合はさる

七三

日向屋は三十萬貫持ちたれど佛にはならず氣の毒な事

七四

了妙は帷一つきかぬれど此度佛になるぞたふとき

七五

わろきとはめづらしさ事きいたしとおもひしりたく思ふ事なり

七六

信の上いくたびにても心中をうちだしいふはいともよきなり

七七

一向に不信のよしを申出でつゝみかくさずいふ人はよし

七八

口にては覺えた通りをのべたてゝまぎれておつる人は氣の毒
此教みな彌陀佛の命せなりたふとき事のかぎりなりけり

七九

御文には阿彌陀如來の仰せられけるやうはとぞ仰せられけり

八〇

法敬よたのめといふ事教へたる人しりたるか知らずと答ふ

八一

此事を教ふる人は彌陀如來如來みづからたのめとのたまふ

八二

御名號焼け申すとき六體の佛になりけり不思議なる事

八三

不思議にもなきぞそれより惡凡夫佛になるこそ不思議なりなり

八四

朝夕は如來聖人の御用なり冥加の方をふかく存ぜよ

八五

惡人が目當にちがひなけれどもあまり我まゝあるまじき事

八六

佛法は無我ぞよれと思ふことつゆいさゝかもあるまじきなり
しれる事知識にあひてとひみれば思ひがけない德分もある

八七

しれる事とふも德ありしらざるをとへばいかほど德のあるべき

法文の一つも書きばきへおぼえうりごゝるありおそろしい事
一心にたのみつる機はしろしめすしろすめすやう心中をもてて

見通しの親様なりときゝつゝもめくら佛にするぞおそろし

御本縁を諒りとても別義をなしと彌陀たのむ一念の義
彌陀たのみほとけにならぬ事あらば我いかやうの誓願もする

此六字凡夫往生の證據なり十方諸佛證據人なり

佛法の座敷に入れば物をいへ相伴ぎゝは泥棒ぎゝよ

物といへ物といはぬはおそろしやへばきこえる直されもす
信不信ともにものをば申すべし物を申せば徳はとらるゝ
一向にわろき人にはちがひなどいふ事もなしわろきまでなり

法義をも心にかけし身の上のまちがひこそはちがひなりけり

聞くときはありがたけれどすぐもどるかごに水をばらるゝがごとしそのがごを水にはつけよ我身をば法につけおくべしとのたまふ

兎に角に信なきゆゑにかごに水信なき事はなによりわろ
聖教を拜み申すもうかうかとおがみ申すはその證なしと

聖教はたゞくれくと仰せらる百遍みればおのづからうる

聖教はわたくしいれすことをよ師傳口傳はあるをよ
運んによさななりしんじんあんじん
運如様他力信心安心とみればあやまりなしとのたまふ

わればかり思ふ心は縁覺の獨覺心よあさまきなり
あらば佛のお慈悲をうけし身よ觸光柔軟心やはら

信のうへはわれはわろしと思ひ又報謝と存じ人にも話せ
われものをもたずに入ひにあたへんといふたりとても人のきくかは

信もなく唯口にばかりいかやうに述べ立てるとも誰か聞くべき

安心をわれ決定し教ふるは大悲傳化の道理なりとぞ

聖教をよみの聖教よまずあり聖教よまずのよむもあるなり

一文学しらねど信をとらするは聖教よまずの聖教よみよ

聖教をよめど法義のなき人は聖教よみのよまずなりけり

信の上人にも教へ佛恩よ自信教人信の道理と

佛法は物しりしらず愚者にても信ある人は法を弘める

尼入道などのよろこばるゝをきゝ人信をとる佛の加被力

當流は世間機わろし何事も佛法によりはたらくべしと

世間にて時めく人も信なくば心もへだち便りにならず

目もつぶれ腰引くやうな人にも信ある人はたのもしきなり

我のため君をおもふは二心唯一心におのれわすれて

九九

九八

九七

九六

呼ぶ聲におのれわすれて西へ行く人こそ無上幸福をうる

身をしてゝきけよの聲は救ふためしてゝまかせよおのれわすれて

身をしてゝ聞けば助かりてずんばともづなきらずに船やる如し

何人も知識の仰よく聞きて信をとる人極樂へ行く

阿彌陀佛最古の佛我がみ親最新の佛最古の儘に

彌陀佛をたのめる人はおもひしれ六字に身をばまるめたる人

御ゑりやたゝみをたゝきお六字にもたれたるよと蓮師のたまふ

佛法の上には毎事おそろしき事と存じて謹むべしと

佛法は何事にてもかきいそぎ明日とのばし油斷はあるまじきなり

聖人の御影申すは大事なり信心なくば罰を蒙る

用心をしてそのうへに出来るをば時節到来とはいふべしと

用心をせずして出来たる事あるもそれでは時節到来でなし
聽聞を心にかけての上の事宿善といひ無宿善をも
信心は唯きくばかりきけよきけき可るまでは命がけにて
きめこんで直されまじといふ心まきたて心それはわろきぞ
まきたての直されまじといふ心信をとるには第一の邪魔
心中を申し出して人様に直さるゝやう心もつべし
我心友同行に打出して直さるゝやう談合をせよ
下々の人のいふことにも亦よつゝ用ひよ腹を立るな
信の上うやまふこゝろあるべきに知識のことばおろそかにきく
ざりながらこの心中のおころとき勿體なしとおもひすてよと
家着物よし悪くとも卑下するな光明の家慈悲のはれ着
佛法は上下老若みな共に油斷にてこそしそんづべきと

一〇八
一〇九
一一〇

御口の中わづらひたまひ目をふさぎあゝとのたまふこのわけしらず
やゝありて仰せられける口よりは人の信なき何よりかなし
人々の信なき事をおぼしめし身をさくやうにかなしといへり
人の機をよくかんがみて佛法を聞かせるぞよと達師のたまふ
人々の佛法信じこのわれによろこばせんと思ふはわろきぞ
信とれば自身の徳ぞさりながら恩にもおうけあそばすといふ
きゝたくもなき事にても信とればきこしめすとぞ仰せられたり
誰にても信とりたしと思ふ人あれば身をしてそれはすたらぬ
御門徒の心得なほすときこしめし老の皺をばのべたまへりと
御門徒にそなたの坊主心得のなほりたるをばいかが存すと
心得の直り法義に心をばかけられしこそれしと答ふ
坊主より門徒衆よりわれはなほうれしく思ふと仰せられたり

一一一
一一二
一一三
一一四
一一五
一一六
一一七

佛法に退屈せんとおぼしめし心くつろげ笑はせたまふ

あれほどの多き人々皆おつるそれにつけてもよろこばしきよ

法談の後四五人の御子達に得手にきくもの談合せよと

たとひなき事なりとても人いはゞ當座はさぞと申すべきなり

人多く集まり威勢大なるが繁昌なりと誰もおもへり

さうでない一人なりとも信とればそれが何より宗の繁昌

それゆゑに專修正行の繁昌は遺弟の念力より成すると

聽聞に心に入るゝ人あれど信をとらんと思ふ人なし

極樂はたのしどきいてまるらんとねがひたりとて佛にはならず

彌陀佛をたのむ人こそ佛には必ずなると仰せられたり

御文章阿彌陀如來の直説と存すべきとの由に候

蓮如様形をみれば法然房詞を聞けば彌陀の直説

人の目ははづれどつねに見通しのおやをおそれずおそろしきこと

よき事もすぎたる事は停止せよまして世間の事は本より
佛法にまゐらせ心わろきなり唯報謝どと存すべきなり
人の身に六賊ありて善心をうばふといふは自力のことよ
他力では佛智の心うるゆゑにつくる煩惱けしたまふなり
たゞ得手に法をまくなよよくきゝて同行にあひ談合すべし
馴ねば手すること足である佛祖知識をおろそかにすな
口と身のはたらきよりも其本の心の方を嗜むべしと
衣裳などみな聖人の御用物踏たゝくるは淺間敷事
王法は額にあてよ佛法は心に深く蓄へよとよ
蓮如様御若年より御迷惑辛勞ゆゑに御繁昌なり
佛法を再興せんと思召し御念力にて繁昌申す

いろ／＼とかなしかりける事どもを御物語冥加存ぜと
油買ふお金もなくて折々は月の光りに聖教見らる
御子達の襪祫をあらひたまふなど聞くと勿體なき次第なり
御苦勞のほどを思へば我々の心のまゝぞそらおそろしや
禁裏にも御迷惑にて質おかれ御めざるとひきごとせらる
古き綿御とりありて御一人ひろげられたる事もありけり
御衣のかたは破れて中々におんまづしくぞるらせられける
同行や知識によつく近づけよ近づかざるはやまひあるなり
世にもいふ朱にまじはれば赤くなる實に大事じや友をえらべよ
その友をみればその人わかるぞよ惡縁きりて善き友につけ
善人のかたきとなるも悪人を友とするなと昔よりいふ
きりてみてかたいとしれる本願を信じて知れるたゞときつけ
本願を信じたる人きくたびにあきれおどろきいよ／＼あよぐ

ありがたや信おこりなばまろこびも增長すると聞くもたふとし
信心の子さへ出来れば日々に生長するぞふとらしやるぞ

人はみなたゞぢややすいとばかりいふ難中之難の信ときかずや

凡夫にておこしがたきは信なれど佛智を加へ信ぜしむるぞ

凡夫にて往生ほどの一大事はからふべきにあらずといへり

おたすけをかゝへておつるたゞよりもいのちがけにてきく人のかし
詭る人もしなかりせば佛説も信じにくいが今ぢや決定

本當に信する人のできるとき詭するものよと經に説きたり

佛法は世間のひまをかけて聞けひまあけてきく人もすくなし

一人ゐて喜ぶ法は御信心人前だけはそれは名聞

火の中をわけてきゝたる人にしてはじめて知れるそのまゝの聲
火の中へそのまゝの聲きゝうれば行かずにをれぬきかずにをれぬ

【五三】
【五四】
【五五】
【五六】
【五七】
【五八】
【五九】
【六〇】
【六一】
【六二】
【六三】
【六四】

ある人が急用ありて不圖たゝる後にて聞けばお話のため

法義にはかやうにこそは心がけ候ふべしと仰せられたり

佛法をあるじ世間を客人とせよのみ教つねにわするな

親心一ついたゞき世の事は時にしたがひはたらくがよし

名人のせられしものはそのまゝにしておくこそは名譽なりとよ

何事もしらぬ事をも開山のめされしやうに御沙汰候

唯人にをとるまじきといふ心世間の事はこれでしならふ

人にまけ信をとるべし法は無我情をおるこそ佛の御慈悲よ

たのむとき佛心凡心一體になしたまふゆ名一心といふ

水のむも如來上人の御用ぞと存すべき由或人いはる

何事も思ひ立つことなりたれど人の信なき詮方なしと

聖人の御一流をも御再興大阪殿も御建立あり

功成りて名も遂げ身をば退くは天の道とは我事なりと
賊縛の比丘は王遊に身を脱し沙門は鵝珠を死後にあらはす

ことばたびくひきて仰せらる死したるのちにあらはるの御意
敵陣にとぼすも火を見火と思ふ信仰の火は誰が見るとも

信仰は言葉でないぞ熱よ火よ此世の光り人の力よ

誇る人此敵陣の火をながめすごい思ひのすればなりけり

佛法の義をばよくく人にとへ物をば人にとへとのたまふ

誰にとひ申すべきかとうかへば信だにあらば誰になととへ

佛法は知りそもなき人が知る上下をいはず人によくとへ

殊勝げに見ゆる事さへ御きらひ唯つくるはず此儘ぞよき

殊勝なる衣紋たゞしき御僧の御出ありと冷かされしと

いやわれは殊勝にもなしたゞ彌陀の本願こそは殊勝なるぞと

一六九

姿のみ殊勝にするも信なくば詮もなき事ぶる事いらす
衣食ふのも如來聖人の御用ぞと御膳の時に御合掌あり

たゞ人はあがりくへておちばをばしらぬなりけりふかくつゝしめ

往生は一人一人のしのぎなり一人一人に深く信ぜよ

何事のあつかひもすて一心にたのむばかりに往生治定

誰にても信だにあれば辛勞と左程おもはぬものとのたまふ

たゞ人は耳なれ雀聞きなれてうかくするは恐れ多いと

おどろかすかひこそなけれ村雀耳なれぬれば鳴子にぞ乗る

たゞ人は耳なれ雀聞きなれてうかくするは恐れ多いと

心中をあらためんとは思へども信をとらんと思ふ人なし

方便をうそぢやわろしといふ事はあるまじきぞと仰せられたり

一七〇

一七一

一七二

一七三

一七四

一七五

一七六

一七七

一七八

一七九

一八〇

眞實をあらはすための方便よ權假方便廢立の義

彌陀釋迦の善巧方便おてまはし知識の手引信をうるなり

御文これ凡夫往生の鏡なり法門でない親のおころ

心からたふとく思ふ念佛がよいときめるがあやまりのもの

さほどにも思はぬときの念佛がかるくおもふはあさましきこと

おのづから念佛うかぶそれこそは佛智の不思議おんもよほしそ

信の上ふと稱へたる念佛もみな佛恩にそなはるといふ

他宗には此念佛をつかふなり親のためとか國のためとか

我流はつかふのでない呼ぶ親にまかせつかはれみちびかれゆく

聖人の御一流には唯彌陀をたのむばかりが念佛としれ

人蜂を殺し思はず稱へしに心いかんとたづね申さる

かはいやと存じたるまゝおもはずも稱へしなりと答へ申さる

信のうへ念佛申さる報謝ごと存すべしみな佛恩になる

なうれんを打ちあげられて南無阿彌陀法敬こゝろしりたるかとよ

これはわれおたすけられしたふとやと申す心と仰せられたり

安心のとほり申せば仰せには口の如くに心得られよ

信心の人に紛れて往生をしそんづべきをかなしまれたり

佛法はさしよせていへさしよせていへと法敬に仰せられたり

信心や安心といへば愚癡のもの別のやうにも思ふもしれず

たゞ凡夫佛になる事教ふべししたすけたまへと彌陀をたのめよ

何人もたのめまかせと教ふればたゞそれをきゝ信をとるべし

當流にこれよりほかの法門はさらになしとぞ仰せられたり

十八の願をよくくこゝろうるほかに淨土の法門はなし

佛たすけたまへと申す衆生をば罪深くとも必ず救ふ

これぞこれ第十八の誓願のこころなりとぞ御文にいへり

何よりも信をとらぬはわろきなりたゞ信とれと仰せられたり

善知識わろしと仰せられるは信のなき事何よりわろし

或人を言語同斷わろきぞと仰せられしに其人たゞ

何事も御意のごとくと存ずるにおしかりたまふ心いかにと

お答に唯わろきなり信なきは言語同斷わろくはなきか

親様にかくもたのませおきながら聞いてあげぬはわろくはなきか

蓮如様いかなる事をきかれても御心にゆめかなはざるなり

一人でも信とることをきいたしとおひとりごとに仰せられたり

御一生唯人に信とらせたく思召されし由仰せらる

聖人の御流はたのむ一念の所肝要なりとのたまふ

ためめとは代々あそばしかれしも委しく何とたのめとしらず

一八八

一八九

一八九

蓮如様御文を作り候て雑行すて彌陀をたのめと

一心に彌陀をたのめとあきらかにしらせたまふで再興上人
よき事をしたるがわろき事もありわろき事してよき事もあり
よき事をしてもわれよき事せりと思へばこれはわろき事なり
あしき事よししたりともひるがへり念佛すればよき事になる
蓮如様まわらせ心わろきよと仰せられしどわするゝなゆめ

分に過ぎ物を出だせば一子細あると思へと仰せられたり

わがこころ物をもらへばうれしいで人にたのむにさやうするなり
仰せには行きさきむかひばかりみて足もとみねば踏かぶるなり

人の上ばかりみてわがみのうへをたしなまずんば一大事ぞと
善知識の仰なりとも成まじきなんだ思ふはあさましきなり

仰せならなにならぬ事あるべきか凡夫佛になると思へば

一九二

一九一

一九〇

道宗は近江のうみを一人してうめよとあるも畏まとぞ
やはらかな水も石をばうがつなり不信の人もきけばきこえる
よくきけばお慈悲力にて信をうる唯聽聞にきはまるなりと
信の人見てあのごとくならではと思へばなると仰せられたり
信心もよいがあままでなりてはと思ひすつるはあさましき事
あままでにならではだめと機をなげき思ひすつるも親なかせなり
身をしてのぞみ求むる心より信をばうると仰せられたり
人の惡よくみゆるなりこころせよわがわろきことおぼえざるもの
わろき事みにしられなばよくくもわろければこそしられしと思
たゞ人のいふ事をよく信すべしわがわろき事おぼえざるもの
雑談のときにお慈悲のお話をするとは人なみあまり益なし
佛法の座敷に出ると一向に物をいはざることは間違ひ

おはなしの時心中を打出して信不信の儀談合をせよ

1

面白きたふとき事がみつるゆゑさみしき事はさらになしとよ
いづるいき入るをまたぬは浮世なり佛法の事さしいそぎきけ
善徳は法然上人の化身ぞと世の人がふと仰せられたり
善徳は不思議の人と蓮如様仰せられきと實如のたまふ
佛法は讃嘆談合にきはまとと實如上人御夢みらる

おはなしの時にいはぬは信のないしるしとあればさあいはうぞや
心にもない事たくみあんじだしいはうとするで中々いへぬ

二

一九三

やはらかなかも石をはうがつなり不信の人もきけばきこゑる
よくきけばお慈悲力にて信をうる唯聽聞にきはまるなりと
信の人に見てあのごとくならではと思へばなるとおはせり

一
九
四

信心もよいがあくまでなりてはと思ひすつるはあさましき事

あゝまでにならではだめと機きをなげき思おもひすつるも飄ひようなかせ

身をして、のぞみ求むる心より信をばうると仰せられたり

人の惡よくみゆるなりこゝろせよわがわろきことおほえざる
わろき事みこづられよばよひーーーーーーーーーーーーーーーーー

ひと人のへふ事をよくしむればこそしられし

雜談のときにお慈悲のお話をすると人なみあまり益なし

九六

佛法の座敷に出ると一向に物をいはざることは間違ひ

卷之三

寒なれば寒熱なれば熱とたゞ心のまゝをのぶるばかりぞ
佛法の座敷で物を申さぬは不信の故ぢや油斷するなよ
油斷てふことも信じて上の事細々よりて談合をせよ

信の上彌陀のおたすけありたりといふはさとりのかたにてわろし
おたすけは歴然なれど御たすけあらうずとハふ然るべきなり

一念のとき御助けたまふ事不退密益涅槃分なり

唯蓮坊攝取のことわざしりたしと雲居寺へのき祈誓ありけり
阿彌陀佛袖あみだふくたれをとらへてはなされず攝取はこれと夢想たふと

冥加とはいがなる事とたづねれば彌陀をたのむがその事なりと
佛法の事を申てよろこべば其人よりもわれは免れ

信とは佛智をつたへ申すゆゑ唯不可思議と存ずればなり
御文よみ聽聞するも報謝なりしんごてあづまひよへ

卷之三

光明はぬれたるものとほすことく罪障はみな御けしまふ

信心を決定したる人はみなと見るさへもたゞとくおほの
其人のたゞときゆゑにあらずして加ふ佛智のありがたきなり

我死ぬもよみぢのさはりなげれども人の信なき唯かなしきと
ひきぬけにしきつゝひなはうしやまき

われはよく心得たりと思ふ人心得ぬなり我のあるかは

かくまでに此身の上に加はれるしかけどうして疑はれるか

聖教は殊勝なれども讀む人が信なきゆゑにたゞとくもなし
信を得て聖教よまば聞く人も殊勝にもありよくもらはれる

まづ物をよめよ復せよわきまへよまで其後は信をいたゞけ
お詞の如く覺悟はいたせども油斷不沙汰をあさましといふ

お詞に油斷不沙汰なせそとこそあそばされたれいかなる覺悟

これほどに法を心にいれられし法敬房の尼公は不信
或人が法敬房に此事をたづねられしに斯く答へらる

これほどに御文よめどもきかぬ身がわが申分いかできくべき
蓮如様きこしめすとき何言ふもお直しあると心丈夫に

かげにては何たるわろき事いふと存じ脇より汗たるといふ

信のうへさのみわろきはあるまじく或は人のいひたるなど、

光明の中に住む人なんとしてあしきさまなる事をすべきや

信なくて喜びたしと思ふ人尻結ばずに縫ふにも似たり

たのむもの助けんとこそたまふを喜べ教ふの命せではなし

一向にしらぬ事をも不審とはいはれなき事分別をせよ

御本寺を留守にはすれど佛恩を忘れし事はなしとのたまふ
二二八

歴々の人さへちがふつゝしめよ一大事ぞよ人によく問へ

信心の人のちがひを見るにつけ我身をふかく嗜むべしと

あの人でさへちがふのにましてわれらがはではとはあさましき事

喜びのすきまに懈怠申すとき勿體なしと佛智にかへれ

廣大の御恩忘るゝ下からも出る念佛は御もよほしなり

佛法に厭き足るといふ事はなし法の不思議をきくとはいへり

碁や将棋花や茶でさへあかぬのに佛法の事いくたびきくも

金錢を世間の事につかふのは佛の物をむだにするなり

辛勞もせで徳をとる上品は彌陀をたのむにすぎたるはなし

佛法の方へいかほど入るゝともあかぬ道理ぞ報謝にもなる

よき事を少し言ふたりする事もあればこれでとすぐにのぼせる

おそろしやわがよきものにはやなりてその心にて御恩わする

二二七

二二八

二二九

二三〇

二三一

二三二

二三三

二三四

二三五

二三六

二三七

二三八

年もとりむづかしけれど信とれば何なりとても聞くとのたまふ

御門徒のために御身をすてられきたゞ信とらせたくおぼしめす
山海の珍味をならべてもなすも食せぬならば其甲斐もなし

説教や寄合ばなししたりとも信とらぬなら何の甲斐ある

物にあく事はあれどもたゞお慈悲喜ぶことにあきたりはなし
火に焼けず水にくさらず失せもせぬ不思議の寶唯此六字

佛法の御恩はおもし身をからくもてとの教へわすれまいぞや

あふたとて信しんをとらねば證しんもない信しんをとるのが一いっち肝かん要よう

當流の心法門申すのも信心一つとらしめんため
あつりやう しんぽうもん しんじ ひとと とらしめんため

我こそと思はん人の佛法をいひたてたるはなしとのたまふ

卷之三

たのむきの六字の主となれるなり眞の寶は一念の信

眞宗の内にて法をわざまはそしるもあるに我は仕合せ
わざまはそしるもあらぬとし
我等今宿善ありて此法を信する身とはさてもたふとし

同行や坊主でさへも信の人が誇るに我は誇られ嬉し
そしの人が今人羨みにそし
そしの人が今人羨みにそし

讀く其の本意の如く語る所は、かくの如くの事である。されば如様御勘氣あるも、心中をだにもなほせばやがておゆるし

佛法にあだをなしたる蓮宗も御赦免ありき感涙むせぶ
奥州の争祐御覧候て以ての外に御腹立あり

御歯をばくひしめられてにへなよと切きりみてああくかとのた
じゆうごんへん ひくひ せんめられでにへなよときりみてああくかとのた
おは

聖人の御流を申しみだすものあさましきどと仰せられたり
彌陀佛の五劫思惟の本願にすぎたる思案どこにあるべき

御思案に同心すれば佛になる機法一體信ずるばかり

御歌は三十一字につゝれどもこれに法門あるとのたまふ

1

法敬と我と兄弟信うれば皆兄弟と蓮師のたまふ

二四九

信の上世間佛法何事も心にかけてたしなみたしと

三五

又金をほりだすやうな堅敏と仰せられたりありが

二三四

卷之三

餘りにも人のむなしく日を送ることをかなしく思召す故め

112

氣縁師夢の中に御文こそ肝要なるぞ信仰しきけれど
ほんぶつ まう よし まう

卷之三

田舎には雑行雑修あるゆゑに申しつけよと又夢みらる
いなか ざふざむつしゆ ゆゑ まこと うむめらる

二
五
八

父夢に今、の階級がよき時よりは、一矢事をと
まつたと、

同行をかたぐなどと申さずに御方々と申してよきと

卷一

衣裳等よきものいふと思ふのはあれば、（或）なり更別字

佛法の家に奉公申す身は御用つとむと思ふべきなり

御門徒をやぶらるゝこと御身をばさかるゝよりもかなしとのたまふ

二六三

佛法の御用御恩をおろそかに存すべくにはあらずといへり

二六四

法敬は我死後十年いくべしと仰せの如く十年いきぬ

二六五

何事も無用なることいたすのは冥加なき由仰せられたり

二六六

物をきこしめすにも如來聖人の御恩をさらにおわすれなしと

二六七

御膳をば御覽あそばし人くはぬ飯をくふよと仰せられたり

二六八

梅干のこととはなせば人の口一同にすし一味安心

二六九

佛法を好まざるのはきらふにてなきかと蓮師仰せられたり

二七〇

佛法を不法の人はみなともに違例にすると仰せられたり

二七一

佛法の讚嘆あればきづまりやとくはてかしといふ人のみぞ

二七二

かくまでにいきてはたらく大法を死人あつかひするはおそろし

二七三

蓮如様早々こいと御まねき實如上人まどろみたまふ

二七四

お蔭にて今日まで我と思ふ心もたぬがうれしと兼譽申さる

二七五

觀鸞と申せば恐れあるゆゑに祖師聖人とよめとのたまふ

二七六

聖人と直に申せば聊爾なり開山聖人と申してよしと

二七七

嘆徳の文に以てとあるところ抜いてよまずと仰せ候

二七八

此間面白き事考へた御文をよませ信をとらすの

二七八

世の中の事に心をいるゝほどよろこびたしといふ人もまれ

二七九

人さへも勸化せられる坊主達我身を勸化せぬはあさまし

二八〇

道宗が御文願へば文はとりおとす事あり信はおちぬと

二八一

法とくに聞く氣の人を前におき語らば力あるはたふとし

二八二

信なくてお慈悲のはなしする人は小兒のつるぎ實にあぶなし
重寶な劍も小兒もつならば自分も怪我し人もきづつく

我しねと申さばしめるものはあり信をとるものあるまじきなり

二六四

一念に凡夫往生とぐること祕事祕傳ともいふべきなるか

二六五

何よりも不思議なることわれはしる凡夫の佛になることはそれ

二六六

善從にかけ字あそばし下されて後にそれをば御尋ねあり

二六七

かけおきて不斷ながめて心ねをなほせよといふことにてあれど

二六八

とびこんで聞く氣になりし人はみなうかくすると佛になるぞよ

二六九

坊主てふ者は大罪人なりと仰せられしにみなおどろきぬ

二七〇

さて罪がふかければこそ彌陀如來おたすけあれと仰せられたり

二七一

日々に御文聽聞申すこと御寶物賜はること

二七二

顯智坊開山聖人の仰せをば一期をもると殊勝の覺悟

二七三

身あたゝかなればねむけさずあさましき事なり身をばすゞしくもてと

二七四

身隨意なれば佛法世法ともおこたりやすし一大事なり

二七五

信をえはあらく物をば申すまじ心和ぐ願益あれば

二七六

信なくば詞もあらく諍ひも必ずできるよくこゝろせよ

二七七

北國のさる御門徒にとくゝものぼれといへと仰せられたり

二七八

御門徒の樂をあしくも申すことあるまじきどと仰せられたり

二七九

開山の一の客とは信の人御同朋とかしづきたまふ

二八〇

御門徒の上洛するを蓮如様御ねんごろにも御もてなさる

二八一

よき事をおもひつけるも御恩なり惡事つるもまた御恩なり

二八二

信心の人いちかづき損はなし笑ふ中にも徳はとらる

二八三

かたみには六字のみ名をのこしおくなからん世にはたれももちゐよ

蓮如様彌陀の化身といふことはその證多し歴然たりと
 御足にはわらじのあときらりみゆ京田舎をも御幸勞のゑ
 惡人の眞似するよりも信心をたしかにえたる人の眞似せよ
 安心も御文の如く信とれと支證のために御判をなさる
 存覺は勢至菩薩の化身なり自力をして他力仰げと
 御自身の智解をあらはすためでなく六要鈔は唯御讚嘆
 今ははや一夜の夢となりにけりゆきあまたのかりのやどく
 此時で見れば存覺釋迦佛の化身なりきと蓮師のたまふ
 陰氣して日蔭の花はおそらく日表の花はやく開くる
 宿善も遅速あるぞよとりいそぎはやく開くるやうにはからへ
 さいくにお慈悲の席へ足はこびきけよ開くる信心の花
 信不信ともに聽聞申すべくさけれども厭かぬふかきみ法ぞ

かみのされなんどのやうな物にても佛物とこそ思召さると
 予が申すこと何事も金言よ心をとめてきくべしこそ
 御病中不思議なることあるをわれ氣をとりなほしいふとのたまふ
 さつくりとしたるがよろしぐづくとちいさい聲でいふのもわるし
 法門と庭の松とはいふにあがり佛法と世體たしなみによる
 ことぐく佛物如來聖人の御用にもるゝ事はあるまじ
 兼縁へ物を下され候を冥加なきとて御辭退せらる
 つかはされ候物をたゞとりて信をとれよと仰せられたり
 信なくば冥加なきとて佛物を受ぬやうなり曲もなきこと
 我するとおもふかよみな御用なり御用にもるゝ事やあるへき

三百の條々あれど信一つはつからおはり貫き通す

二六八

無題涙笑

一 我いのち

我が命あまり長しと思はれず明年寒中越すかこさぬか
我が命まだ短くも今死ぬもやはり我身は至極しあはせ
病むもよし病まぬなほよし何もかもはかられをる身ぞとおもへば
此儘がほとけに呼ばれ往く相あらありがたと稱ふる六字
此儘がほとけに守られ導かれ船に乗せられ往く相なり
教團は自然の戒と人いへりなるほどさうぢやせめあはぬ國
教團はお慈悲の世界彌陀の國鬼も大蛇もをれど其儘
せめあはず規則一條なけれども無爲にして化す自然の淨土

下度より加減すなはち我が淨土お慈悲の世界罪ゆるされ
罪ふかき身といはんより耻かしき鑑三文のねうちなき身と
されどまた罪とはつゝみかくすてふ意なりといはゞ罪ふかき身ぞ
罪障の有無には心かけずして唯彌陀たのめ御名を稱へよ

二 婆婆の夢

ありがたやあらおもしろの婆婆の夢此儘大悲光明の中
み佛の教のまゝにうちもたれ唱ふるのみの身こそ安けれ
お慈悲ある人の家こそたのしけれ守護の諸天もはなれたまはず
あなうれし人と生れし甲斐ありて法の花見て今日もくらしつ
世の中に生きし甲斐ある我身かな往還回向たゞ惠まれて
世の人に憎まるゝとも彌陀佛に可愛がられて何不足なし

三 兩手引かれて

釋迦彌陀に兩手引かれてちがちがと歩む相を歸命とはいふ
釋迦は教彌陀は行なり我は信導かれゆく相これ證
其人を知らんとすれば友を見よ佛や菩薩を友とする人
犬猫のやうな人をば友とする人の多さに如來を友と
釋迦世尊我親友とはのたまへり觀音勢至また善友ぞと
誰一人相手にしてのなき我を彌陀は我子と釋迦佛友と
信は南無行阿彌陀佛此六字知識教へて我證せしむ

四 深い中

信なくば彌陀佛見えず彌陀なくば信するを得ず信行は不離

われみだきるに切られず離られず深い中とはなりしものかな
朝夕に我は彌陀呼び彌陀もまたうるさい程に我を呼びづめ
彌陀と我呼びづ呼ばれつ二人連苦のない道中するがこれ信

五 無碍の佛

我が彌陀は無碍光如來我照らし知つて見抜いて許したまへば
和讃には智慧の光明一切の有碍にさはりはなしとのたまふ
煩惱のさはりはあれどそのまんまはりとならぬ故に無碍光
無碍光の彌陀なればこそ我救ふ我救ふのゑ無碍光如來
彌陀佛も我救はずば無碍光の如來といふことしかとわからず
我救ふ故に彌陀佛無碍光佛彌陀に手柄をさせしは我ぞ
荒れ狂ふ心の底もよく照らし其儘と呼びたまふ無碍光

無碍のゑに彌陀も救へば我もさく凡て許され不足なれば
一切を許して救ふ佛なくば我いかにせん狂はんものを

六 光の如來

無碍のゑに彌陀も救へば我もさく凡て許され不足なれば
光とは照して教へ導くを我今照され導かれ往く
光明の中に住むとは今のが我導かれ行く相なるなり
光明で照し導く其儘が彌陀につれられ往く相なり
照られて見れば恥かし我心繪にもかゝれぬ醜き姿
我の惡凡て許されをりながら人の惡をば凡て許さず

七 凡夫氣タツブリ

讀にいふ弘願眞宗にあひねれば凡夫念じてさるとといへり
 凡夫とはお座へも出せぬ恥かしきものぞと示し其儘と呼ぶ
 其儘のおほせは弘願眞宗ぞ凡夫のまゝで救はれゆくを
 凡夫とはそんなものぞと照らしつゝ呼んで育てゝ導きたまふ
 凡夫とは我事なりと今ぞ知る凡夫目當の彌陀の本願
 凡夫とは凡傭劣夫取柄なき身とも知らずにうぬぼれをるを
 凡夫とは自惚者の代名詞獨よがりの我身しらずを
 此凡夫目當の彌陀の本願と聞くからにはやたふとからずや
 真宗は凡夫のための教にて聖者のための教にあらず
 三毒もいたくおこらず善心もしきりにおこらば往生不定
 そのゆゑは凡夫のための本願と佛説分明なるが故なり
 凡夫げもなくばさてわれこの願にもれもやせんと心配あれど

凡夫げはたつぶりありて不足なししかれば往生いよく治定
 佛がねて煩惱具足の凡夫ぞとおほせたまへば目當は我ぞ
 このやうな我のためにぞおこされし彌陀本願と今ぞしらるゝ

八 不可思議尊

我昔彌陀とは何ぞと考へしこもありしが御苦勞様な
 考へて分る佛なら智者學者遠の昔に信じ居る筈
 考へて分る佛が何我を救はれようか不可思議尊ぞ
 不可思議といへばとて唯わからぬといふことでなし體驗の佛
 わからねどわからぬまゝに明らかにわかる佛が無碍光佛ぞ
 はからうてわかる佛に非ずして我はかられをるを知るのみ
 はかられをる身と知られ今はたゞはからひやめてまかすばかりぞ

このまゝがはかられをる身と知らず力すなはち本願力ぞ
はかられをる身としらばこのまんま不足のまゝで不足はいへぬ
不足でも不足のまゝがはかられをる身であると信するばかり
わがために無始よりこのかたはからうてゐて下さるゝ御方がほとけ
わたしよりわたしのことをよく知りてはからひたまふお方が如來
こんなよい御方にあはせ下されし方はすなはち釋迦如來なり

九 聲のほとけ

釋迦佛の教によりて彌陀佛にあふて助かる教行信證
釋迦佛の教にあふた其儘がこれ彌陀佛にあふたるすがた
本願にあふた外には信もなし信する外に證もなきなり
其儘でよいと許して下さるゝ方がすなはち彌陀如來なり

此方ガ無碍光如來本願力弘願眞宗そのまゝの聲

そのまゝの聲の佛にあひねれば逃げ上手でも逃げやうもなし

一〇 有愛有疑

そのまゝに逃げやうもなく疑ひもはさむ餘地なしまかすばかりぞ
本願に疑晴れて今ぞしる我れ疑の塊なるを

我身これ無明煩惱みちみちてねたみそねみのかたまりと知る
證文に凡夫といふは欲多くいかりはらたちそねみねたみて

死ぬるまできえずたえずとかの水火二河のたとへにあらはされたり
信知とは煩惱業の衆生をば導きたまふと知るなりとあり
讀にいふ無明煩惱しげくして塵數の如く愛憎違順

源信の横川法語の其中に妄念凡夫の地體といへり

妄念はもとより凡夫の地體なりこの外別に心なきなり
 臨終の時まで一向妄念の凡夫とこゝろを念佛すべし
 妄念の中より申す念佛は濁りにしまぬ蓮といへり
 愛欲と順境はよく我心を引きつけて醉はしむれども
 地上にはねたみや疑なきの愛あくなき順境ある筈もなし
 無愛無疑天地は淨土に往かざれば得られず今は愛疑の天地
 さればとて急いで参りたくもなし冷飯食ふても娑婆に居りたい
 有愛無疑願へど結果無愛有疑やくにせはしく愛して居れず
 愛順をねがひ憎違をきらへども憎なき愛のありやうもなし
 無愛無疑願はんよりは有愛有疑やはりこの儘不足はいへぬ
 不足でも不足なき身にはからはれをる身とおもはぬわけにはいかぬ
 そのまゝと呼ばるゝことが南無阿彌陀はいこのまゝと答ふる六字

— うれしはづかし

あらうれしうれしけれどもはづかしや凡夫の喜び御座へも出せぬ
 屁でもない事に怒りて鼻糞のかけにもたらぬ事を喜ぶ
 喜ぶもまたかなしむも凡夫には五欲はなれてありやうもなし
 ふざけてもすまし込んでも其中味心の中は三毒五欲
 喜ぶも泣くも笑ふも同ねだん其體五欲土の人形

三 牛も藝者も

西行も牛も藝者も同ねだん土で塊めし伏見人形
 あはれてもにこゝ笑ふて暮しても何れ五欲の土の人形
 色と欲うまく來るときこゝとうまく來ぬときあはれるまでよ

色と欲かなへば順境かなはねば曇悲逆境みな愚痴の相
色と金食ひ氣と名譽と我盡がかなへば何時もにこく
其代りかなはぬ時は炎魔面さては幽靈さては苦虫
かくもまあ照らされ見れば恥かしやこれからどんな顔してをらふ
どんな顔してをつたとて同じ事それでは元のふくれ面かな
ふくれ面にこく面も泣き面もそこは御自由勝手にめされ

三 ふくれ面のあと

本當に自由勝手ぢやおれの顔おれでしかめる遠慮はいらぬ
遠慮するわけではさらになけれどもふくれた面のあとがくるし
くるしけりやふくれぬ方にするがよいところがさうはいかぬでこまる
こまるとは困つたはなし困るからいよいよ困るこまらぬがよい

こまらぬがよいにきまつた事なれどさうはいかぬで矢つ張り困る
さうまでもこまつてくれりやこりやこまる困らぬ妙法教へてやらう
よくもきげ如何に困るもそのまんまかすばかりぢや南無阿彌陀佛
困るとき稱へて見ても中々に困らぬやうにならぬで困る

四 まじなひの六字

此の六字困らぬやうになるためのまじなひでないそこをよくきけ
まじなひのために稱へた罰でどもいよいよ困る事は當然
御祈禱やまじなひ許さぬ真宗にお前の六字まるでまじなひ
其罰で今日まで困つて許り居る回心懺悔とあやまりめされ
懺悔でも何でも致さう夫故に困らぬやうにお願ひします
まじなひの六字でいかんといへばまたお願ひすると祈禱の六字

お願ひをするで叶はぬと困るなり願ひなき身になつたらどうぢや
 願ひなき身とは最も願はしき事ぢやがさうはいかぬで困る
 困らずによく聞けそこをよつくきけ我願ふのを願かなはぬ
 願ふのにあらず願はれる身なり誰に願はれるをどといふに
 彌陀佛に願はれる身が我身なり其願ひをば本願といふ

三 我が願ひ

我々の願ひ數々多けれど其願ひをばしらべてみれば
 火から水出すよな無理な事ばかり願ひをるとはお氣がつかぬか
 引臼を箸でさすよな事ばかり思ひをらずや願ひをらずや
 鬼の面それとも知らず人何で惚てくれぬと呪ひはせずや
 人の倍遊んで居て人の倍幸福者とならんと願ひ

遊び好きふてゝあばれて我儘でそして福神宿さん算り
 人と思はぬ其癖に我を佛と見せうの所存
 人様の御機嫌取るは大嫌ひ人に取らるゝ事が大好き
 そしてゐて其言ひ草が面白い人猶被り我は眞實
 眞實に違ひなけれど泥棒の眞實なりと知らうともせず
 猫被り第十九願眞實は第十八願なりと説法

眞實の十八願の人ゆゑにあばれ通してをるはよけれど
 あはれても人にほめられたい願ひそれも眞實十七願か
 十七願諸佛にほめられたい願ひほめられたいが十七願か
 學問も智慧もなけれど自惚と意地と我慢で通す勇猛

彌陀佛もはだしで逃げる程の願八萬四千の願はあるども

一つとて願ひの叶ふやうな願ないのが不思議不可思議の願

この願ひもしも叶へば亦二つ三つ四つ五つ六かしの願

不自然な無理な願ひを立てながら願叶はぬと世をも呪ひて

祈りにはためしなきこそためしなれ願叶はぬ夫が眞實

吾々に碌な願ひもなけれども飢渴寒暑の願は恕すべし

食ふためにはたらく迄はよけれどもそれから上は言語同斷

寒暑をば凌がんために着る迄は止むを得ざれど上はきりなし

雨露しのぐための住居は厭はねど庵榮住宅魔の宮殿ぞ

衣食住程々にして此儘で満足できる法もあるのに

はてしなき願ひ起して我と我が自繩自縛と身を苦しむる

海よりも深き欲望満さんと大願立てし洞欲菩薩

天の星落さんとするよりもまだ叶はぬ願ひばかり起して
出来るなら天下の愛を一身に集めて得意満面だらん
村中の田地を一人で所有して村民一同小作にせんと
一人にならんとするの願ひなり他の人々を皆ふみにぢり
こんな無理不自然な願ばかり立て自損損他の道行く身の名
阿彌陀佛見るに見かねて我がために四十八願たてたまふなり

一七 我がための願

彌陀佛の四十八願悉く皆我のため起されしなり

我なくば彌陀も本願起されず我もし聞かずば願は成ぜず

我一人聞かせんために起されし願の名厭でも聞かねばならぬ

阿彌陀佛我に聞かせてどうしようとあなたの方には都合なけれども

聞かんば我落のゑ阿彌陀佛聲をからして呼びかけたまひ
聞いてくれお前一人にかゝりて今今まで待ちにこがれて
何時聞いてくれるかしらんそばから待つてをるをよ聞いてくれぬか
一つとて叶ひさうにもなき願をたてゝかなはぬと泣きをるばかり
そんな無理不自然な願叶ふ筈なけれどもしも叶ふにして
影を追ふ愚漢の如くその影は追へば追ふ程追ひつけぬやう
其願ひ叶へば叶ふ程はてしなくしてつひに満足できぬ
人間の欲望はこれ渴愛ぞ渴して鹽水呑むが如くに
満たされる後から更に數倍の強さを以て渴き求める
其やうな満足出來ぬ願立てゝたびれもうけに終らうよりは
願もつて力をば成じ力もつて願をば就する六字をきけよ
かくもまあ先手をかけて呼びたまふほとけありとは我知らざりき
我々の願ひは皮相の見にして出來心にぞ屬するものぞ
我ながら我が本心は何物を要求しをることをば知らず
夫故に我が衷心の欲求は永劫満たされうる見込なし
夫故に如來はこれを知りたまひ我がため願ひ我がため行じ
六字をば成就し汝の本望を遂さす見込たつたゞ來れ
見込だけたちにあらず其志願満足せりと告ぐるが六字
本願は我らの願と事かはり自然眞實みなかなふ願

一八 哀心の欲求

此の六字お前のために起したる本願ゆゑに志願を満たす
此六字無明長夜の暗を破し衆生の志願よく満足す

かくもまあ先手をかけて呼びたまふほとけありとは我知らざりき
我々の願ひは皮相の見にして出來心にぞ屬するものぞ
我ながら我が本心は何物を要求しをることをば知らず
夫故に我が衷心の欲求は永劫満たされうる見込なし

夫故に如來はこれを知りたまひ我がため願ひ我がため行じ

六字をば成就し汝の本望を遂さす見込たつたゞ來れ

見込だけたちにあらず其志願満足せりと告ぐるが六字

本願は我らの願と事かはり自然眞實みなかなふ願

全宇宙皆賦與するに非ずんば満足できぬ心なれども

本願を信するのみで限りなき我願はみな満足できる

あら不思議たつた六字の丸薬で此胸腹がふくれるは妙

何見ても何を聞いても何あるも満たされざりし心なりしが

その儘のたつた一聲聞くのみで不足ないとはこれは不可思議

我々の根本志願満たす故本願といふ破暗満願

此の我を満足させんと阿彌陀佛本來願じたまよ本願

本願を信ぜしめんの御本願信ぜば我の本願かなよ

一九三 信 釋

信卷の三信釋にはねんごろにこのいはれをば説きのべたまよ
我等みな無始よりこのかた虛假誦偽眞實心なく清淨心なし

こゝをもて苦惱の衆生をあはれみて不可思議永劫修行したまふ

圓融無碍不可思議不可稱不可説の至徳名號成就したまふ

至心をば一切煩惱惡業の邪智の群生に回施したまへり

この至心至徳の尊號を體となす則ち至心は利他の真心

群生のために勇猛無退にて世を利益する大願圓滿

雜毒の行をば回して求むとも不可なりそれゆゑ至心をうげよ

信樂は満足大悲彌陀佛の圓融無碍の信心海ぞ

このゆゑに疑蓋まじはることはなししかれば之を信樂といふ

利他回向至心を以て信樂の體とするゆゑ他力信心

衆生みな無明の海に沈没し諸有に流轉し衆苦に繫縛

信樂は本來法爾なきゆゑに無上の功德值遇しがたく

一切の凡小はみな最勝の淨信獲得することかたし

貪愛心善心けがしつねによく瞋憎の心法財を焼く
 頭の火はらふが如くはげみても雑毒の善虚假の行なり
 虚假の行雜毒善にて光明の淨土に生ずることは不可なり
 この心如來の大悲心故に報土正定の因となるなり
 阿彌陀佛苦惱の有情を悲憐して無碍廣大の淨信をもて
 諸有海に圓施したまへり是をこれ利他眞實の信心といふ

三 信 心 佛 性

大信心卽ち佛性佛性はすなはち如來涅槃經說
 菩提因無量なれども信心を説けばすなはちすでに攝盡
 聞あるも思より生ぜず此信は信不具足の信と名くる
 道ありと信じて得道の人ありと信ぜず之を信不具足と

聞此法歡喜信心無疑者速成無上道與諸如來等

この法をきいて信心歡喜して疑なきもの道を成せん
 如來よく一切衆生の疑をながく絶たしむ華嚴經說
 佛はその心の所樂にしたがひて悉くみな満足せしむ
 (佛斷疑他力義顯はし信具德佛智信心なるを顯はす)

三 道 元 德 母

二信はこれ道の元なり功德母一切諸々の善法長養

二信はよく疑綱斷除し愛流出で涅槃無上道開示せしむる

三信心は無垢濁清淨煩惱を減除す恭敬心の本なり

四信心は法藏第一の財となす五衆行を受くる清淨の手

六信は能く惠施して心におしむなし七信よく歡喜し佛法に入る

八信はよく智功德とば增長す 信よく必ず佛地に到る

二信はよく諸根を淨明利ならしむ 二信力堅固能く壞するなし

三信はよく永く煩惱の本滅し 三佛の功德によく向はしむ

四信はよくその境界に所着なし 五諸難遠離し無疑を得せしむ

六信はよく衆魔の路をば超出し解脫道をば示現せしむる

七信はよく功德の種を壞するなし 八信よく菩提樹を生長す

九信はよく最勝の智を増益し 一切佛を示現せしむる

三信奉三寶

若し常に佛を信じて供養せば彼の人の佛の不思議を信ず
若し常に尊法信奉するときは佛法聞くに厭足はなし
佛法をきく厭ひ足る事なくば其人の法の不思議を信ず

(佛法に厭足なれば法不思議さくといへりと聞書にいふ
世にもわがすき好む事知る上に猶よくしりたく思ふものなり
佛法をいくたびきもあかぬなりしりてもく存じたきなり
聞くたびに珍らしければ杜鵑いつも初音の心地こそすれ)
(三寶中第三信奉僧寶中展轉重疊三十功德)

一もし常に清淨僧を信ずれば信心不退轉をうるなり
二もしも今信心不退轉うれば彼人信力よく動くなし
三信力をもし得て動くことなくば則ち諸根淨明利得ん
五もし善知識に親近するを得ば能く廣大の善を修集す
六もしもよく廣大善を修集せば彼の人大因力を成就す
七もしも人大因力を成就せば則ち殊勝決定解を得

- 八 もし殊勝決定の解を得る人は諸佛のために護念せらる
もしも人諸佛に護念せらるれば則ち菩提心を發起す
- 一〇 もしもよく菩提心をば發起せば佛の功德を勤修せしむる
もしもよく佛の功德を勤修せば則ち如來の家に生れん
- 一一 若し生れ如來の家に在るを得ば巧方便をよく修行せん
善をして巧方便を修行せば信樂の心清淨を得
- 一二 信樂心清淨なるを得るときは増上最勝の心を得るなり
増上の最勝心を得るときは則ち常に波羅密修習
- 一三 若し常に波羅密修習するときは則ち摩訶衍を能く具足せん
もし如來體常住を見るときは法永不滅なるとば知らん
- 一四 法永不滅せざるをばよく知らば則ち辯才無障碍を得ん
もしもよく辯才無障碍を得れば無邊の法をよく開演す
- 一五 無邊法もしよく開演するときはよく慈愍して衆生を度せん
もしもよく慈愍し衆生を度すときは則ち堅固大悲心得ん
- 一六 もしもよく堅固の大悲心得れば則ち甚深の法を愛樂
甚深法もしよく愛樂するときは則ち有爲の過をば捨離せん
- 一七 もしもよく有爲の過を捨離すれば橋慢及び放逸離る
橋慢と放逸をもし離れば能く一切の衆生を兼利す
- 一八 もしもよく一切衆生を兼利せば生死に處して波厭なからん
もしもよく一切衆生を兼利せば生死に處して波厭なからん

三 招 嘘 勅 命

欲生といふはすなはち諸有衆生招喚したまふ如來勅命
 (回向する一物もたぬ其まんま我に來たれと呼びたまふ聲)
 其まんま來いと仰しやるみ心を信ずるはこれ欲生の體
 欲生は回向心なり然れども定散自力の回向にあらず
 有情みな煩惱海に漂沒し眞實清淨の回向心なし
 是故に阿彌陀如來は一切の苦惱群生あはれみたまひ
 回向心首としたまひて大悲心成就すること得たまへるなり
 真實の欲生心を諸有海に回施したまへりこれ回向心
 本願の欲生心の成就文至心に回向したまへり等
 阿彌陀佛苦惱の有情を捨てずして己れが功德回向したまふ

作願して淨土に往生せしめんと大悲心回施するを往相
 阿彌陀佛苦惱の衆生を觀察し應化の身を示し教化す
 阿彌陀佛生死園中に廻入して遊戲し自在に教化したまよ
 金剛の心おこすにあらずんば永く生死の元を絶たんや
 まのあたり慈尊に隨ふことなくば長き嘆きを何免れん

四 三 信 卽 一

しんに知る至心信樂欲生は言異なれど其意一
 なぜなれば三心疑蓋無雜の「眞實」一心金剛真心
 金剛の真心是を眞實の信心といふ必具名號
 信心は必ず名號具すれども名號に信具すと限らず
 是故に論主はじめに我一心とはのたまへり信心爲本

大信海貴賤や男女老少をいはず造罪の多少を問はず
非行非善漸頓定散正觀と邪觀や有念無念にあらず
尋常にあらず臨終にもあらず多念にあらず一念にあらず
唯是は不可思議不可稱不可說の信樂是を喻ふるときは
阿伽陀一切の毒を滅すごと誓願の藥智愚毒滅

三 行信の佛

行卷に斯の行信に歸命せば攝取不捨の阿彌陀と名づく
徳號慈父光明の悲母なきときは能所因縁かけそむきなん
父母あるも信心業識なきときは光明土には到ることなし
眞實信業識はこれ内因ぞ光號の父母これ外縁なり
かく内外因縁和合して以て報土の眞身得證すなり

宗師いふ以光明名號攝化十方但使信心求念と

我救ふ佛は六字のほとけなり彌陀(行)を信する行信の佛
行卷の偈前の文に誓願に就て眞實の行信ありと

眞實の行願諸佛稱名願信願至心信樂の願

これはこれ選擇本願の行信ぞ大經宗致眞宗正意

四十八何れ愚はなけれども十七、八は彌陀の振袖

十七は眞實行の願にして十八眞實信の願なり

十七願諸佛稱讚の願にして十八往相信心の願

四十九體驗者すむるまゝにそれをきし信する相行信の佛
十七願諸佛勸むる聲にして十八は我信じ受くるを

其名號聞きて信心歡喜する六字全領これ信心ぞ

名號をきくといへるは六字をば無名無實にきくにはあらず

おいばれを知識にあひて教へうけ南無阿彌陀佛を會得するなり
 此六字南無とたのめば阿彌陀佛たすけたまふといふ道理なり
 南無阿彌陀佛とはわれらかくたすけられるすがたをさしていふなり
 南無阿彌陀佛とは成就の文にては聞其名號信心歡喜
 南無の二字歸命と發願回向とのふたつの心ありと知るべし
 また南無といふは願なり阿彌陀佛といふは行なり願行具足
 此六字往生すべき信心のいはれをあらはしたまへる御名ぞ
 名號をきくといへるはおほやうにきくにはあらず知識にあひて
 六の字のいはれよくきくひらきぬれば往生すべき信心道理
 南無歸命歸命は信心阿彌陀佛即是其行の行體ゆゑに
 名を以て我を救ふの阿彌陀佛名とは即ち南無阿彌陀佛
 我が彌陀は信する我と信ぜしむる如來と一體の行信の佛

歸命とは本願招喚の勅命とあれば我彌陀招喚の佛
 即是其行選擇本願是なりとあれば我彌陀本願の佛
 弥陀經に阿彌陀今現在說法しかれば我彌陀說法の佛

三 回 向 の 如 來

和讃には南無阿彌陀佛の回向等しかれば我彌陀回向の佛
 謹んで淨土真宗を按するに往還二種の回向あり等
 往相の回向に就て眞實の教行信證ありとのたまふ
 そのまゝの聲に呼ばれて往くすがた教行信證回向の相
 往く相此儘回向願力を盤石動く聲が念佛
 そのまゝの聲に呼ばれてをる儘が光に照らされをるすがたなり
 略鈔に回向に二種の相あり一に往相二には還相

一には往相回向往相に就て大行と淨信とあり
 大行といふは則ち無碍光の如來のみ名を稱するをいふ
 斯の行は一切の行をみな攝し極速圓滿故に大行
 稱名は衆生一切の無明破し衆生一切の志願を滿たす
 稱名は憶念憶念は念佛ぞ念佛則ち南無阿彌陀佛
 願成就文の經にはのたまはく十方恒沙の諸佛如來は
 皆共に無量壽佛の威神功德不可思議なるを讚嘆せらる
 (十七と十八願の成就文等引きあるもこゝには略す)
 これ凡夫回向の行に非ずして大悲回向の行なるゆゑに
 不回向と名づく誠に選擇の攝取本願の無上大行
 超世弘誓一乘真妙の正法ぞ萬善圓修の勝行なりと
 淨信は利他深廣の信心ぞ念佛往生の願より出づる

二七 六字のほとけ

行信不二行全うじ信となり信全うじたるの大行
 これ除疑の獲徳神方極速の圓融威德廣大淨信
 若は行若は信みな彌陀佛の回向成就に非ざるなしと
 回向にも本典四法略鈔は行信讚には六字の回向
 行信も開けば四法縮むれば南無阿彌陀佛の六字一法
 行は彌陀信は我なり彌陀と我切るに切られぬ不離不二關係
 信は南無行阿彌陀佛我と彌陀共に六字の中にこそ住め
 信心の中に彌陀住み信の我彌陀の懷中の生活

此我を信ぜしめんとする外に彌陀の用きとはなきなり
今の大我六字稱ふる身となりし外には何の用きはなし
救はれし其體験を物語り喜ぶ丈が我が仕事なり
其儘と呼ばせ通しにしてくれと念願するがみ親の仕事
此六字彌陀と我との待合所うまい話も出来る所ぞ

二 行 信 四 門

行信は他力の妙旨互具互攝運用自在真宗肝要
今四門開き辨ぜん四門とは行信、信行、相別、體同
行信の義相辨ぜば行はこれ如來回向の法體にして
十方に普く流るゝ行にして德全ふじ名をば施す

信はこれ衆生所得の一心ぞ名を聞き信受するをいふなり

一には行信門とはいはくこれ從佛向生行前信後
眞實の功德の名號大行が衆生貪瞋煩惱中に
心中に投入はじめて御回向の清淨眞實の大信となる
濁水に寶珠投ぐれば其水の住みて清淨なるが如きぞ
所行をば全ふじ能信を成するを他力至極の宗規とはなす
もしも信行に依らざる其ときはすなはち眞實信にはあらず
信卷に至心は至徳の尊號を體となすとはいふものはこれ
二には信行門とは信はこれ信心行は信後稱名
もしも今從生向佛の邊なれば信前行後なるが故なり
大信心一たび發ればおのづから必ず稱名發るゆゑなり
佛行を行ず自力の行ならず水住み玉の現する如し
信の上の稱名全く法體に契賞しその德難思なり

もしも行信によらざる其時はすなはち眞實の行にはあらず
信卷に信心必具名號とのたまふ必具のゆゑに必發
第三に相別門とは行信の二法の相別を分別するを

もしも今行信門に約すれば法體大行と機受の大信
もしもまた行信門に約すれば信心正因稱名報恩

其義相信行二法差別あり確乎對峙し亂れざるなり

第四には體同門とはいはくこれ其體の一なるをいふなり
行と信相二なれども體は一其體一ゆへ義また融ず
もしも今行信門に約すれば大行大信機法一體
所聞處に在るを行とし能聞の處にあるを信と名くる
能所處を異にし法機相を別にすれども其體元來は不二
和讃には無上寶珠の名號と眞實信心一つとはいふ

もしも又信行門に約すれば念聲是一なるがゆゑなり
信心は内に潜める心にして行は外發の口稱なるなり
内と外と異なれど法體一にして融即自在無碍の信行
又讀に眞實信心の稱名は彌陀回向法不回向といふ

聞書に念稱是一といふことをしらずと申しまふらふときには
おもひ内にあれば色ほかにあらはるゝ信得し體は南無阿彌陀佛
信得たる體は念佛とこゝろうれば口も心も一つといへり
この旨をうれば行信と信行と二門亦一たゞこれ六字

二九 所聞能信

宗師いふ以光明名號攝化十方但使信心求念
如來よりいはゞ光號攝化にて信全ふじ行に在るなり

これをこれ所行とはなす顯行の宗規はこゝにありと知るべし

光明は無聲の名號名號は有聲光明なるがゆゑなり
衆生よりもしまた之をいふときは聞其名號信心歡喜

これ行を全ふじたゞ信にあり顯信宗規こゝにあるなり
行即信所行能信と分てども南無阿彌陀佛の義相なるのみ

寶章に南無阿彌陀佛といふはこれわれらが信心えたるすがたゞ
信心といふは六字のいはれをばあらはせるなりとこゝろえとあり

行信の兩卷宗致を一言に盡せるものぞ仰信すべし
行十七諸佛稱名信十八衆生聞名大行大信

合すれば本願成就文にあり聞其名號信心歡喜

是故に教行信證の四法これ能所聞信に過ぎざるものぞ
本典の總序の文に眞宗の教行證を敬信といふ

此文の教行證とはこれ所聞名義功德に過ぎざるものぞ

本願の生起本末これ所聞信の一法これを能聞
行卷に願力聞くにより報土真因決定等とはいへり

所聞法行全ふじ能聞の大信となす生起本末

能聞の信全ふじ行にあり故に行卷願力生

これ教は行に合してまた證は信に接して四法行信
四法要行信二法に攝在す教行に入り證信に歸す

行にして信具せんばこれはこれ選擇本願の行にはあらず
信にして行具せんばこれはこれ選擇本願の信にはあらず
行信不二されば四法の教相は唯一信心の安心に入る

もしも又機法に約していふときは行信はこれ能被法にて
總序文敬信眞宗教行證一家の教相たゞこゝにあり

も

所被の機は一切善惡大小の凡夫特に重罪凡愚行信を因とし證果に至るとき佛よりみれば自行得證の衆生よりも亦之をいふときは信より證に至るとはいふその衆生證に接するの信をとり所聞に屬する行卷宗規その證に接せしむる行をとり機受處に攝屬信卷宗規能具所具別體あるに非ずたゞ南無阿彌陀佛他力信心

三〇 安住無上道

先に引く華嚴の賢首菩薩品其後の文を亦左に引かんもしもよく安住無上道うれば一切の魔も壞する能はず深法忍うれば諸佛に授記せられ常に諸佛の前に現ぜん微密教解すれば諸佛護念せん佛功德にて自莊嚴せんもし佛の功德をもつておのづから莊嚴すれば功德身得ん

功德身得れば金山の如くにて光明莊嚴難思議ならん光莊嚴難思議なれば一切衆教化度脱し自在力得ん若し無量自在の力を得るときは即ち諸佛の刹を嚴淨甚深の微妙の法を解説せば不可思議の衆を歡喜せしめん不可思議衆歡喜せしめば四辯力具足し自在に一切衆度す法身の功德と智慧が具はれば一切諸法の實をさとらん授記うれば法身充满遍虛空十方界に安住不動

三 光 明 莊 嚢

智慧自在光明莊嚴不思議にて說法教化自在を得たり梵音聲衆生の性に隨うて諸法を分別之を化導す大苦海衆生のためによく忍び彼と同じて苦とは思はず

彼の解す語言の音に隨ひてために眞説き解脱せしむる

一切語知りたまふこと不思議なり説法三昧力とは之ぞ

衆生をば安穩にする勝三昧一切衆生度せんためなり

大光明放ち思議すること難し此光明で群生救ふ

放たるゝ光を善現光といふ佛法僧道顯現すれば

若し衆生此光明に遇ひぬれば如來顯現道究竟せん

清淨光一切光を映蔽し闇冥除滅し十方照らす

かの光濟度と名く一切衆覺悟せしめて度脫せしむる

四流渡り無畏解脫處に示導せん舟船作り衆を度すれば

かの光除愛と名く渴愛を捨離し甘露を思樂せしむる

甘露雨を以て衆生の諸の渴愛滅除す故除愛光

かの光歡喜と名く佛菩薩歡喜愛樂無師寶求む

かの光愛樂といふ一切衆覺悟し三寶を愛樂せしむ

かの光德聚といふ其所求に隨ひて惠施したまふがゆゑに

かの光深智と名く一法門一念中にみな解らしむ

かの光無慳と名く貪惜を除き慳心調伏せしむ

財寶は常に非すと解知せしめ浮雲の如しと解らしむれば

かの光忍莊嚴と名くべし嗔恚と増上慢を捨離して

柔和法衆生惡性忍ぶこと難きものにも堪忍せしむ

かの光寂靜といふ亂意者を甚深三昧に住せしむれば

かの光慧莊嚴と名くべし愚痴者を覺悟し緣起知らしむ

かの光佛慧と名く無量佛蓮華の上に坐するを見しむ

かの光無畏とは名く恐怖のもの安慰し惱害離れしむれば

かの光安穩といふ病者の苦滅除し正受三昧樂得

かの光見佛といふ命終者に念佛三昧見佛せしむ
臨終に念佛勸め尊像を瞻敬せしめ佛に歸せしむ

かの光樂法といふ法をきゝ講說書寫し愛樂せしむ
かの光妙音といふ世間諸有聲を如來の音と聞かしむ
かの光示現寶とは名くべし諸貪に無盡寶藏得しむ

三 佛 德 讀 嘆

（また華嚴世間淨眼品の偈頌得法讚佛の文左に引かん）
平等の妙法界は悉く如來の身にみな充滿す
一切の歸とならんため世に出でゝ無上正教の法たてたまふ
たぐひなき相好光明十方を照らし淨眼明珠の如し
一切の愚痴の闇をば消滅し無上の智慧に超昇せしむ

不動自在尊見たてまつる事を得ば無量悅樂の心をば生ず
痴を以て心を蔽ふ衆生海無上智慧燈それゑ名燃す
其のために寂滅無上の法を説く即ち方便眞淨の眼

佛如來音聲聖碍なきゑに化を受くるもの聞かざるはなし
佛境界甚深難思議衆生類能く測量し得るものはなし

如來よく群生開導無上道願樂せしめよく志求せしむ
如來よく甘露の法を雨らし器に隨ひて充滿せしむ
佛正法障礙するなく十方の無量の界によく周満す

佛微妙總持門説き清淨の慧眼照見衆生調伏
衆生みな煩惱海に沒在し愚痴邪濁にて大いに恐怖す

大光明放ち一々光明中無量佛あり衆生をば度す
一音を以て演説餘すなし智慧の光は心を照らす

妙音は皆解すること得るゆゑに其語を同じうするとと思へり

梵音は普く至り無上なり意深くして皆満たさしむ

佛身は無相無碍にて普示現じ淨音周ねからざるはなし

法界に如來法身等しくて普く衆生に應じ對現

一切の世間上妙の樂はこれ聖寂滅樂を最勝となす

無垢妙法如來の寶なり清淨の勝眼實の如く見るなり

法雨をば疑地の枯林に雨らしみな潤ひを蒙り益す

如來演べたす所の一妙音廣大法海説き餘すなし

一切の衆生の慢の高山も佛の十力碎き無餘なり

一切の世間諸の光明も佛身一毛の光に及ばず

三十方便力

(また華嚴光明覺品第九なる方便力の文をば引かん)

方便の言釋するに三義あり一に眞實すなはち方便

二には佛果自在の徳用を修成の加行方便力を

三には差別の智用を無碍の慧に對して之を方便といふ

一智慧無量妙法無倫究竟して生死大海の岸を度りて

壽命無量光明は無比到彼岸此功德をば方便力ぞ

二所有佛法皆明了に三世法常に觀じて止足想(厭倦)なし

縁ずれど妄想起さず了達す此難思者を方便力と

三觀衆生常に樂ふも無生想諸趣を見れども亦趣想なく

禪寂を常に樂ふも所着なし此無碍慧をば方便力と

四諦かに諸法の相を觀察し専ら涅槃の道を正念

解脱道樂ひ不平を捨て離る寂滅人を方便力と

五調御士の佛の菩提に隨順し一切の智をよく攝取して
 衆生化しよく眞實に入らしむる住佛心を方便力と
 六深法義佛說きたまひ入らしめて深廣の智慧障礙するなく
 至處道に到つて自覺の道行す此自在修を方便力と
 七涅槃なほ虛空の如く恒住し心に隨ひ化現するなり
 所依性にして其相は非相なり到難到者方便力と
 八一切の世界の始終成壞相悉くよく諦かに知り
 日月數年歲時節觀知する此時數智をば方便力と
 九群萌類業に隨ひ生死受け有色と無色有想と非想
 所有名字其所趣をよく了知する此住難思方便力と
 一〇三世みな佛の所說に隨順し諸有の言說皆能く了す
 三世法平等と知る眞實相此無比解をば方便力と

三十四是其行(是則佛境界)

(直ぐ次の十是其行の文引かんかの善導の六字釋には
 南無歸命亦是發願回向之義言阿彌陀佛即是其行と)

一大苦行修習精勤無厭怠難度海度し大音獅子吼

一切の衆生の類を悉く度せんとするが是れ其行を
 二衆生みな愛慾海に沈没し痴惑重網昏冥怖畏す

堅固の士是を斷除し超勇し世雄とはなる是れは其行

三放逸者五欲に醉ひて妄想を興し大悲の障となるゆゑ

不放逸修して佛法を奉行して誓ふて度すは是れは其行

四我に著し衆生無窮に唯求め無量永劫生死に流轉
 妙法を慧者よく宣べて寂滅に入らしむるものは其行

苦の衆生怙むものなく救護者なく惡趣に淪み三毒熾然大猛火常に焚ゆるを見て誓ひ苦を度したまふ是は其行

衆生みな正道失し迷惑し邪徑を行じ閻宇に入る

正法燈現じ照明となり誓ひ法を見せしむ是は其行

諸有海に衆生漂溺はてしなく能く濟ふことなきを見たまひ

彼のため大法船を興造し皆度を得しむ是は其行

衆生無知本實を見ず踰難の中に迷惑痴狂するゆゑ

斯の苦を見法橋設け正念に昇らしむるは是れ其行ぞ

生死獄長夜に老病死の三苦競ひ侵して逼るをば見て

甚深法聞信心に疑惑なく了性空寂驚怖なくして

六道に形を現じ一切の身に同ぜらる是は其行

三 大 名 稱

一念に普く無量劫觀じ去なく來なく亦無住なり

生滅法みな眞實の相と知り諸方便超え十力成す

大名稱十方國に偏満し諸難を離れ歡喜せしむる

諸世界に普く至り清淨の微妙の法を敷演したまふ

衆生をば度せんがために正心に佛を奉じて淨依果を獲る

如々相に了達すれば自在力得て十方に現ぜざるなし

供佛より意柔忍よく深き禪定に入り法性觀ず

一切衆歡喜し如來に向はしめ速かによく無上果成す

佛に法問ひたてまつり其心湛然として信佛不退

有爲の法有無に非すと了達す此人眞に佛を見るなり

無量なる淨樂の心十方に満ち眞實の義利を廣説
實際に住し勤搖するなくば此人功德如來に等し
妙音聲聞き無上法達得し淨法輪を常に轉する
聞き已り法性悟る無上觀此人常に佛身を見る
十力空如幻とは見ず見ゆれども所見なきこと盲觀の如し
分別の相を取るもの佛を見ず畢竟離着眞如來見ん
衆生みな業に隨ひ種々に別知ること難し佛亦然り
十方に満ちて無碍なり知り難し是を知るもの大導師なり
遍十方譬へば空中に無量刹依止し來なく去なきが如し
生成も滅壞も本來無所依なる如く佛亦空に遍滿

三十六最吉祥

無碍如來名稱十方に聞ゆなり諸吉祥中最第一ぞ
佛來り此摩尼殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
無邊佛智慧は甚深世間燈諸吉祥中最第一ぞ
佛來り清淨殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
喜目如來明淨にして見れど無碍諸吉祥中最第一ぞ
佛來り寶藏殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
燃燈佛世間を照らし色鮮潔諸吉祥中最第一ぞ
佛來り此殊勝殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥
饒益佛論師子にして世間利す諸吉祥中最第一ぞ
善覺佛師あるなくして德無量諸吉祥中最第一ぞ
佛來り妙華殿中に入りたまふ是故に此處最も吉祥

無量佛光り際なく世中雄諸吉祥中最第一ぞ

佛來り妙香殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥

無去如來疑惑を離れ論中雄諸吉祥中最第一ぞ

佛來り此普眼殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥

無量慧佛人師子にして衆德具す諸吉祥中最第一ぞ

佛來り善嚴殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥

功德佛光り普照し世間利す諸吉祥中最第一ぞ

佛來り勝寶殿に入りたまふ是故に此處最も吉祥

三七 賑かな家

はからずも華嚴の世界に長逗留久し振りにてうちにかへらう
吾家は華嚴や涅槃の寂靜な世界と違ひ賑かな家

賑かな天地に違ひなけれども賑か過ぎて危い世界

人様の事は上手に判けれども己の事になると真くら

眞暗な判官様は其實は色と欲とに目の狂ふ人

人生の原動力は色と欲もし之なくば「なまこ」か「くらげ」

色と欲なければ世の中動かねど深くはまると首も回らず

早き瀬を向ふに渡らんとするときは瀬に向ひて舟漕ぐ如く
眞直に向ふに向ひ漕ぐときは瀬に流されて向ふへは着けず

人生の早瀬を渡る其時も亦其通り命かけにて

我目ざす向ふの岸に行かんとし此まゝ心に棹さすときはは
知らぬ間に心の早瀬に流されて決して向ふの岸にはつけぬ

一心に己を忘れ世にそむき漕ぎ行くさへも中々つけぬ

身を捨てゝ望み求めし人にして初めて聞ける其儘の聲

兎に角に大法聞くば眞劍の終生事業なりと知るべし
大根の煮すぎと佛法の聞きすぎはなしといふこと真理なるかな
聞けよ聞け命がけにてよく聞けよ聞けば聞える其儘の聲

不許復製

昭和三年十月廿五日 印刷
昭和三年十月三十日 発行
昭和五十三年二月廿三日 再版

〔定価壹千円〕

著者 安 溪 雅
発行者 富山県射水郡大門町安吉四三四
富山県射水郡大門町大門一〇
河合印刷所